久宝寺遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告88

Ⅰ　久宝寺遺跡（第25次調査）
Ⅱ　久宝寺遺跡（第31次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第46次調査）
Ⅳ　久宝寺遺跡（第55次調査）
Ⅴ　久宝寺遺跡（第58次調査）
Ⅵ　久宝寺遺跡（第60次調査）
Ⅶ　久宝寺遺跡（第61次調査）

２００６年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

(財) 八尾市文化財調査研究会報告 88　正誤表

頁	行	誤	正
9	26	本田奈津子	本田奈都子
131・132	柱	V久宝寺遺跡第61次調査(KH2004－61)	V久宝寺遺跡第58次調査(KH2004－58)

久宝寺遺跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告88

Ⅰ　久宝寺遺跡（第25次調査）
Ⅱ　久宝寺遺跡（第31次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第46次調査）
Ⅳ　久宝寺遺跡（第55次調査）
Ⅴ　久宝寺遺跡（第58次調査）
Ⅵ　久宝寺遺跡（第60次調査）
Ⅶ　久宝寺遺跡（第61次調査）

２００６年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市西部の久宝寺、西久宝寺、南久宝寺、北久宝寺、北亀井、龍華町を中心に東西1.7km、南北1.8kmに広がる縄文時代後期から近世の複合遺跡であります。

この久宝寺遺跡の南部には遺跡を横断するかたちで「旧国鉄竜華操車場跡」が占地しています。竜華操車場は龍華町１・２丁目に位置し、24.6haにおよぶ広大な敷地で、昭和13年に造られ、戦前・戦後の近畿圏の物流・経済を支える一大拠点としてその役割を担ってきました。ところが、高度経済成長の後半期には、高速道路網の整備・拡大で一般道の整備が進むなかでトラック輸送への急速な変換が進行し、鉄道輸送は衰退の道を辿ります。そして昭和61年の国鉄民営化に先立つ昭和59年に、多大な債務返還のための所有地売却処置のなかで国鉄竜華操車場は廃止され、その歴史に幕を閉じることとなりました。

同跡地については、昭和61年７月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され再開発が具体化したことで、昭和63年と平成８年に八尾市教育委員会、平成７年に(財)大阪府文化財調査研究センター（現　(財)大阪府文化財センター）により、遺跡確認調査が実施されています。これらの遺跡確認調査を経て平成９年以降は、大阪竜華都市拠点地区内の道路部分を中心とした基盤整備ならびに主要建物を対象とした発掘調査が、当調査研究会と(財)大阪府文化財センターによって継続的に実施されており、縄文時代晩期から近代に至る遺構・遺物が検出される等の多大な調査成果が得られています。

今回、大阪竜華都市拠点地区内の西部において、平成10～16年度に実施しました７件の調査（久宝寺遺跡第25次調査、第31次調査、第46次調査、第55次調査、第58次調査、第60次調査、第61次調査）の内業整理が完了しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、又、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　**前田義秋**

序

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他(平成16年２月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では北亀井町３丁目に包括される)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で平成10～16年度に実施した発掘調査の報告書を収録したものである。
1. 本書に収録した報告は、目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ－坪田真一・原田昌則、Ⅱ～Ⅴ－坪田、Ⅵ・Ⅶ－荒川和哉が行った。
1. 本書の編集は原田昌則が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の１/2500の地形図(昭和61年測量・平成６年修正・平成８年７月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)、国土地理院地形図「大阪東南部（1/25000)」(平成10年３月1日)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕の座標北を示す。国土座標数値については、平成14年４月１日から「日本測地系」から「世界測地系」への変更が行われているが、本報告では既往報告書との対応から「日本測地系」を使用した。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。

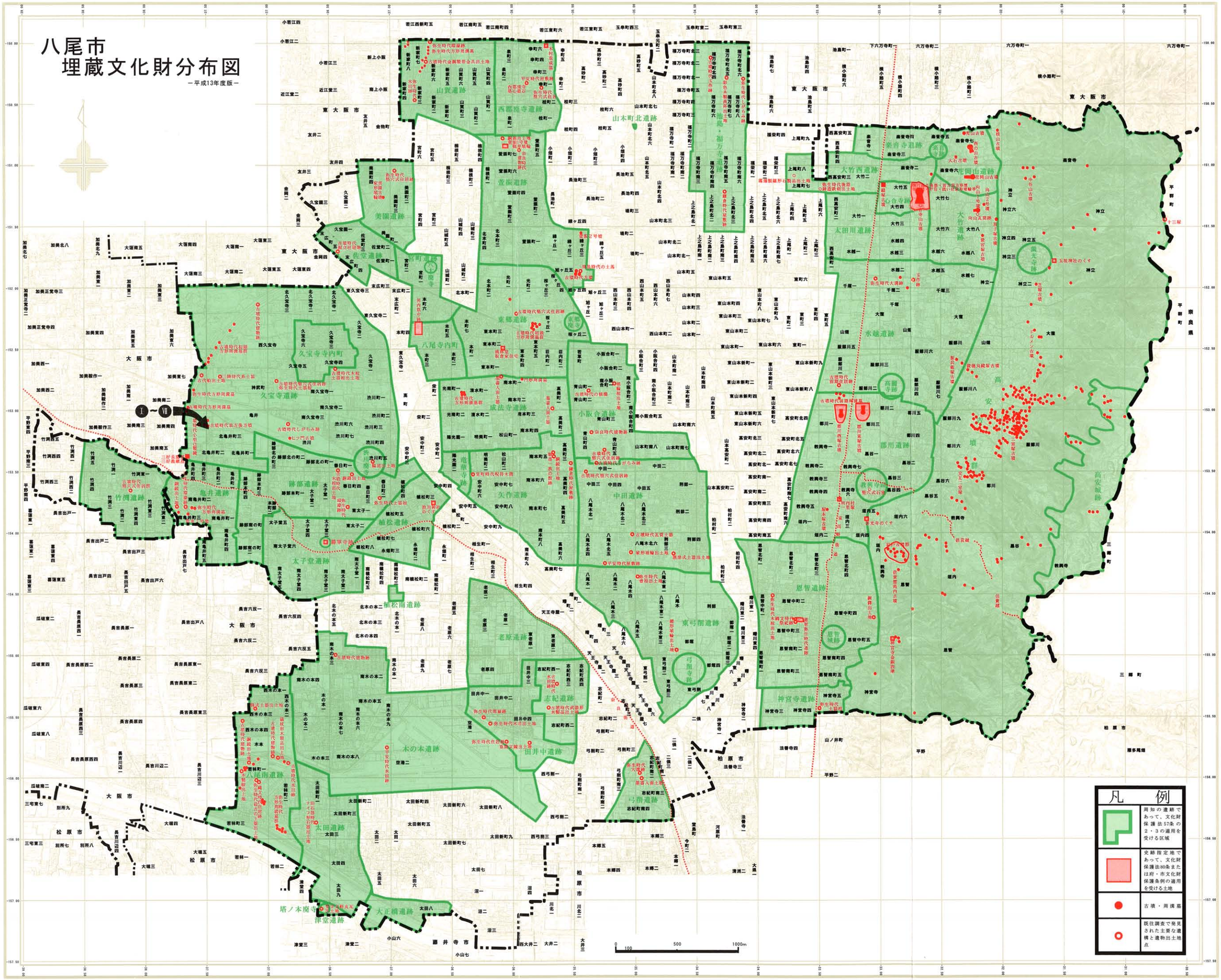
   井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　小穴・柱穴－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ
   杭列－ＳＡ　自然河川－ＮＲ
1. 遺構図面の縮尺は適宜決定した。
1. 遺物図面の縮尺は1/4を基本とする。実測図断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98－25）……1
Ⅱ　久宝寺遺跡第31次調査（ＫＨ99－31）……89
Ⅲ　久宝寺遺跡第46次調査（ＫＨ2002－46）……103
Ⅳ　久宝寺遺跡第55次調査（ＫＨ2003－55）……117
Ⅴ　久宝寺遺跡第58次調査（ＫＨ2004－58）……127
Ⅵ　久宝寺遺跡第60次調査（ＫＨ2004－60）……145
Ⅶ　久宝寺遺跡第61次調査（ＫＨ2004－61）……153
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

－平成13年度版－



Ⅰ　久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98－25）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市大字亀井他(平成16年２月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では北亀井町３丁目に包括される)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で、平成10～11年度に実施した竜華東西線・区画道路３号線・区画道路４号線建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第25次調査(ＫＨ98－25)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号　平成９年７月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が住宅・都市計画整備公団関西支社(現、独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成11年１月29日～平成11年７月15日に実施し、原田昌則・坪田真一・樋口(旧姓森本)めぐみ・古川晴久が担当した。調査面積は3022.5㎡である。調査担当者や調査期間の詳細は第３章第１節の第２表に記した。

1．現地調査においては、板野行伸・伊藤静江・岩沢玲子・小野沢健二・垣内洋平・樫木由佳・川村一吉・北原清子・蔵崎潤子・後藤　喬・小林範彰・佐藤光子・永井律子・中前和代・中村百合・水木純司・村井俊子・村田知子・山内千惠子が参加した。

1．整理業務は、平成17年４月～平成18年３月に実施した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤・岩沢・加藤邦枝・北原・竹田貴子・永井・中村・村井・村田・吉川一栄・若林久美子、図面トレース－山内、図面レイアウト－坪田、遺物写真撮影－垣内(一部、古川)が行った。

1．本書の執筆は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして坪田・原田が行い、編集は坪田が行った。

1．現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。
後藤信義・西村　歩((財)大阪府文化財センター)
独立行政法人都市再生機構西日本支社、(株)島田組、山本土木(株)

1．自然科学分析・測量については下記の機関に委託した。
【花粉分析】水谷睦彦(総合科学株式会社)
【木製品の樹種同定】パリノ・サーヴェイ(株)
【航空写真測量】(株)かんこう

1．本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式－古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式－古相～新相)に区別した。また当該期の土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(原田1993)に従った。

1．土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、59頁に提示した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過……1
第２章　地理・歴史的環境……3
第３章　調査概要……15
　第１節　調査の方法と経過……15
　第２節　基本層序……18
　第３節　検出遺構と出土遺物……22
第４章　自然科学的分析……60
　第１節　久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98-25）に伴う花粉分析……60
第５章　まとめ……87

挿　図　目　次

第１図　久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図……4
第２図　調査地周辺の発掘調査位置図……11
第３図　久宝寺遺跡地区割り模式図……16
第４図　調査区設定図……17
第５図　基本層序……19－20
第６図　水田105検出足跡平面図……22
第７図　第１面遺構平面図……23－24
第８図　畦畔105・106、水田115出土遺物実測図……25
第９図　畦畔116平断面図……26
第10図　第１面畦畔断面図……27
第11図　第２面遺構平面図……29－30
第12図　ＳＫ201平断面図……31
第13図　ＳＫ202平断面図……32
第14図　ＳＫ201・202出土遺物実測図……32
第15図　ＳＫ203平断面図……33
第16図　ＳＫ203出土遺物実測図……33
第17図　ＳＡ201平断面図……34
第18図　ＮＲ201出土遺物実測図①……36
第19図　ＮＲ201出土遺物実測図②……37
第20図　ＮＲ201出土遺物実測図③……40
第21図　第３面遺構平面図……41－42
第22図　ＳＫ301出土遺物実測図……43

第23図　6調査区第3面遺構平断面図……43
第24図　3調査区第3面遺構平面図……44
第25図　3調査区ＳＤ301～303断面図……45
第26図　3調査区第3面溝出土遺物実測図……46
第27図　3調査区ＳＤ304～326断面図……47
第28図　5調査区第3面遺構平断面図……49
第29図　ＳＤ338出土遺物実測図 ……49
第30図　7調査区第3面遺構平断面図……50
第31図　8調査区第3面平断面図……52
第32図　8調査区第5層出土遺物実測図……52
第33図　9調査区第3面平断面図……53
第34図　第4面遺構平面図……55－56
第35図　3調査区第4面遺構平断面図……57
第36図　7調査区第4面平断面図……58
第37図　第Ⅵ～Ⅷ層出土遺物実測図……59

写　真　目　次

写真1　旧国鉄竜華操車場跡地と西方の六甲山（東から）……1
写真2　調査後の竜華東西線工事(西から)……2
写真3　竜華東西線の現況(西から)……2
写真4　渋川廃寺塔基壇(南から)……7
写真5　1調査区機械掘削……18
写真6　1調査区ＮＲ201内足跡群 ……35
写真7　3調査区ＮＲ201南壁 ……35
写真8　2調査区ＮＲ201西壁 ……38
写真9　3調査区ＮＲ201中州部分北壁 ……38
写真10　木製品(20)実測風景……39
写真11　8調査区ＳＯ301肩北壁 ……52
写真12　9調査区ＳＯ302肩西～北壁 ……53

表　目　次

第１表　調査地周辺の発掘調査一覧表 ……12-14
第２表　調査区一覧表……15
第３表　基本層序……21
第４表　第１面水田法量表……28
第５表　第１面畦畔法量表……28
第６表　第３面溝（ＳＤ304～344）一覧表……51

図　版　目　次

図版一　調査地より北東方向を望む
　　調査地より南西方向を望む
図版二　２・３調査区
　　奥から４～６調査区　　奥から７～９調査区
図版三　１調査区第１面
　　１調査区畦畔101　　１調査区畦畔101南西壁
　　２調査区畦畔101　　２調査区畦畔104西壁
図版四　２調査区第１面
図版五　２調査区第１面　　２調査区畦畔102～104
図版六　２調査区畦畔102断面②　　２調査区畦畔102断面③
　　２調査区畦畔103断面④　　２調査区畦畔101断面①
　　２調査区畦畔104断面⑤　　２調査区水田105内足跡
図版七　３調査区第１面
図版八　３調査区第１面東部
　　３調査区畦畔115　　３調査区畦畔106断面⑦
　　３調査区畦畔108断面⑧
図版九　５調査区第１面　　６調査区第１面
　　５調査区畦畔116　　６調査区畦畔117
　　５調査区畦畔116西壁　　６調査区畦畔117南東壁
図版一〇　１調査区第２面
　　２調査区第２面
図版一一　２調査区第２面　　２調査区ＮＲ201・ＳＡ201
　　２調査区ＳＡ201　　２調査区ＳＡ201〈杭１～３〉
　　２調査区ＳＡ201〈杭７～18〉　　２調査区ＮＲ201土器(17)出土状況

図版一二　3調査区第2面
　　3調査区ＮＲ201
図版一三　ＮＲ201遺物(15・23)出土状況　　同(20)出土状況
　　同(16)出土状況　　同(22)出土状況
　　同(18)出土状況　　同(21)出土状況
図版一四　3調査区ＳＫ201　　3調査区ＳＫ201土器(3)出土状況
　　3調査区ＳＫ202　　3調査区ＳＰ201東壁
　　7調査区ＳＫ203　　7調査区ＳＫ203
図版一五　3調査区第3面
図版一六　3調査区第3面
　　3調査区第3面　　3調査区ＳＤ303土器(31)出土状況
　　3調査区ＳＤ321土器(33)出土状況
図版一七　5調査区第3面　　6調査区第3面
　　5調査区第3面北部　　6調査区第3面
　　6調査区ＳＫ301
図版一八　7調査区第3面　　8調査区第3面
　　7調査区第3面　　9調査区第3面
図版一九　3調査区第4面
　　3調査区第4面土器(58)出土状況　　7調査区第4面
図版二〇　畦畔105・106、ＳＫ201、ＮＲ201出土遺物
図版二一　ＮＲ201、ＳＫ301、ＳＤ303、ＳＤ321出土遺物
図版二二　ＳＤ338、8調査区第5層、Ⅵ層出土遺物
図版二三　Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層出土遺物
図版二四　水田115、ＮＲ201出土遺物
図版二五　ＳＫ202、ＮＲ201出土遺物

第１章　調査に至る経過

久宝寺遺跡は、1935年（昭和10年）に小字西口・栗林（現、八尾市久宝寺５丁目）で行われた道路工事中に、船の残片とともに弥生時代中期～古墳時代の遺物が発見され、遺跡として認識されるようになった。考古学的な調査は1973年（昭和48年）度以降で、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道の計画に伴い、（財）大阪文化財センター（現、（財）大阪府文化財センター）による試掘調査が実施されている。この調査では、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって重層的に検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。昭和57年以降は大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う発掘調査、ならびに八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会・（財）東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されており、縄文時代晩期～近世に至る遺構・遺物が検出されている。主な調査成果を調査順に列挙すれば、1983年（昭和58年）に（財）大阪文化財センターにより実施された久宝寺南（その２）では、古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される我国最古の準構造船の発見があり、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が当該期には「湾津」的な役割を果たした集落を形成していたことを示す資料として注目された。1991年（平成３年）に八尾市北亀井３丁目で当調査研究会が実施した第９次調査（ＫＨ91－９）では、古墳時代前期前半（布留式古相）の２棟の住居内から重圏文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは墳丘長35ｍを測る前方後方墳１基が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重な資料を提供した。また、1994年（平成６年）に八尾市神武町で当調査研究会が行った第18次調査（ＫＨ94－18）では、古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される朝鮮半島の南部に淵源を持つ炉形土器・軟質両耳甕が出土しており、西接する大阪市の加美遺跡第１次調査（ＫＭ84－１）の１号方形周溝墓出土の陶質土器（朝鮮三国時代初頭）の存在とともに、遺跡範囲の西部を中心に、渡来系集団の集落が存在した可能性が強くなってきた。

この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

今回の調査地点である旧国鉄竜華操車場跡地（約24.6ha）は、遺跡範囲の南部を横断する形で展開する広大な敷地で、遺跡総面積の約1/7を占めている。竜華操車場が1986年（昭和61年）に国鉄民営化に先立って廃止されると、同年７月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、再開発が進められることとなった。再開発はまず駅周辺から着手され、1988年（昭和63年）度の八尾市教育委員会による駅舎新設に伴う試掘調査（63－269）を皮切りとして、駅

写真１　旧国鉄竜華操車場跡地と西方の六甲山（東から）

舎および自由通路を対象とした当調査研究会による1990年(平成２年)度の第４次調査、1996年(平成８年)度の第20次調査、(財)大阪府文化財調査研究センター(現、(財)大阪府文化財センター)による1995年(平成７年)度の95－８・９トレンチの調査が実施された。また、これらの調査と並行して、操車場北側の新線路予定地においては、1995年(平成７年)度に試掘調査(95－１～７トレンチ)が、さらに1995年(平成７年)度～1998年(平成10年)度には、操車場中央地下を南北に縦断する一般府道住吉八尾線の付け替えに伴う発掘調査(96－１、97－１、98－１・２トレンチ)が、それぞれ(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された。1997年(平成９年)度以降は、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、公共施設建設地および新設道路部分を中心とした発掘調査の計画が策定され、(財)大阪府文化財センター及び当調査研究会による発掘調査が継続的に実施されている。これら一連の調査では、縄文時代晩期～近世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。

今回、久宝寺遺跡第25次調査を実施した操車場西部では、当研究会による第22次調査(ＫＨ97－22)・第25次調査(ＫＨ98－25)・第27次調査(ＫＨ99－27)・第36次調査(ＫＨ2000－36)・第37次調査(ＫＨ2001－37)・第46次調査(ＫＨ2001－46)・第55次調査(ＫＨ2003－55)・第58次調査(ＫＨ2004－58)・第60次調査(ＫＨ2004－60)・第61次調査(ＫＨ2004－61)、(財)大阪府文化財センターによる竜華東西線の調査等がある。調査では弥生時代前期～近世に比定される遺構・遺物が検出されている。第37次調査では古墳時代前期前半(布留式古相)の古墳２基・土器棺墓１基が検出され、第９次調査で検出した墓域の広がりが確認された。また竜華東西線の調査では、これまで周辺では稀薄であった奈良・鎌倉時代の遺構が確認された。墨書のある櫃を井戸枠に転用した奈良時代の井戸は特筆され、周辺に当該期の何らかの重要施設の存在が想定されている。これらの発掘調査の結果から遺跡範囲南西部では、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が重層的に検出され、沖積低地に特有の河川堆積物の累重により形成された不安定な微地形を積極的に活用した、各時期の集落の拡がりが確認されている。

写真２　調査後の竜華東西線工事（西から）

写真３　竜華東西線の現況（西から）

本書で報告する久宝寺遺跡第25次調査(ＫＨ98－25)は、平成10～11年度に竜華東西線・区画道路３号線・区画道路４号線建設に伴って実施した発掘調査である。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、住宅・都市計画整備公団関西支社、(財)八尾市文化財調査研究会とによる業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。

第２章　地理・歴史的環境

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市北西部の久宝寺１～６丁目・西久宝寺・南久宝寺１～３丁目・北久宝寺１～３丁目・神武町・竜華町１・２丁目・北亀井町１～３丁目・渋川町１～７丁目および東大阪市大蓮東５丁目・大蓮南２丁目一帯の東西1.8km、南北1.7kmの範囲に展開する縄文時代後期～近世にかけての複合遺跡である。久宝寺遺跡周辺の遺跡群は、近畿自動車道建設に伴う調査や市単位の発掘調査が数多く実施されており、考古学的な資料の蓄積が多い。周辺に隣接する遺跡としては、北に佐堂遺跡・美園遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡・竜華寺跡が長瀬川を挟んで対峙する他、南東に渋川廃寺、南に跡部遺跡・亀井遺跡、南西に竹渕遺跡、西に大阪市の加美遺跡が位置している。また、遺跡範囲内には遺跡名でもある久宝寺寺内町遺跡が存在している。

八尾市を包括する中河内地域の地勢は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部にあたる。河内平野の形成については、海水面の昇降による侵食面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用との相互作用によるものと考えられている。特に、河内平野南部については、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下しており、平野部内にみられる自然堤防・扇状地性低地・三角州性低地等の地形形成については、これらの河川の堆積作用によるところが大きい。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた扇状地性低地に分類される沖積地に展開した遺跡で、現地表面の海抜高は9.5m前後を測る。以下、当遺跡周辺の遺跡を中心に時期ごとに概観してみる。

後氷期の大阪平野（河内平野）の発達史については、梶山彦太郎・市原　実両氏による研究により九つの時代に区分されている。それらの研究成果から考察すれば、遺跡周辺で人々の足跡が認められるのは縄文時代晩期で、河内湾の淡水化が進行し河内潟が形成された時期（河内潟の時代）にあたる。周辺遺跡では、新家遺跡・山賀遺跡・亀井遺跡から縄文時代晩期の土器片が出土しているほか、長原遺跡では集落が検出されている。本遺跡を含む中河内地域の沖積低地部においては、当該期の生活面が深層に埋没しているのが一般的であり、一部の調査を除けば、当該期の文化層まで調査深度が至らない場合が大半で、遺跡の全体像の把握が困難な場合が多い。本遺跡内においては、近畿自動車道に伴う久宝寺北（その１）の調査で縄文時代晩期の遺物包含層がT.P.＋4.7m前後に存在することが確認されている他、本調査地に近接した位置で（財）大阪府文化財センターにより実施された多目的広場の調査では、縄文時代晩期の土器類が出土している。

弥生時代前期には、水稲耕作の導入に伴って河内潟に注ぐ河川により形成された微高地および自然堤防を中心に数多くの集落が営まれている。前期の古段階に成立するものとしては若江北遺跡・山賀遺跡・八尾南遺跡がある他、中段階から新段階にかけて成立するものとしては美園遺跡・亀井遺跡・城山遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡がある。本遺跡内では、前期新段階の集落が久宝寺南（その１・その２）、第23次調査（ＫＨ97－23）の８調査区、水処理施設で検出されている。

弥生時代中期には河内潟の陸化に伴って、新たに瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・加美

1	若江遺跡	14	萱振遺跡	27	亀井北遺跡	40	植松南遺跡		
2	若江北遺跡	15	東郷遺跡	28	竹渕遺跡	41	太子堂遺跡		
3	上小阪遺跡	16	東郷廃寺	29	亀井遺跡	42	喜連東遺跡	53	大堀遺跡
4	小若江遺跡	17	穴太廃寺	30	跡部遺跡	43	瓜破遺跡	54	八尾南遺跡
5	西郷遺跡	18	宮町遺跡	31	跡部遺跡銅鐸出土地	44	瓜破廃寺	55	木の本遺跡
6	山賀遺跡	19	佐堂遺跡	32	渋川廃寺	45	三宅遺跡	56	老原遺跡
7	西郡廃寺	20	八尾寺内町遺跡	33	成法寺遺跡	46	三宅東遺跡	57	志紀遺跡
8	西郡廃寺遺跡	21	久宝寺寺内町遺跡	34	小阪合遺跡	47	長吉野山遺跡	58	田井中遺跡
9	衣摺遺跡	22	久宝寺遺跡	35	中田遺跡	48	長原遺跡	59	太田遺跡
10	弥刀遺跡	23	加美遺跡	36	東弓削遺跡	49	城山古墳跡	60	弓削遺跡
11	加美北遺跡	24	長楽廃寺	37	矢作遺跡	50	六反古墳跡	61	本郷遺跡
12	友井東遺跡	25	平野寺前遺跡	38	竜華寺跡	51	蔵重遺跡		
13	美園遺跡	26	平野環濠都市	39	植松遺跡	52	別所遺跡		

第１図　久宝寺遺跡周辺遺跡分布図（1/40000）

遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が成立している。また、水稲耕作を中心とした安定基盤を背景として、集落規模の拡大化が計られており、亀井遺跡に象徴される拠点集落の出現、瓜生堂遺跡２号方形周溝墓や加美遺跡Ｙ１号墓に代表される大型墳丘墓の存在は、弥生文化が昇華した証を可視的に示している。本遺跡内の居住域は、中期中葉から後葉（Ⅲ・Ⅳ様式）にかけては遺跡範囲の中央部から西部を中心に検出されている。墓域や生産域については、居住域の北西部や西部が利用されており、特に墓域については西接する加美遺跡を中心に大型墳丘墓が検出されている。一方、当該期を象徴付ける銅鐸については、跡部遺跡第５次調査（ＡＴ89－５）で埋納された扁平紐式流水文銅鐸が検出されている他、亀井遺跡からは扁平式と突線紐式の銅鐸片が出土している。

弥生時代後期になると中期の生活面を河成堆積層が厚く覆っている例が平野部の各遺跡で検出されており、自然環境が不安定であったことが推定されている。前代から続く既存の集落は、環濠集落の解体に連動して等質的な集落が点在する散村的な集落形態に移行を余儀なくされたようである。本遺跡内では後期前半の集落が久宝寺南（その１）、水処理施設、久宝寺第63次調査（ＫＨ2005－63）で検出されている程度で、前代に比して集落は減少している。後期後半の集落は、前代に比して増加しており、遺跡範囲東部の第８次調査（ＫＨ91－８）、北西部の府教委1991年度調査、南東部の第29次調査（ＫＨ99－29）で検出されている。

古墳時代初頭（庄内式）～前期（布留式）においては、前代に比して集落の増加が顕著で、西岩田遺跡・山賀遺跡・瓜生堂遺跡・佐堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・小若江北遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・竹渕遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡等で検出されている。この時期を通じての集落動向は、前代と同様、大規模な集落に発展することなく、土器型式の１型式ないしは長くても２型式程度の期間に居住域が移動を繰り返す形で推移したことが推定される。当該期の集落数は庄内式古相から中相にかけては漸移的な流れのなかで推移するが、庄内式新相～布留式古相においては爆発的に増加し、布留式古相をピークとして減少する流れが看取される。庄内式新相～布留式古相段階の集落数の急増に連動して、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海等の各地域からの搬入土器の占める割合が高く、物的交流のほか、移住者等の人的交流も想定されている。久宝寺遺跡では、第18次調査（ＫＨ94－18）で朝鮮半島南部にその淵源を持つ炉形土器・軟質両耳甕が出土しており、さらに西接する加美遺跡１次調査（ＫＭ84－１）の１号方形周溝墓からは陶質土器（朝鮮三国時代初頭）が出土していることから、交流が国内に留まらず海外におよんだことが窺われる。これらの要因としては、準構造船に代表される造船技術の進化、航海術の確立はもとより、北方に広がる河内湖を通じて海上交通が容易な地点に久宝寺遺跡が立地し、港津的な役割を果たしたことに他ならない。一方、当該期における墳墓については、方形周溝墓を中心とした前代の墓制形態が継承されるものの、布留式古相以降は、古墳文化受容の着実な浸透の中で、庄内式期に見られた等質な造墓形態から脱却して、墳形の多様化、主体部構造の変化、埴輪の使用等の質的変化が進行している。平野部で検出されたものに限定すれば、庄内式期では、加美遺跡・亀井北遺跡・久宝寺遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡、布留式期では、加美遺跡・友井東遺跡・久宝寺南遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡等で検出されている他、布留式新相には、中河内地域の首長層がヤマト政権との従属的な関係を結んだ結果として、

萱振１号墳・美園古墳・塚ノ本古墳が出現している。久宝寺遺跡内では、第９次調査（ＫＨ91－９）、第22次調査（ＫＨ97－22）、第23次調査（ＫＨ97－23）・第28次調査（ＫＨ99－28）、第37次調査（ＫＨ2001－37）、多目的広場、水処理施設で庄内式古相～布留式古相の墳墓が70基以上検出されている。

古墳時代中期の集落位置は前代に符合した形で推移している。５世紀代の河内平野南部で集落を形成した集団は、南部の羽曳野丘陵で展開される古市古墳群の造営や、『記紀』にみる治水事業を始めとする大規模な土木工事の推進の一躍を担っていたことは想像に難くない。久宝寺遺跡内においては、旧大和川水系の本流に設置された大規模な堰や敷葉工法による堤のほか、護岸施設としての水制工作物が検出されており、土木技術の向上や鉄製農具の進化と普及が河内平野の開発を推進した要因であったと推定される。これらの土木・治水技術に加えて、当該期における須恵器・韓式系土器を始めとする新出土器の出現や工芸・馬飼等の新来技術の導入については、土器相の変化に表出されるように朝鮮半島を中心とする渡来系集団との関係が留意される。当遺跡においては特に、久宝寺北（その２・３）で韓式系土器が多量に出土している。なお、第24次調査（ＫＨ98－24）の６調査区で検出された竪穴住居（ＳＩ31001）からは、南九州系の成川式土器が出土しており、当該期における南九州と畿内との交流関係を考えるうえで重要な資料である。当該期の古墳は、小規模な方墳が主体で平野部においては全て埋没した形で検出されており、長原遺跡・八尾南遺跡・城山遺跡のように群集化するものと、友井東遺跡・巨摩遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡のような単独墳がある。続く、古墳時代後期の集落は山賀遺跡・友井東遺跡・萱振遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・跡部遺跡・竹渕遺跡・長原遺跡で検出されているが、何れも集落規模の小さなものが大半を占めている。当該期の集落の特徴としては、後期全般を通して継続する集落が少ないことや、後期前半に廃絶する集落が比較的多いこと、更には、後期後半段階に集落の増加と分散化が偏在化していることが指摘される。後期古墳の推移は、長原古墳群が古墳造営を停止した後期中葉以降、平野部での築造は激減し、それ以降は生駒山地西麓部に展開する高安古墳群内に造墓位置を変えている。久宝寺遺跡内では、七ツ門古墳（６世紀中葉）が検出されており、長原遺跡内の七ノ坪古墳（５世紀末）とあわせて、平野部における数少ない横穴式石室を持つ古墳として貴重である。当該期の古墳の在り方は、小形方形墳を主体とする従前の墓制形態が、横穴式石室を主体部に持つ円墳へと変化する時期と符号しており、後期中葉以降は一部の例外を除けば、平野部が居住域と生産域、生駒山地西麓部が墓域としての分化が図られている。こうした推移の変化は、大和政権による地域の生産体制の強化が、再編成された在地系・渡来系の有力氏族に委ねられた結果を示すものと理解される。

当該期における遺跡周辺の文献史料としては、政治顧問として百済から日羅を招き阿斗（あと）の桑市に館をつくり住まわせる『日本書紀敏達十二年七月（583）』、物部守屋と蘇我馬子の仏教の摂取をめぐる論争、守屋怒って阿都（あと）に帰り兵を集める、『日本書紀用明二年四月（587）』等があり、後の『和名類聚抄』（以下『和名抄』）にみる渋川郡の跡部郷に関わる有力豪族の物部連の枝族として阿刀氏との関係が考えられる。一方、郡名である「渋川」については、『日本書紀崇峻天皇即位前紀用明二年七月（587）』の「従二志紀郡一。到二渋河家一。」が初見であり、郡名としては河内国渋川郡の柏原廣山が兵衛を偽ったため土佐に流される『日本書紀持統三年七月（689）』が初見である。

飛鳥・奈良時代の集落は萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・東弓削遺跡・長原遺跡等で検出されている。また、大和と難波津を結

ぶ交通の要衝であった中河内地域は、大和飛鳥地域と同様、仏教文化の受容は早く、渡来系氏族集団を檀越として多くの氏寺の建立が認められている。久宝寺遺跡を中心とする平野部に限って、『和名抄』による河内国の郡界別に区別すれば、若江郡の西郡廃寺（飛鳥時代後半～鎌倉時代）・東郷廃寺（飛鳥時代後期～平安時代前期）・弓削寺（奈良時代後期～鎌倉時代）、渋川郡の渋川廃寺（飛鳥時代前期～室町時代）・竜華寺（奈良時代後期～鎌倉時代）・鞍作廃寺（奈良時代）、志紀郡の五条宮跡（奈良時代後期～鎌倉時代）、丹北郡の瓜破廃寺（奈良時代）がある。

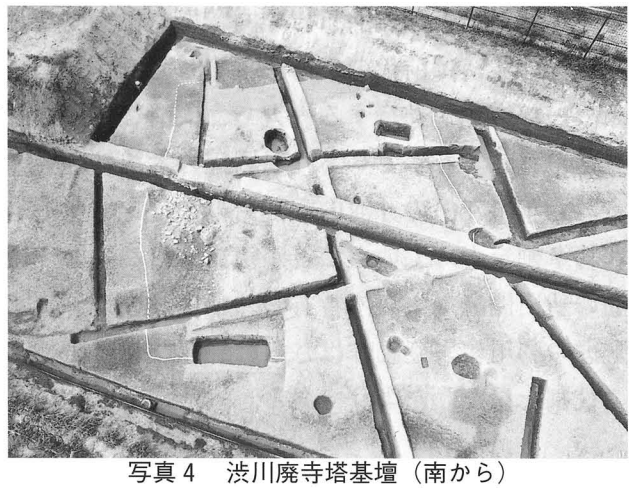


写真４　渋川廃寺塔基壇（南から）

一方、『続日本紀』には奈良時代後半の天平神護元年（765）～宝亀元年（770）の５年間に亘って若江郡南部を中心とした記事が記されている。全て、称徳天皇による３回におよぶ行幸に関連した内容で、「弓削行宮」「弓削寺」「由義宮」「由義寺」「竜華寺」が見える他、神護景雲三年（769）十月三十日の条には「詔以二由義宮一、為二西京一。河内国為二河内職一。...」のように若江郡の南部を中心とした一帯に「西の京」の造営が計画されている。翌年の宝亀元年（770）八月四日の天皇崩御により、造都の中止を余儀なくされるが、一時期にあるにせよ「陪都」的な都の造営が計画され歴史の表舞台になったことは特筆される。

平安時代～鎌倉時代の集落は、萱振遺跡・佐堂遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・老原遺跡・長原遺跡で検出されている。当該期の集落は、条里区画に基づくものや主要街道、寺社周辺で成立したものが多い。八尾市域内の当該期の寺院としては、若江郡に穴太廃寺（平安時代後半）、金性寺（平安時代後期）、金剛蓮華寺（平安時代前期）がある。式内社としては、若江郡９社（阪合・矢作・御野県主・弓削・都留美嶋・長柄・渋川・栗栖・加津良）、渋川郡２社（跡部・許麻）、志紀郡１社（楠本）がある。このうち、久宝寺遺跡範囲内には許麻神社（久宝寺５丁目）、跡部神社（亀井２丁目）がある。許麻神社は『新撰姓氏録』の河内国諸藩に記された高句麗系氏族の大狛連に関連するものである。跡部神社は『新撰姓氏録』の左京神別上に記された阿刀氏に関連するもので、石上朝臣（物部氏）と同祖の饒速日命の末裔とされている。なお、当該時期において久宝寺遺跡を包括する一帯は『石清水文書』延久四年（1072）九月五日「渋川郡漆条橘島里」に見るように、「橘島」と称されていたようである。「橘島」と称された範囲は古長瀬川と古平野川に挟まれた地域をさすものと考えられる。なお、遺跡範囲南西部の北亀井町２丁目には、大和西大寺の叡尊が文永五年（1268）に十重金戒[註1]を講じたとされる釈迦堂跡（千光寺）がある。

室町時代～戦国時代の河内地域は、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱から戦国時代末期の織田信長の近畿統一に至る長きに亘って戦乱の渦中であったことに符合して、集落数の減少が顕著である。当該期における集落は、若江遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・亀井遺跡・久宝寺寺内町遺跡等で検出されているが、その多くが防御を目的として集約された集村形態に変化を余儀なくされたものと考えられる。遺跡範囲南西部の北亀井町２丁目には、初代河内国守護であった畠山基国の子、満家の開基である真観寺（応永年間1394～1428）、北部には西証寺（現顕証寺）

を中心に天文十年(1541)に寺内特権を得て成立した「久宝寺寺内町」が存在している。

近世の集落は前代の集落と重複して推移している。近世の河内地域は、大坂城の城下町として大坂の都市化が進行する一方で、大消費地への生産物の供給や流通を担う役割を果たしたものと考えられる。なかでも、八尾周辺の木綿は「久宝寺木綿」として知られており、江戸時代中期の宝暦六年(1756)の「河内国渋川郡久宝寺村当子年植附書上帳控[註2]」によれば、村内耕地のうち綿作が約7割を占めていたことが窺える。このように、宝永元年(1704)の大和川付け替え以降は旧川筋の新田開発や中河内特有の「半田(はんだ)[註3]」「掻き揚げ田」「島畑[註4]」と呼ばれる田畑混在の耕地形態の利用により綿作はさらに急速な発展を遂げ、明治の10年代に衰退するまで地場産品としての役割を果たしたようである。

註記

註1　大乗仏教の戒律に定める10種の重大ないましめ。

註2　八尾市歴史民俗資料館 2002『河内木綿関係資料集1　河内の綿作りと木綿生産』

註3　大蔵永常　天保4年(1833)『綿圃要務』

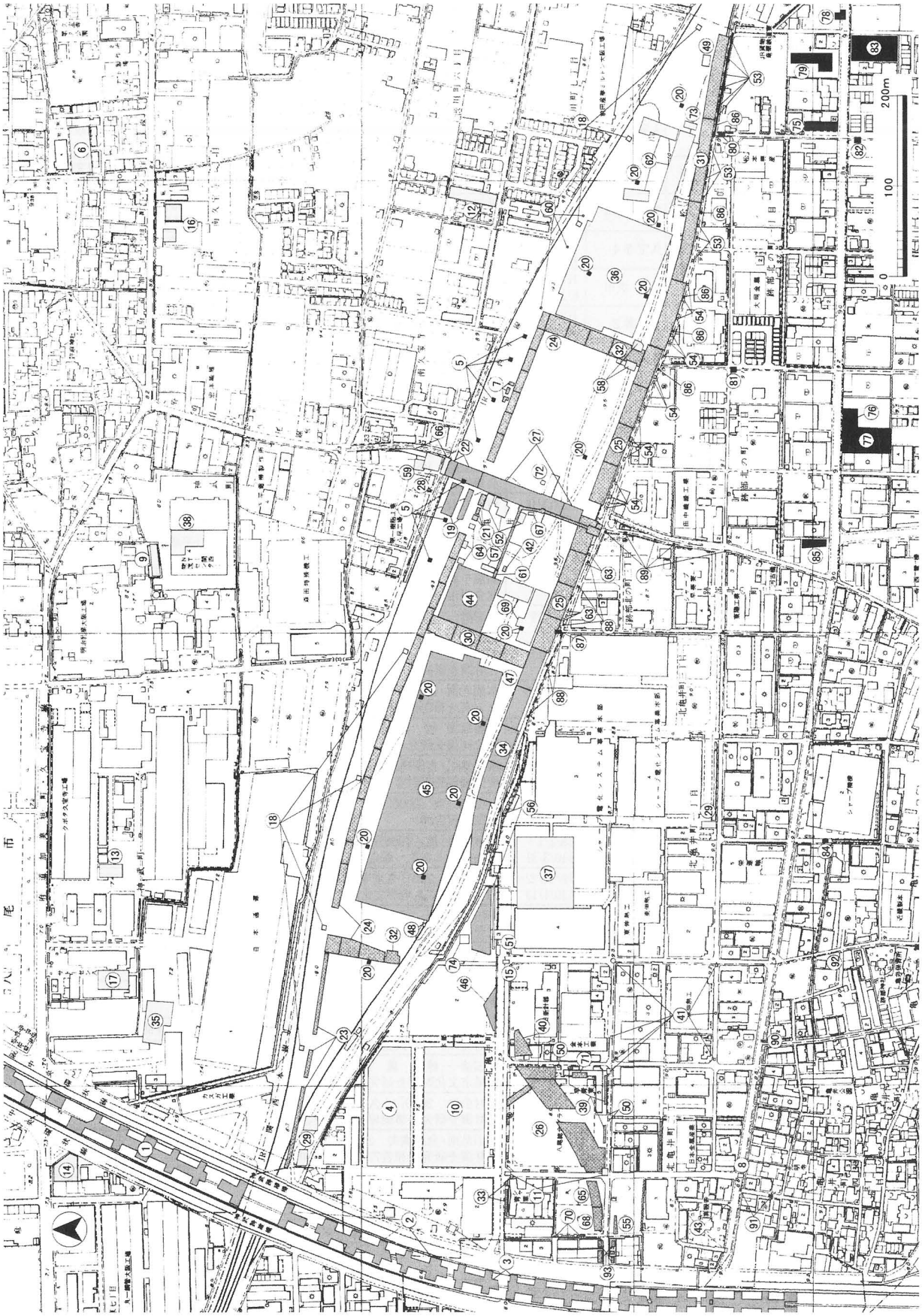
註4　大野　薫 1989「島畑の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例－」『郵政考古紀要15』郵政考古学会
本遺構については、大野氏に従って「島畑」を使用した。

参考文献

・赤木克視・村上年生他　1987『河内平野の動態Ⅰ　近畿自動車道天理～吹田建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－プロローグ編－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・梶山彦太郎・市原 実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
・(財) 大阪市文化財協会　1983『長原遺跡発掘調査Ⅲ』
・金光正裕他 1987『久宝寺北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・松岡良憲他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・一瀬和夫他 1987『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・福永信雄 1997「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金関　恕先生の古稀をお祝いする会編　勉誠社
・田代克己・今村道雄他　1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会
・寺川史郎・尾谷雅彦・他　1980『亀井・城山』財団法人大阪文化財センター
・田中清美　1986「加美遺跡の検討」『古代を考える43』古代を考える会
・田中清美　1986「大阪府大阪市加美遺跡の検討－弥生時代中期後半の大型墳丘墓を中心にして－」『日本考古学年報　1984年度版』日本考古学協会
・安井良三・成海佳子 1991「跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－」『(財)八尾市文化財調査研究会報告31』(財)八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1997「Ⅰ久宝寺遺跡（第8次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告55』(財)八尾市文化財調査研究会
・小林義孝・西川寿勝 1992『久宝寺遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
・原田昌則他 2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う－」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会

・ 坪田真一 1995「久宝寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第31回資料）』
・ 成海佳子 1992「久宝寺遺跡の調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第25回）資料』大阪府教育委員会
・ 原田昌則 2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区区画整理２号線に伴う」『（財）八尾市文化財調査研究会報告68』（財）八尾市文化財調査研究会
・ 原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口　薫 1999「８.久宝寺遺跡第23調査（ＫＨ97－23）」『平成10年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・ 原田昌則・岡田清一　2004「Ⅰ久宝寺遺跡第28調査（ＫＨ99－28）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告77』（財）八尾市文化財調査研究会
・ 原田昌則・金親満夫 2004「Ⅲ久宝寺遺跡第37調査（ＫＨ2001－37）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告77』（財）八尾市文化財調査研究会
・ 原田昌則 2001「中河内地域における定型化する古墳以前の墓制について」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集』村川行弘先生頌寿記念会
・ 西村　歩 2001「久宝寺１号墳の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会（第43回）資料』大阪府教育委員会、（財）大阪府文化財調査研究センター
・ 西村　歩・南条直子他 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ｖ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第103集』（財）大阪府文化財センター
・ 後川恵太郎 2003「久宝寺遺跡墳墓群の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第46回）資料』大阪府教育委員会、（財）大阪府文化財センター
・ 金光正裕・亀井　聡・菊井佳弥 2005『久宝寺遺跡　発掘調査成果－2001～2004年度のまとめ』（財）大阪府文化財センター
・ 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告第３集』大阪府立弥生文化博物館
・ 広瀬雅信他 1992『萱振遺跡 大阪府文化財調査報告書 第39輯』大阪府教育委員会
・ 渡辺昌宏他 1985『美園』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・ 井藤　徹他 1978『長原』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・ 本田奈津子 1996「古墳時代の合掌型堰－久宝寺遺跡・竜華地区検出例をもとに－」『大阪文化財研究第10号』（財）大阪府文化財調査研究センター
・ 小山田宏一 2001「第二章　古代の土木技術　四、渡来人と治水技術」『開館記念特別展　古代の土木技術』大阪府立狭山池博物館
・ 原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線３工区の掘削工事に伴う」『（財）八尾市文化財調査研究会報告69』（財）八尾市文化財調査研究会
・ 梅木謙一 2003「３近畿の西部瀬戸内系土器－複合口縁壷を中心に－　五、桜井市勝山池（勝山古墳）出土の南九州系土器の再検討」『初期の古墳と大和の考古学』学生社
・ 井藤　徹他 1978『長原』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・ 後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市亀井在住 久宝寺遺跡・竜華地区（その１）発掘調査報告書－JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う－」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第６集』（財）大阪府文化財調査研究センター
・ 後藤信義 1998『久宝寺遺跡七ツ門古墳現地検討会資料』（財）大阪府文化財調査研究センター

・ 赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
・ 高井健司 1987「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(ＮＧ85－23)略報」『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会
・ 櫻井久之 2001 「長原遺跡の小方墳」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター
・ 亀井輝一郎 1976「大和川と物部氏」『日本書紀研究第九冊』塙書房
・ 坂本太郎他 1965『日本書紀下』(株)岩波書店
・ 森田康夫 1980「八尾編年史<古代・中世編>」『八尾市民文化双書No.1』八尾市立図書館
・ 坪田真一・金親満夫 2004「渋川廃寺第２・３次調査」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告79』(財)八尾市文化財調査研究会
・ 足利健亮 1986「由義京の宮域および京域考」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会(株)同朋舎出版
・ 山本 博 1971『竜田越』学生社
・ 吉岡 哲 1988「考古編 第１～５章」『八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
・ 安井良三他 1991『大阪府八尾市寺院古文書調査報告書(目録)』八尾市教育委員会
・ 棚橋利光 2000「中世八尾における律宗の広がり」『研究紀要 第11号』八尾市立歴史民俗資料館
・ 櫻井敏雄、大草一憲 1988『寺内町の基本計画に関する研究－久宝寺寺内町と八尾寺内町を中心として－』八尾市教育委員会
・ 岡田清一 2004「久宝寺寺内町遺跡 第１次調査 －「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書－」『(財)八尾市文化財調査研究会報告80』(財)八尾市文化財調査研究会



第２図　調査地周辺の発掘調査位置図（Ｓ＝1/6000）

第１表　調査地周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名（略号）	調査主体	所在地	調査期間	文　献
1	久宝寺南（その2）	府教委 大文セ	神武町	S57/7/5～ S60/6/30	赤木克視・一瀬和夫　1987『久宝寺南（その２）』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
2	亀井北（その1）	〃	大阪市平野区加美南２	S59/3/1～ S61/3/31	小野久隆・服部文章　1985.3『亀井北（その１）』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
3	亀井北（その2）	〃	大阪市平野区加美４	S59/3/10～ S61/1/16	奥　和之・山上　弘　1986『亀井北（その２）』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
4	久宝寺1次（ＫＨ84-1）	八文研	北亀井３-1	S59/4/2～ 5/26	原田昌則　1993「Ⅱ　久宝寺遺跡第１次調査（ＫＨ84-１）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　(財)八尾市文化財調査報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
5	久宝寺遺跡(63-269)	市教委	亀井・渋川	S63/8/30、 11/25～12/1	近江俊秀　1989「4.久宝寺遺跡(63-269)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ　昭和63年度公共事業　八尾市文化財報告20』八尾市教育委員会
6	久宝寺3次（ＫＨ88-3）	八文研	久宝寺４	S63/12/5～ 12/28	西村公助　1989「６　久宝寺遺跡（第３次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度　(財)八尾市文化財調査報告25』財団法人八尾市文化財調査研究会
7	久宝寺4次（ＫＨ90-4）	〃	亀井・渋川	H2/4/2～ 6/12	坪田真一　1993「Ⅰ　久宝寺遺跡第４次調査（ＫＨ90-４）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」　(財)八尾市文化財調査報告41』(財)八尾市文化財調査研究会
8	久宝寺5次（ＫＨ90-5）	〃	北亀井２	H2/4/15～ 4/22	高萩千秋　1991「Ⅰ　久宝寺遺跡（ＫＨ90-5）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告32』(財)八尾市文化財調査研究会
9	久宝寺6次（ＫＨ90-6）	〃	神武町17・ 20～27・38	H2/9/3～ 10/12	原田昌則　1993「Ⅲ　久宝寺遺跡第６次調査（ＫＨ90-６）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　(財)八尾市文化財調査報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
10	久宝寺9次（ＫＨ91-9）	〃	北亀井３- 1-72	H3/8/1～ 12/3	成海佳子　1992「13.久宝寺遺跡第９次調査（ＫＨ91-9）」『平成３年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
11	久宝寺10次（ＫＨ91-10）	〃	北亀井２・３	H3/10/2～ 10/22	原田昌則　1992「Ⅰ　久宝寺遺跡第10次調査（ＫＨ91-10）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　(財)八尾市文化財調査報告34』(財)八尾市文化財調査研究会
12	久宝寺11次（ＫＨ91-11）	〃	渋川町６ -34.35	H3/10/7～ 10/18	西村公助　1992「Ⅱ　久宝寺遺跡第11次調査（ＫＨ91-11）」(財)八尾市文化財調査研究会報告34　(財)八尾市文化財調査研究会
13	久宝寺13次（ＫＨ91-13）	〃	神武町２-35	H3/12/16～ H4/1/23	西村公助　1992「17.久宝寺遺跡第13次調査（ＫＨ91-13）」『平成３年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
14	久宝寺14次（ＫＨ92-14）	〃	神武町190-1	H4/5/26～ 8/10	坪田真一　1993「10.久宝寺14次調査（ＫＨ92－14）」『平成４年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
15	久宝寺16次（ＫＨ93-16）	〃	北亀井３	H5/5/31～ 6/8	高萩千秋　1994「Ⅳ　久宝寺遺跡第16次調査（ＫＨ93-16）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
16	久宝寺17次（ＫＨ93-17）	〃	久宝寺１-40	H5/7/19～ 7/30	岡田清一　1997「Ⅱ 久宝寺遺跡（第17次調査）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告55』(財)八尾市文化財調査研究会
17	久宝寺18次（ＫＨ94-18）	〃	神武町143 ～146他	H6/9/1～ 10/12	坪田真一　1995「８.久宝寺遺跡第18次調査（ＫＨ94-18）」『平成６年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
18	久宝寺(95-1～7)	大文研セ	亀井・渋川	H7/5/24～ 12/20	本間元樹・他　1996.3「久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書　第５集』(財)大阪府文化財調査研究センター
19	久宝寺(95-8・9)	〃	亀井	H7/5/23～ 12/20	後藤信義・他　1996.3「久宝寺遺跡・竜華地区（その１）発掘調査報告書」「(財)大阪府文化財調査研究センター報告書　第６集』(財)大阪府文化財調査研究センター
20	久宝寺(95-565)	市教委	渋川・亀井	H8/1/9～ 7/12	藤井淳弘・吉田珠己　1997「７.久宝寺遺跡(95-565)の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告Ⅱ　八尾市文化財調査報告37』八尾市教育委員会
21	久宝寺20次（ＫＨ96-20）	八文研	渋川	H8/9/24～ 11/14	坪田真一他　2000「Ⅲ　久宝寺遺跡第20次調査（ＫＨ96－20）」(財)八尾市文化財調査研究会報告66
22	久宝寺(96-1・97-1)	大文研セ	渋川	H8/2/1～ H10/3/31	後藤信義・他　1998.3「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書　第26集』(財)大阪府文化財調査研究センター
23	久宝寺22次（ＫＨ97-22）	八文研	亀井	H9/10/22～ H10/1/13	原田昌則　2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書」「(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会
24	久宝寺23次（ＫＨ97-23）	〃	亀井・渋川	H9/10/23～ H10/6/30	原田昌則・他　1999「８.久宝寺遺跡第23次調査（ＫＨ97-23）」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
25	久宝寺24次（ＫＨ98-24）	〃	亀井・渋川	H10/2/10～ H11/2/20	原田昌則　2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書」「(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
26	久宝寺25次（ＫＨ98-25）	〃	北亀井３	H11/1/29～ 7/15	本書Ⅰ
27	久宝寺(98-1・98-2)	大文研セ	渋川	H10/3/1～ H11/1/14	赤木克視・他　2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
28	久宝寺26次（ＫＨ99-26）	八文研	神武町93-1	H11/3/23～ 8/20	岡田清一・樋口　薫　2002「久宝寺遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告70』(財)八尾市文化財調査研究会
29	久宝寺27次（ＫＨ99-27）	〃	北亀井３- 1-72	H11/5/17～ 7/21	西村公助　2000「10.久宝寺遺跡第27次調査（ＫＨ99-27）」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
30	久宝寺28次（ＫＨ99-28）	〃	亀井	H11/9/30～ H12/2/1	原田昌則・金親満夫　2004「Ⅰ　久宝寺遺跡（第28次調査）」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
31	久宝寺29次（ＫＨ99-29）	〃	渋川	H11/9/1～ H12/11/30	原田昌則・他　2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書」『(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会
32	久宝寺30次（ＫＨ99-30）	〃	亀井・渋川	H12/1/20～ 3/7	荒川和哉　2006「Ⅱ久宝寺遺跡第30次調査（ＫＨ99-30）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
33	久宝寺31次（ＫＨ99-31）	〃	北亀井3	H12/2/1～ 3/30	本書Ⅱ
34	久宝寺(竜華東西線)	大文研セ	亀井	H11/2/2～ H12/2/29	西村　歩・奥村茂輝　2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第118集』(財)大阪府文化財センター

番号	調査名（略号）	調査主体	所在地	調査期間	文　　献
35	久宝寺32次（ＫＨ99-32）	八文研	神武町168他	H12/3/13～6/8	森本めぐみ　2000　「15.久宝寺遺跡第32次調査（ＫＨ99-32）」『平成11年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
36	久宝寺33次（ＫＨ2000-33）	〃	渋川	H12/3/31～H13/2/28	成海佳子・樋口　薫・金親満夫　2001　「4.久宝寺遺跡第33次調査（ＫＨ2000-33）」『平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
37	久宝寺34次（ＫＨ2000-34）	〃	亀井３-41	H12/7/18～11/25	澄　斎　2001「5.久宝寺遺跡第34次調査（ＫＨ2000-34）」『平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
38	久宝寺35次（ＫＨ2000-35）	〃	神武町１番79	H12/10/16～11/14	森本めぐみ　2001「6.久宝寺遺跡第35次調査（ＫＨ2000-35）」『平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
39	久宝寺36次（ＫＨ2000-36）	〃	北亀井町	H13/2/5～3/20	原田昌則・金親満夫　2004「Ⅱ　久宝寺遺跡（第36次調査）」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告77』（財）八尾市文化財調査研究会
40	久宝寺37次（ＫＨ2001-37）	〃	亀井	H13/9/13～11/16	原田昌則・金親満夫　2004「Ⅲ　久宝寺遺跡（第37次調査）」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告77』（財）八尾市文化財調査研究会
41	久宝寺38次（ＫＨ2001-38）	〃	北亀井町２・３	H14/1/9～10/10	高萩千秋　2003「ⅩⅡ　久宝寺遺跡第38次調査（ＫＨ2001-38）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
42	久宝寺39次（ＫＨ2001-39）	〃	亀井	H14/2/19～9/26	原田昌則　2006「Ⅲ久宝寺遺跡第39次調査（ＫＨ2001-39）、第51次調査（ＫＨ2003-51）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告89』（財）八尾市文化財調査研究会
43	久宝寺40次（ＫＨ2001-40）	〃	北亀井２	H14/2/19～7/29	森本めぐみ・坪田真一　2003「ⅩⅢ　久宝寺遺跡第40次調査（ＫＨ2001-40）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
44	多目的広場	大文研セ	亀井	H13/2/27～H14/2/28	西村　歩・南條直子　2003「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第103集』（財）大阪府文化財センター
45	水処理施設（その１～３）	〃	亀井	H13/4/20～16/2/27	未報告
46	竜華東西線（その２）	〃	亀井	H14/1/22～8/31	西村　歩・奥村茂輝　2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書第118集』（財）大阪府文化財センター
47	小阪合発進立杭（02-2）	大府文セ	亀井	H15/3/1～9/30	2003「平成14年度　年報」（財）大阪府文化財センター
48	長吉立杭	〃	亀井	H13/4/20～H14/3/29	2002「平成13年度　年報」（財）大阪府文化財センター
49	小阪合立杭		渋川	H13/4/20～H14/3/29	〃
50	久宝寺41次（ＫＨ2002-41）	八文研	北亀井町２	H14/7/29～8/19	西村公助　2003「ⅩⅣ　久宝寺遺跡第41次調査（ＫＨ2002-41）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
51	久宝寺42次（ＫＨ2002-42）	〃	北亀井町３-41	H14/9/30～10/24	樋口　薫　2003「19.久宝寺遺跡第42次調査（ＫＨ2002-42）」『平成14年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
52	久宝寺43次（ＫＨ2002-43）	〃	渋川	H14/10/8～11/8	坪田真一・金親満夫　2005「Ⅰ　久宝寺遺跡第43次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
53	久宝寺44次（ＫＨ2002-44）	〃	渋川他	H14/11/26～12/13	岡田清一　2003「Ⅳ　久宝寺遺跡第44次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告76』（財）八尾市文化財調査研究会
54	久宝寺45次（ＫＨ2002-45）	〃	跡部北の町１・２、渋川	H14/11/29～12/20	成海佳子　2003「Ⅴ　久宝寺遺跡第45次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告76』（財）八尾市文化財調査研究会
55	久宝寺46次（ＫＨ2002-46）	〃	亀井・北亀井３	H15/1/28～3/10	本書Ⅲ
56	久宝寺47次（ＫＨ2002-47）	〃	北亀井２・３	H15/2/28～7/2	成海佳子　2004「Ⅴ久宝寺遺跡第47次調査（ＫＨ2002-47）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告78』（財）八尾市文化財調査研究会
57	駅前広場防火水槽（02-3）	大文研セ	亀井	H15/3/3～4/30	金光正裕　2003「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅳ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第102集』（財）大阪府文化財センター
58	久宝寺48次（ＫＨ2002-48）	八文研	渋川	H15/3/10～4/7	坪田真一　2005「Ⅱ　久宝寺遺跡第48次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
59	久宝寺49次（ＫＨ2003-49）	〃	神武町93-1・4	H15/6/11～8/26	坪田真一・高萩千秋　2005「Ⅱ　久宝寺遺跡第49次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
60	久宝寺50次（ＫＨ2003-50）	〃	渋川他	H15/6/3～6/5	原田昌則　2006「Ⅳ久宝寺遺跡第50次調査（ＫＨ2003-50）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告89』（財）八尾市文化財調査研究会
61	久宝寺51次（ＫＨ2003-51）	〃	亀井	H15/6/10～7/31	原田昌則　2006「Ⅲ久宝寺遺跡第39次調査（ＫＨ2001-39）、第51次調査（ＫＨ2003-51）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告89』（財）八尾市文化財調査研究会
62	久宝寺52次（ＫＨ2003-52）	〃	渋川	H15/9/8～H16/4/13	樋口　薫　2004「13.久宝寺遺跡第52次調査（ＫＨ2003-52）」『平成15年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
63	久宝寺53次（ＫＨ2003-53）	〃	跡部北の町２・３、亀井	H15/10/3～10/9	成海佳子　2005「Ⅳ　久宝寺遺跡第53次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
64	久宝寺54次（ＫＨ2003-54）	〃	渋川	H15/11/26～12/16	成海佳子　2005「Ⅴ　久宝寺遺跡第54次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
65	久宝寺55次（ＫＨ2003-55）	〃	北亀井３	H16/1/19～2/20	本書Ⅳ
66	久宝寺56次（ＫＨ2004-56）	〃	神武町93-１・４	H16/7/1～9/3	原田昌則　2005「Ⅵ　久宝寺遺跡第56次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
67	久宝寺57次（ＫＨ2004-57）	〃	龍華町２	H16/7/5～7/7	樋口　薫　2005「Ⅶ　久宝寺遺跡第57次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
68	久宝寺58次（ＫＨ2004-58）	〃	北亀井３	H16/5/31～9/30	本書Ⅴ
69	久宝寺59次（ＫＨ2004-59）	〃	亀井	H16/8/5～11/30	西村公助　2005「久宝寺遺跡第59次調査（ＫＨ2004-59）」『平成16年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

番号	調査名（略号）	調査主体	所在地	調査期間	文献
70	久宝寺60次（ＫＨ2004-60）	八文研	北亀井３	H16/10/7～10/21	本書Ⅵ
71	久宝寺61次（ＫＨ2004-61）	〃	北亀井３	H16/11/9～12/15	本書Ⅶ
72	久宝寺62次（ＫＨ2004-62）	〃	龍華町１	H17/5/10～7/7	荒川和哉　2005「Ⅷ　久宝寺遺跡第62次調査」『久宝寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告83』（財）八尾市文化財調査研究会
73	久宝寺63次（ＫＨ2005-63）	〃	龍華町１	H17/1/20～1/25	荒川和哉　2006「Ⅴ久宝寺遺跡第63次調査（ＫＨ2005-63）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告89』（財）八尾市文化財調査研究会
74	久宝寺65次（ＫＨ2005-65）	〃	龍華町２	H17/7/27～10/27	荒川和哉　2006「Ⅵ久宝寺遺跡第65次調査（ＫＨ2005-65）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告89』（財）八尾市文化財調査研究会
75	跡部（Ｓ56調査）	市教委	春日町１-57	S56/11/9～11/19	高木真光　1983.3「第６章　跡部遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981』八尾市教育委員会
76	跡部１次（ＡＴ82-1）	八文研	跡部本町１-３	S57/10/1～10/5	西村公助　1983「11.跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査　その成果と概要』八尾市教育委員会
77	跡部４次（ＡＴ88-4）	〃	跡部本町１-4-1	S63/10/1～10/22	西村公助　1989「19　跡部遺跡（第４次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25
78	跡部５次（ＡＴ89-5）	〃	春日町１-45-1	H1/10/17～11/30	安井良三・成海佳子　1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－』（財）八尾市文化財調査研究会報告31
79	跡部７次（ＡＴ92-7）	〃	春日町１-47・48	H4/7/9～8/10	原田昌則　1993「Ⅰ　跡部遺跡（ＡＴ92-７）第７次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39
80	跡部９次（ＡＴ92-9）	〃	春日町１	H4/10/7～10/13	原田昌則　1993「Ⅲ　跡部遺跡（ＡＴ92-９）第９次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39
81	跡部14次（ＡＴ93-14）	〃	跡部北の町１丁目	H5/11/29～12/10	高萩千秋　1994「Ⅰ　跡部遺跡第14次調査（ＡＴ93-14）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』（財）八尾市文化財調査研究会
82	跡部17次（ＡＴ94-17）	〃	太子堂１	H6/9/16～11/18	成海佳子　1997「Ⅴ　跡部遺跡第17次調査（ＡＴ94-17）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告58』（財）八尾市文化財調査研究会
83	跡部23次（ＡＴ96-23）	〃	春日町４-４	H9/2/21～3/31	原田昌則　2004「Ⅱ　跡部遺跡第23次調査（ＡＴ96-23）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告81』（財）八尾市文化財調査研究会
84	跡部28次（ＡＴ98-28）	〃	跡部本町４	H10/6/29～7/6	森本めぐみ　2000「Ⅰ　跡部遺跡第28次調査（ＡＴ98-28）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告65』（財）八尾市文化財調査研究会
85	跡部	府教委	跡部北の町２	H13/10/9～H14/3/29	小林義孝　2002「跡部遺跡」『大阪府埋蔵文化財調査報告2001-6』大阪府教育委員会
86	跡部33次（ＡＴ2002-33）	八文研	跡部北の町１・２、春日町１	H14/5/16～9/9	成海佳子・他　2003「Ⅰ　跡部遺跡第33次調査（ＡＴ2002-33）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
87	跡部34次（ＡＴ2002-34）	〃	跡部北の町３	H14/9/2～9/11	坪田真一　2003「Ⅱ　跡部遺跡第34次調査（ＡＴ2002-34）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
88	跡部35次（ＡＴ2002-35）	〃	跡部北の町３	H14/12/9～H15/1/14	金親満夫　2003「Ⅲ　跡部遺跡第35次調査（ＡＴ2002-35）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
89	跡部36次（ＡＴ2003-36）	〃	跡部北の町３	H15/11/7～11/15	成海佳子　2005「Ⅰ跡部遺跡第36次調査（ＡＴ2003-36）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告82』（財）八尾市文化財調査研究会
90	亀井４次（ＫＭ96-4）	〃	亀井町１・２	H6/2/17～2/21	古川晴久　1998「Ⅴ　亀井遺跡　第４次調査（ＫＨ96－4）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告60』（財）八尾市文化財調査研究会
91	亀井９次（ＫＭ99-9）	〃	亀井町４	H11/12/6～12/20	成海佳子　2001「Ⅴ　亀井遺跡（第９次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告67』（財）八尾市文化財調査研究会
92	亀井10次（ＫＭ99-10）	〃	亀井町１・２	H12/3/6～3/31	成海佳子　2001「Ⅵ　亀井遺跡（第10次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告67』（財）八尾市文化財調査研究会
93	亀井北（ＫＫ01-2、02-1、03-１）	大市協	大阪市平野区加美４	H14/2～３H15/3・H15/7	辻美紀　2004「亀井北遺跡発掘調査報告」（財）大阪市文化財協会

凡例　大阪府教育委員会〔府教委〕　八尾市教育委員会〔市教委〕　(財)大阪文化財センター〔大文セ〕
(財)大阪府文化財調査研究センター〔大文研セ〕　(財)大阪府文化財センター〔大府文セ〕
(財)八尾市文化財調査研究会〔八文研〕　(財)大阪市文化財協会〔大市協〕

第３章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

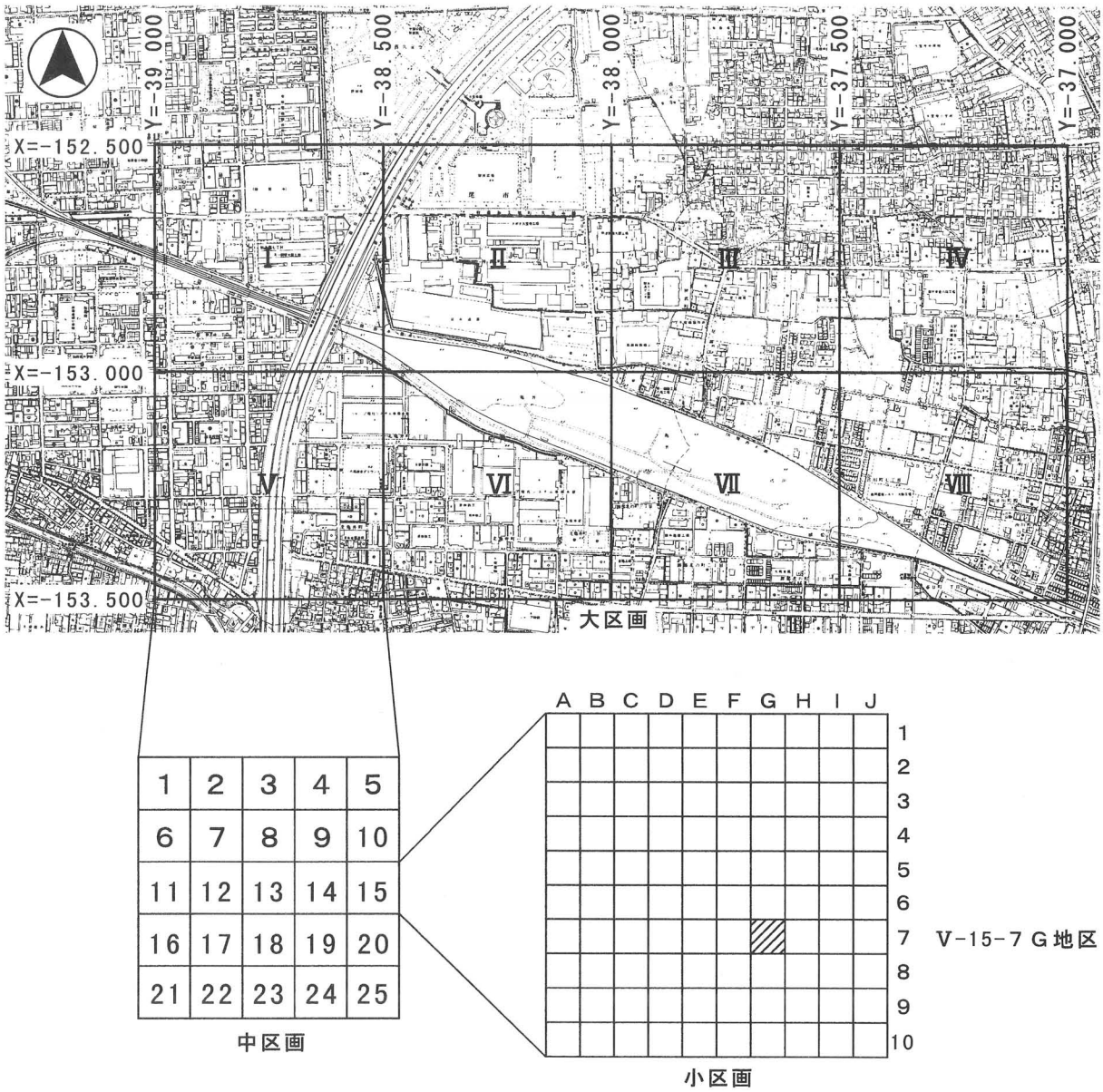
今回、久宝寺遺跡第25次調査を実施した久宝寺遺跡南西部においては、北亀井町３丁目で実施した第１次調査（ＫＨ84－１）、第９次調査（ＫＨ91－９）で古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）の居住域や墓域が検出されている他、平成９年度に旧国鉄竜華操車場跡地内西部で実施された第22次調査（ＫＨ97－22）では、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構・遺物が検出されている。また、西接する近畿自動車道に伴う亀井北（その１）発掘調査では、弥生時代前期～奈良時代に比定される遺構・遺物が検出されており、遺跡名を異にするものの本来は一連の遺跡であったと考えられる。これらの発掘調査の結果から遺跡範囲南西部では、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が重層的に検出され、沖積低地に特有の河川堆積物の累重により形成された不安定な微地形を積極的に活用した、各時期の集落の拡がりが確認されている。

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地とその周辺で計画された八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に伴うもので、平成９年度以降、基盤整備事業の一環として、主に道路部分を中心とした発掘調査が継続して実施されている。平成10年度については、久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98－25）として、竜華東西線道路（25次－２・３調査区）および区画道路３号線道路（25次－１・７～９調査区）・４号線道路（25次－４～６調査区）を調査対象とした。総調査面積は3022.5㎡を測る。調査方法は遺跡範囲確認調査の結果により、現地表下1.65ｍまでを機械掘削とし、以下0.95ｍについては人力掘削を行った。その後、１～３調査区においては数箇所のグリッドを設定し、下層確認調査を実施している。

調査地の地区割については、竜華操車場跡地周辺を含む東西２km、南北１kmにわたって、国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕（原点－東経136°00′、北緯36°00′・福井県越前岬付近）を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成９年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500ｍ四方で全体を８区（Ⅰ～Ⅷ）に区分し、北西隅の区画をⅠとし南東隅をⅧと呼称した。中区画は大区画を100ｍ単位に25区（１～25）に区分し、北西隅の区画を１とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10ｍ単位に区画し、地区の呼称については、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｊ）、南北方向は算用数字（北から１～10）で示し、１Ａ地区～10Ｊ地区とした。以

第２表　調査区一覧表

調　査　名	調　査　箇　所	面積（㎡）	調　査　期　間	調査担当者
１調査区（ＫＨ98－25－１）	区画道路３号線	213.5	H11/５/10～６/10	古川
２調査区（ＫＨ98－25－２）	竜華東西線	1078.5	H11/１/29～４/15	原田・古川
３調査区（ＫＨ98－25－３）	〃	1624.0	H11/２/８～６/４	坪田・森本
４調査区（ＫＨ98－25－４）	区画道路４号線	19.2	H11/６/８～６/16	原田
５調査区（ＫＨ98－25－５）	〃	19.2	H11/６/16～７/５	原田
６調査区（ＫＨ98－25－６）	〃	19.2	H11/７/２～７/12	古川
７調査区（ＫＨ98－25－７）	区画道路３号線	16.3	H11/６/14～７/１	森本
８調査区（ＫＨ98－25－８）	〃	16.3	H11/６/28～７/８	森本
９調査区（ＫＨ98－25－９）	〃	16.3	H11/７/８～７/15	坪田



第３図　久宝寺遺跡地区割り模式図

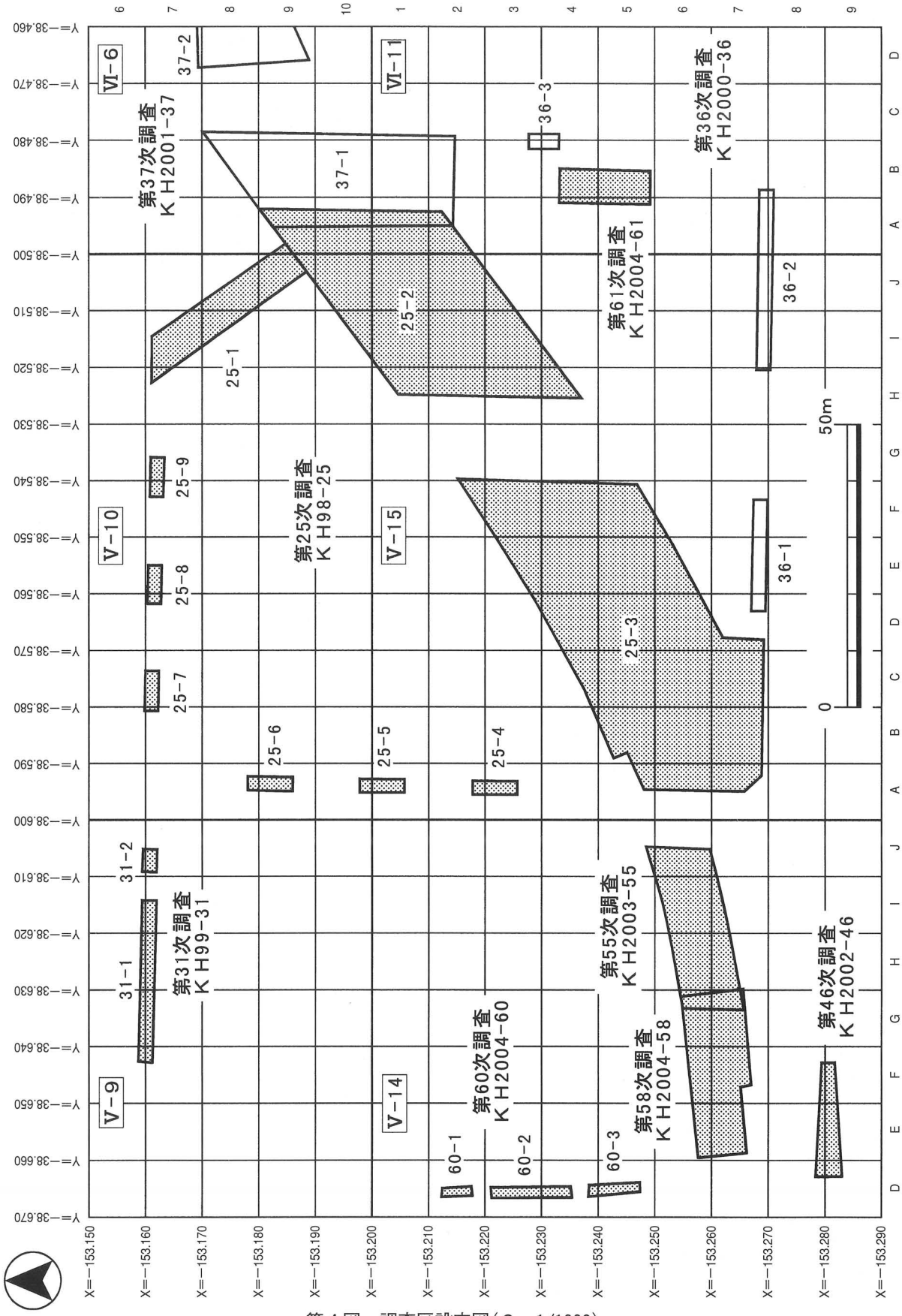
上の区分法を使用して、個々の地区表記においては、第３図の凡例で示したような表示方法を取った。なお、小区画内の地点表示については、国土座標値を入れる方法を取った。

調査面の呼称については、人力による調査で検出した面を上部より「第１面」とした。

遺構名については、遺構略号＋面番号＋遺構番号で表記した。遺構番号は報告書作成段階に各調査区の遺構面を統一した後、遺構毎に１調査区から順番に付した通し番号(01～）である。

現地調査での面毎の平面図の作成については、１～３調査区で各調査区当たり２回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)を実施した他は、平板測量を基本とした。調査区周囲の地層断面図は1/20とし、主な遺構の平面・断面図については1/10・1/20等に統一した。

なお調査においては、第１面で水田、第３面で畑状遺構といった生産関連遺構が検出された。作物の種類同定、及び古植生・古環境復元の目的で、花粉分析を実施した(第４章参照)。



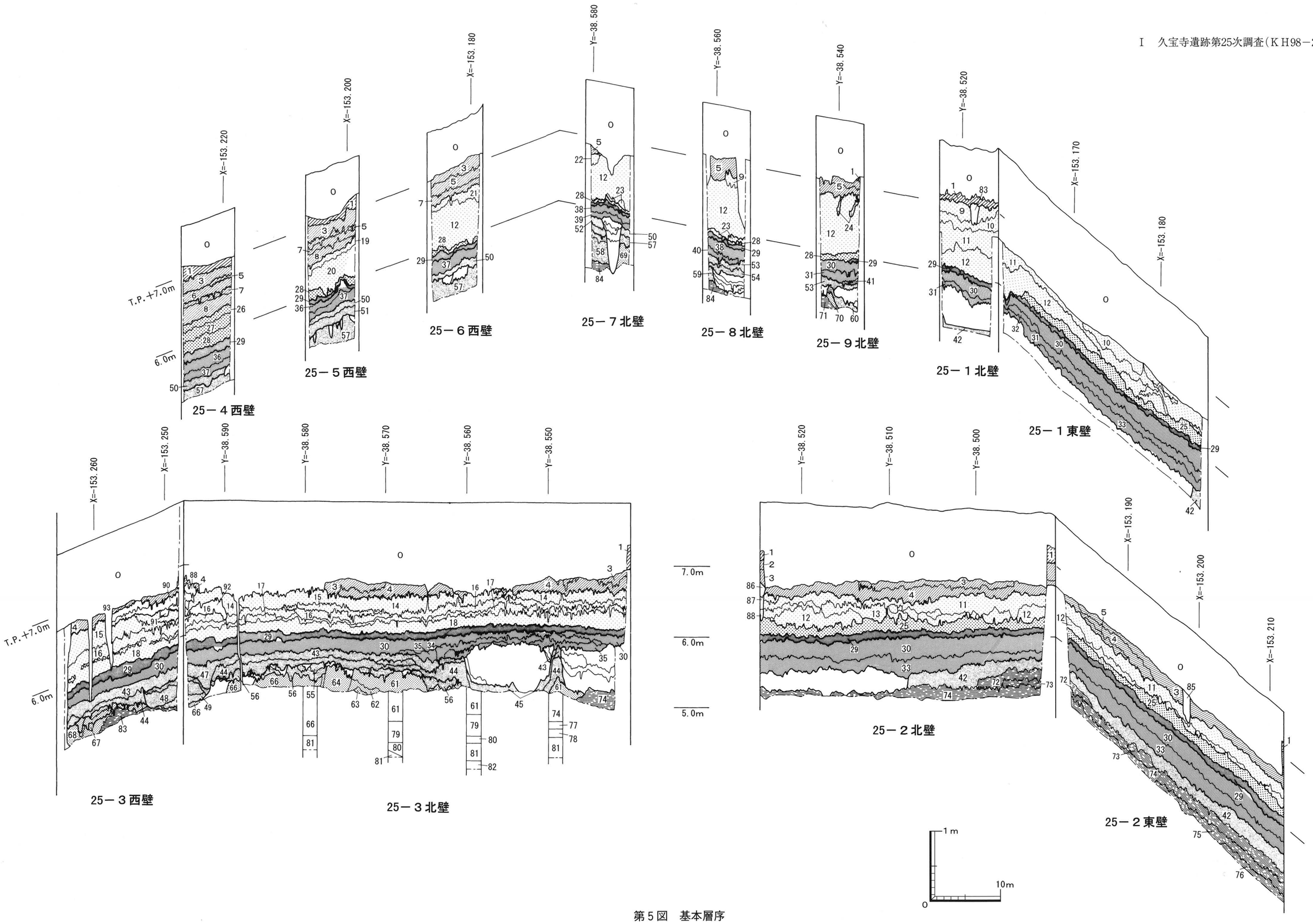
第４図　調査区設定図（Ｓ＝1/1000）

第２節　基本層序

調査地全体を通して観察された地層を層相から11層に大別し、基本層序としてローマ数字で示した(第０～Ｘ層)。

調査地の現況は１～３調査区がグラウンド、４～９調査区が道路上にあたり、最上層（第０層）はそれらの造成時の盛土・整地層・アスファルトである。現地表面の標高はT.P.＋7.7～7.9mを測る。第Ⅰ層は旧耕土に当たり、最高所の２・３調査区ではT.P.＋7.3mで検出される。層厚は最大で0.35mを測る。第Ⅱ層は層厚0.2～0.5mを測るグライ化が著しい層相で、第Ⅰ層と同様耕作土と捉えられる。最大で４層に分層される(５調査区)。時期は中世頃～近世と考えられる。第Ⅰ・Ⅱ層から、グラウンド造成以前は連綿と水田耕作が営まれていたことが看取される。第Ⅲ層は極細粒砂～中粒砂を基調とし、シルト～粘土の薄層と互層状を成す不安定な水成層である。上面の標高は１調査区北部のT.P.＋7.1mが最高、２調査区南部のT.P.＋6.6mが最低である。層厚は0.2m(４調査区)～1.1m(１調査区北部)を測る。おおむね当層までが機械掘削範囲である。第Ⅳ層は主に粘土～シルトの互層から成る水成層である。層厚は４調査区が0.7mと厚く、他の調査区では0.1～0.3mとなっている。３調査区では第Ⅲ層との境が不明瞭で、合わせて第Ⅲ層としているが、第Ⅲ・Ⅳ層は一連の水成堆積と捉えられよう。層位的には古墳時代後期以降、また西部の第46次・第58次調査の成果から見て飛鳥時代頃までに形成された地層である。第Ⅴ層は多量の未分解植物遺体を重層的に含む特異な層相である。上面の標高はT.P.＋5.9～6.2m、層厚0.1～0.2mを測る。当層は１調査区東側で実施した第37次調査２調査区東部を東限とし、西は近畿自動車道建設に伴う「亀井北(その１～３)」調査地までの広がりが確認されている。亀井北では古墳時代中期の水田面を覆い、上面では古墳時代後期の水田が検出されており、当地周辺の鍵層となっている。第Ⅵ層は粘土～シルト質粘土を基調とし、植物遺体・炭酸鉄を多く含む層相である。ＮＲ201埋没後に沼沢地が広がっていた環境が看取される。上面の標高はT.P.＋5.8～6.1m、層厚は0.1～0.6mを測り東部ほど厚い。上面が第１面である。第Ⅶ層も粘土～シルト質粘土を基調とする層相である。古墳時代前期の包含層で、土壌化して暗色帯を形成する部分がある。上面の標高はT.P.＋5.5～5.8m、層厚は0.1～0.4mを測る。上面が第２面である。第Ⅷ層のシルト～シルト質粘土は３・６・７・９調査区で確認した。上面の標高はT.P.＋5.5～5.6m、層厚は0.2～0.4mを測る。第Ⅸ層の砂層は３・５・７・９調査区で確認され、最大層厚0.85mを測る。両層は洪水による一連の水成層と捉えられ、３調査区から７調査区の南北方向に伸びる自然堤防が形成されている状況である。この堤防上は土壌化が顕著に認められ、第３・４面遺構が検出される。第Ｘ層以下は下層確認トレンチ等で部分的に確認したものである。粘土を基調とする安定した水平堆積を呈し、一部で間層として砂層が認められる。約T.P.＋4.6mで弥生時代後期に比定される土器が出土している。

写真５　１調査区機械掘削


25－４西壁
25－５西壁
25－６西壁
25－７北壁
25－８北壁
25－９北壁
25－１北壁
25－１東壁
25－３西壁
25－３北壁
25－２北壁
25－２東壁
T.P.+7.0m
6.0m
7.0m
5.0m
1m
10m
0

第５図　基本層序

第３表　基本層序

基本層序	層番号	層　名
0	0	盛土
1	1	旧耕土　10BG3/1暗青灰色シルト
Ⅱ	2	10BG6/1青灰色シルト　Fe
	3	2.5GY6/1オリーブ灰色シルト　Fe
	4	10BG6/1青灰色粘土質シルト　Fe多　Mn多
	5	10YR5/1褐灰色細粒砂混シルト　Fe　Mn
	6	2.5GY8/1灰白色極細粒砂～粘土質シルトの互層
	7	7.5YR7/8黄橙色粘土質シルト　Fe
	8	10YR6/2灰黄褐色粘土　Mn多　Fe多
Ⅲ	9	7.5Y6/1灰色極細粒砂混シルト　斑Fe
	10	5Y6/1灰色シルト　斑Fe
	11	5Y8/1灰白色シルト～粘土の互層
	12	2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混
	13	N6/0灰色粘土質シルト　Fe
	14	10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂混シルト質粘土 Fe多　Mn多
	15	10YR5/6黄褐色極細粒砂～シルト Fe多
	16	2.5Y5/1黄灰色粘土　Fe多
	17	2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～粘土質シルトの互層　Fe多
	18	2.5Y4/1黄灰色粘土～シルトの互層　上部Fe多
	19	2.5GY8/1灰白色極細粒砂～シルト質粘土の互層
	20	N8/0灰白色極細粒砂～細粒砂の互層
	21	N7/0灰白色シルト
	22	5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂　粘土ブロック少　Fe
	23	10Y4/1灰色シルト
	24	10YR5/2灰黄褐色シルト　Fe
Ⅳ	25	N5/0灰色極細粒砂～粘土質シルトの互層
	26	N7/0灰白色粘土　上部土壌化
	27	N6/0灰色粘土　Fe少
	28	N5/0灰色粘土　炭植ラミナ
Ⅴ	29	2.5Y3/1黒褐色粘土　植遺・炭植ラミナ多
Ⅵ	30	5Y4/1灰色シルト質粘土　炭酸鉄　植遺　Fe
	31	10G5/1緑灰色シルト質粘土　炭酸鉄少　植遺
	32	N5/0灰色極細粒砂混シルト質粘土　植遺少
	33	10GY5/1緑灰色粘土
	34	10Y4/1灰色細粒砂混シルト質粘土
	35	10Y4/1灰色シルト質粘土　Fe少　炭酸鉄少　炭植
	36	10YR4/1褐灰色粘土質シルト　炭酸鉄多
	37	N6/0灰色粘土質シルト　炭植ラミナ
	38	7.5Y3/1オリーブ黒色シルト混粘土　植遺　炭植　炭酸鉄
	39	5G3/1暗緑灰色シルト混粘土　炭植極少
	40	10Y3/1オリーブ黒色粘土　炭植　炭酸鉄少
	41	5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混粘土質シルト　炭植少
Ⅶ	42	10Y5/1灰色シルト質粘土　炭酸鉄少
	43	7.5Y3/2オリーブ黒色粘土　植遺少
	44	10BG2/1青黒色細粒砂～粗粒砂混粘土
	45	10G3/1暗緑灰色粘土　植遺多
	46	7.5Y3/1オリーブ黒色粘土　炭植ラミナ
Ⅶ	47	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルトの互層　斑Fe少
	48	2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト　植遺多　斑Fe少
	49	7.5Y4/1灰色シルト質粘土　植遺少　炭酸鉄　斑Fe少
	50	7.5GY7/1明緑灰色粘土質シルト
	51	N5/0灰色シルト質粘土
	52	10Y4/1灰色シルト質粘土　植遺
	53	5Y3/1オリーブ黒色細礫極少混粘土　植遺　炭植
	54	5Y4/1灰色粘土　植遺少　炭植少
Ⅷ	55	7.5GY5/1緑灰色粘土質シルト　上部土壌化
	56	5BG5/1青灰色シルト　Fe少
	57	10G7/1明緑灰色極細粒砂　上部土壌化
	58	10GY5/1緑灰色シルト
	59	7.5GY5/1緑灰色シルト～粘土質シルト　上部ブロック状
	60	10Y3/1オリーブ黒色粘土　植遺極少
Ⅸ	61	10BG6/1青灰色シルト～粗粒砂の互層
	62	10Y5/1灰色シルト～粘土の互層
	63	2.5Y5/4黄褐色細粒砂～粗粒砂　植遺
	64	5Y7/2灰白色～5BG6/1青灰色シルト～粗粒砂の互層　植遺少
	65	5BG6/1青灰色シルト
	66	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルトの互層
	67	2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト～細粒砂の互層
	68	5Y6/3オリーブ黄色極細粒砂～粗粒砂の互層
	69	7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混
	70	7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～粗粒砂
	71	5GY6/1オリーブ灰色シルト～粗粒砂の互層
Ⅹ	72	5G5/1緑灰色細粒砂混粘土質シルト
	73	10G6/1緑灰色シルト質粘土　植遺少
	74	5G4/1暗緑灰色シルト混粘土　炭酸鉄少
	75	7.5Y5/1灰色シルト質粘土
	76	5B5/1青灰色粘土
	77	10Y5/1灰色シルト～極粗粒砂
	78	10Y4/1灰色粘土　植遺多　炭酸鉄極少
	79	7.5Y4/1灰色粘土　植遺ラミナ
	80	2.5GY3/1～2/1暗オリーブ灰色細粒砂混粘土
	81	7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂混粘土
	82	N6/0灰色極細粒砂
	83	7.5GY4/1暗緑灰色シルト　植遺少　斑Fe少
	84	10YR3/1黒褐色シルト質粘土
	85	7.5Y6/1灰色極細粒砂混粘土質シルト　Fe多
	86	10YR6/1褐灰色極細粒砂混粘土質シルト　Fe多 粘土ブロック少
	87	2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土質シルト　粘土ブロック多
	88	N5/0灰色極細粒砂極少混粘土
	89	10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂少混粘土質シルト　Mn　Fe
	90	2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土　Mn　Fe多
	91	10YR5/1褐灰色粘土質シルト　Mn　Fe多
	92	10YR6/1褐灰色シルト質粘土　Mn　上部Fe
	93	7.5Y5/1灰色シルト質粘土　Mn

植遺：植物遺体含む　炭植：炭化植物含む　Fe：鉄分含む　斑Fe：斑鉄含む　Mn：マンガン斑含む
植遺ラミナ：植物遺体をラミナ状に含む　炭植ラミナ：炭化植物をラミナ状に含む

第３節　検出遺構と出土遺物

１）各調査面の概要

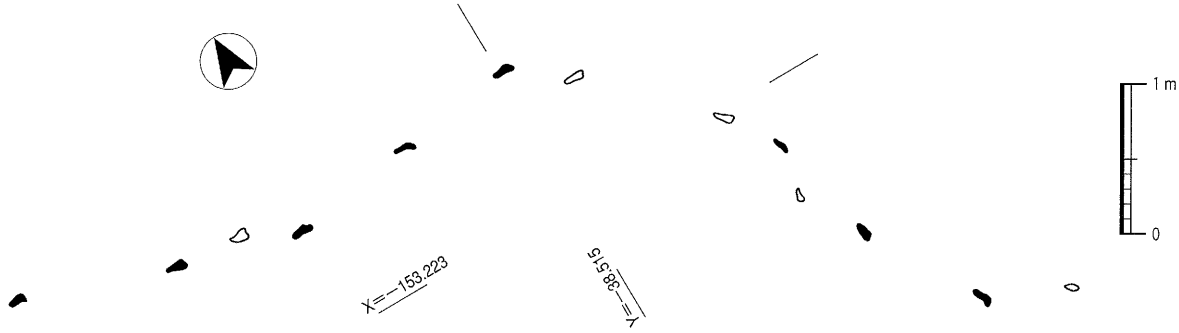
第１面

第１面は１～３調査区、５・６調査区の第Ⅵ層上面（T.P.＋6.1～5.8m）において、水田17筆（**水田**101～117）、畦畔17条（**畦畔**101～117）、溝１条（ＳＤ101）を検出した。調査区が分散していることから水田の区画性が不明瞭で、一筆耕地の範囲や田積を知り得たものはない。水田・畦畔の法量等は、表２・３にまとめた。なお、水田の時期については、西部で実施された「亀井北」の調査成果から古墳時代後期初頭（６世紀前半）とみられる。また水田上面を覆う第・層には砂の供給が見られず、粘性が強い粘土中に自然木や植物遺体が多量に含まれていることから、水田遺構の廃棄後は抽水植物が繁茂する沼沢地状の環境であったことが想定される。

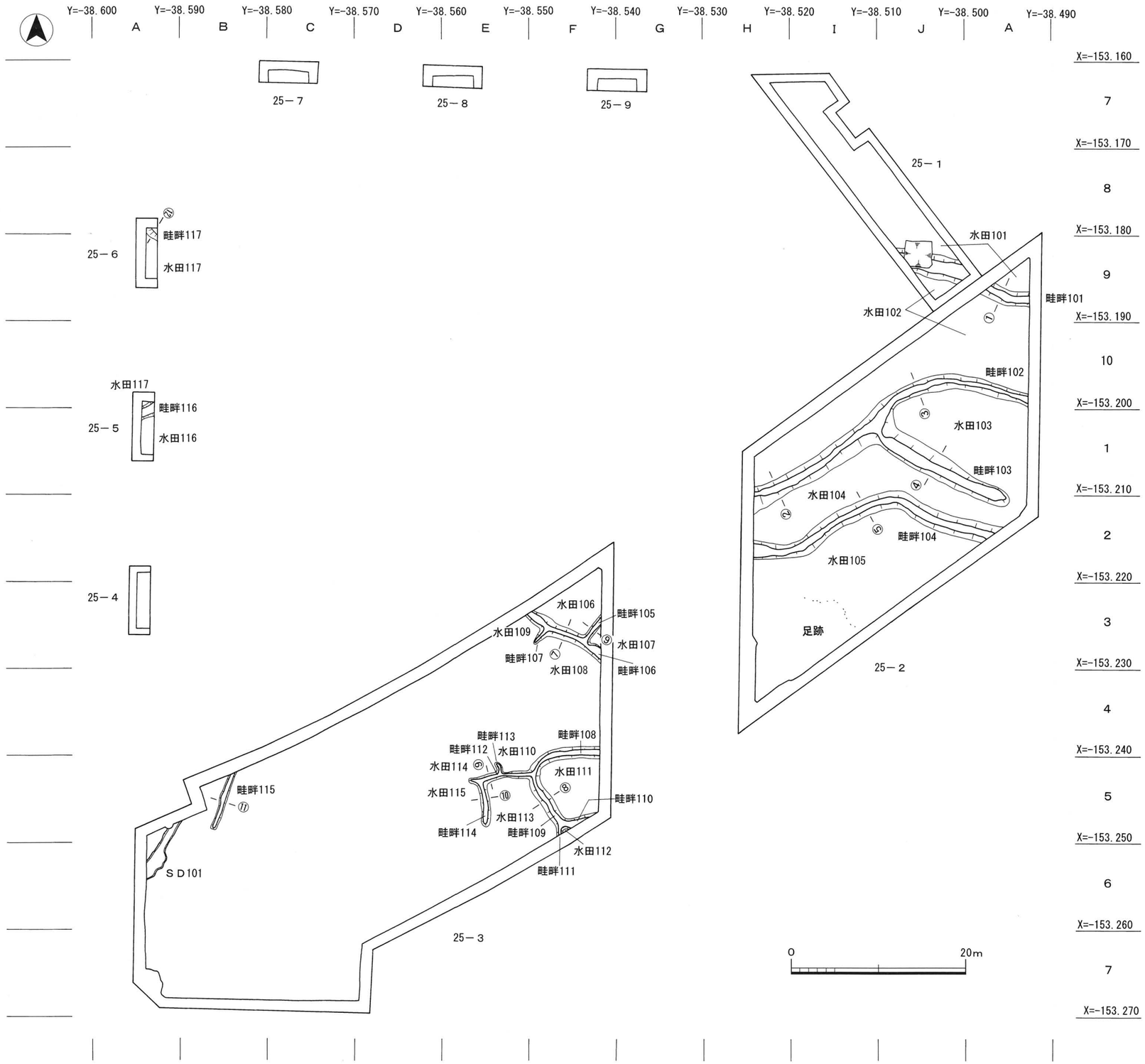
水田（**水田**）・畦畔（**畦畔**）

水田101～105、**畦畔**101～104

水田101～105は１・２調査区で検出した。**畦畔**101～104（上面幅0.52～1.06m・基底幅1.63～3.1m・畦畔高0.07～0.2m）によって区画されている。畦畔は直線的でなく蛇行する形に配置されていることから、微地形に沿って構築されたものと推定され、水田の平面形についても不定形な形状となっている。畦畔の配置では、概ね東西方向に並行して伸びた後、角度を互いに南に振る点で共通する**畦畔**102・104が最初に構築され、その後に**畦畔**102の屈曲部から南東方向に派生する**畦畔**103が構築されたものと推定される。これらの畦畔は、その規模からみて全て大畦畔に分類されるものである。断面形状は蒲鉾状で、基本的には水田面を構成する第Ⅵ層を盛り上げて構築されており、上面は土壌化が進行している。水口については**畦畔**103東端部の途切れた部分が考えられ、調査区東壁断面には続く畦畔の高まりが確認できることからも看取される。他に**畦畔**103が**畦畔**102に取り付く部分も、畦畔が低くなっており水口であった可能性がある。水田面の標高は、東から西に向かって緩やかに下がるもので、その高低差約0.1mを利用した灌漑水利が想定される。水田作土中には酸化鉄・マンガンの集積が認められないため、湿田の環境が推定される。なお**水田**105南西部で、ヒトの足跡13個を延長7.6mにわたって検出した。歩行は西から東に進んだ後、南東に方向を変えるものである。歩幅は40cm程度、足跡の寸法は長さ約15cm・幅約７cmを測る。畦畔内や水田面から遺物は出土していない。



第６図　水田105検出足跡平面図



第７図　第１面遺構平面図

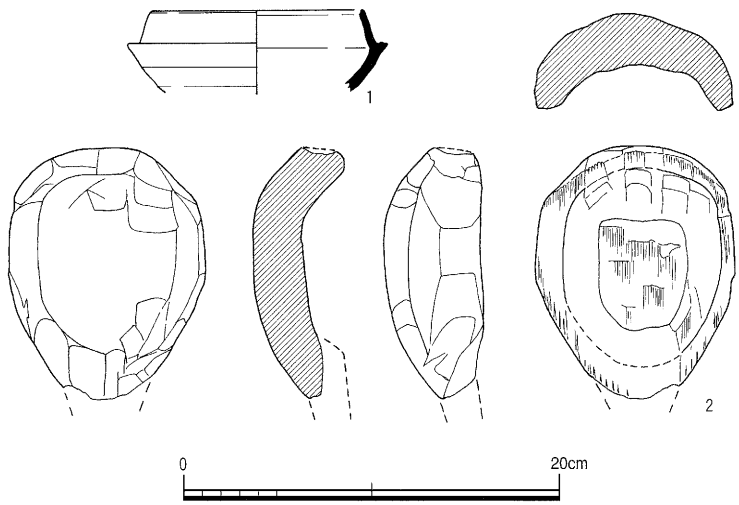
水田106～115、畦畔105～115

３調査区全域で検出した。水田域は**畦畔105～115**（上面幅0.19～0.75m・基底幅0.47～1.64m・畦畔高0.01～0.10m）で区画されているが、**畦畔114～115**間の東西約27mの範囲では畦畔が検出されず、この一帯は未耕地であった可能性がある。

北東部では北西－南東に伸びる**畦畔106**と、これにほぼ直角方向に取り付く**畦畔105・107**、そしてこれらで区画される**水田106～109**がある。**畦畔106**は他の畦畔に比して規模が大きく、大畦畔と捉えられる。畦畔の取り付きが直角に近いことから水田の平面形は方形に近いものと考えられる。南東部では、弧を描いて屈曲して伸びる**畦畔108・109**が大畦畔であり、その屈曲部から西に伸びる**畦畔112**と、これから直角方向に伸びる**畦畔113・114**、**畦畔109**の南端から分岐する**畦畔110・111**、そしてこれらで区画される**水田111～水田115** がある。水田の平面形は不定形である。北西部では南北方向の**畦畔115**と、これに平行するＳＤ101があり、位置や方向性からみて有機的な関連が推察される。

水田面の標高をみると、調査区東部に位置する**水田106～108・111**が約T.P.＋6.1mを測り最も高く、**水田114・115**が約T.P.＋6.03mとなっている。このことから、東から西に向かって各水田への水の供給が行われていたと推定されるが、その差はわずかでありやや不明確である。なお畦畔に水口は認められなかった。各畦畔は第Ⅵ層を盛って構築していると考えられるが、第Ⅵ層との境は不明瞭で分層できなかった。畦畔上部は、炭化物を含む等の土壌化が認められるが顕著とはいえず、また、水田面には明確な撹拌を伴う作土層は存在しない。これらのことから各水田が機能していたのは短期間であったと考えられる。

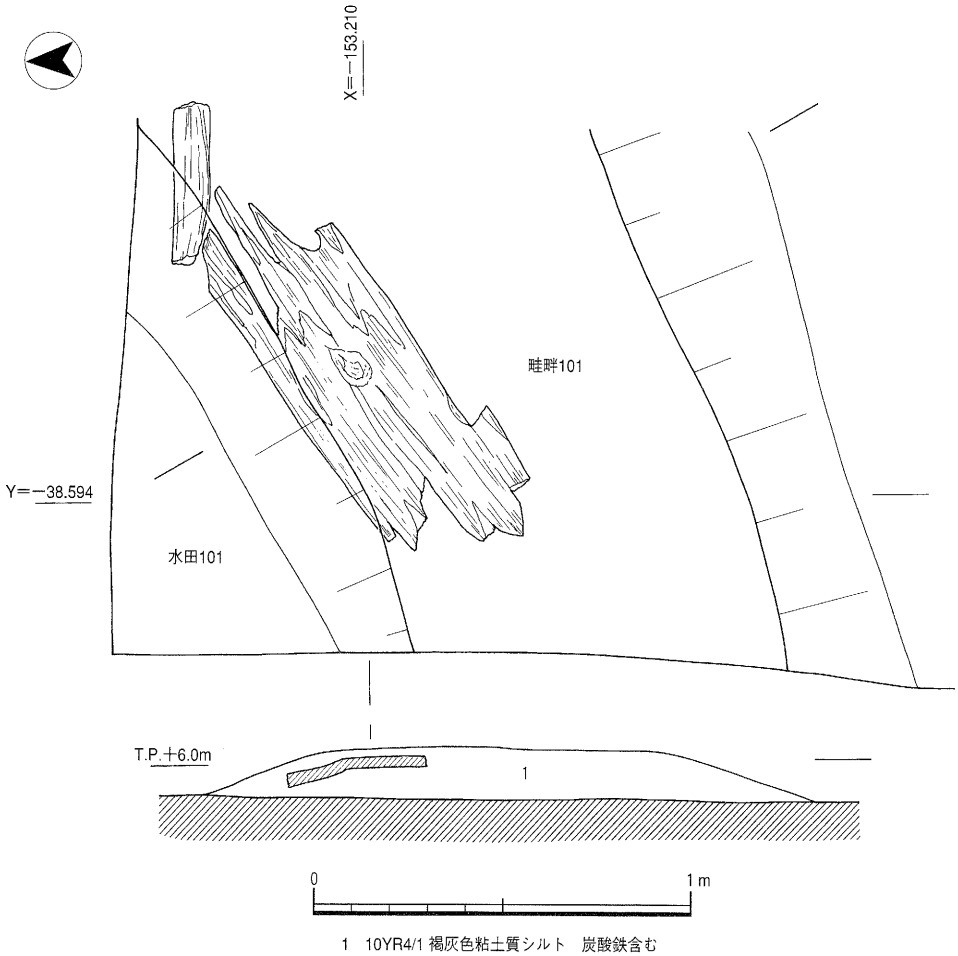
畦畔盛土からの遺物は、**畦畔105・106**の交点付近から須恵器杯身片（１）、**畦畔109・110・111**の交点付近から須恵器杯蓋片、**畦畔114**から庄内甕の細片１点、**畦畔112**から長さ45cmを測る板材が出土した。このうち杯蓋片は下位の第２面で検出したＳＫ202上層出土の４と接合しており、畦畔構築の際に垂直距離で10cm以上捲き上げられていることが分かる。１の須恵器杯身は６世紀初頭頃に比定されるものである。また水田面からは、**水田115**南西部で木製杓子が１点（２）出土している。２は柄を欠損するもので、残存長13.2cm・幅10.6cm・高さ5.3cmを測る。柾目材から手斧により削り出されたものと考えられ、幅２cm程度の面取り状の加工痕が明瞭に観察できる。頭部下面及び上面の縁には焼け焦げが見られるが、加工を容易にするための手法である可能性がある。類例としては古墳時代初頭（庄内式期）の資料とされる東大阪市新家遺跡出土品がある。幅15.2cmを測り、本例よりひと回り大きい。



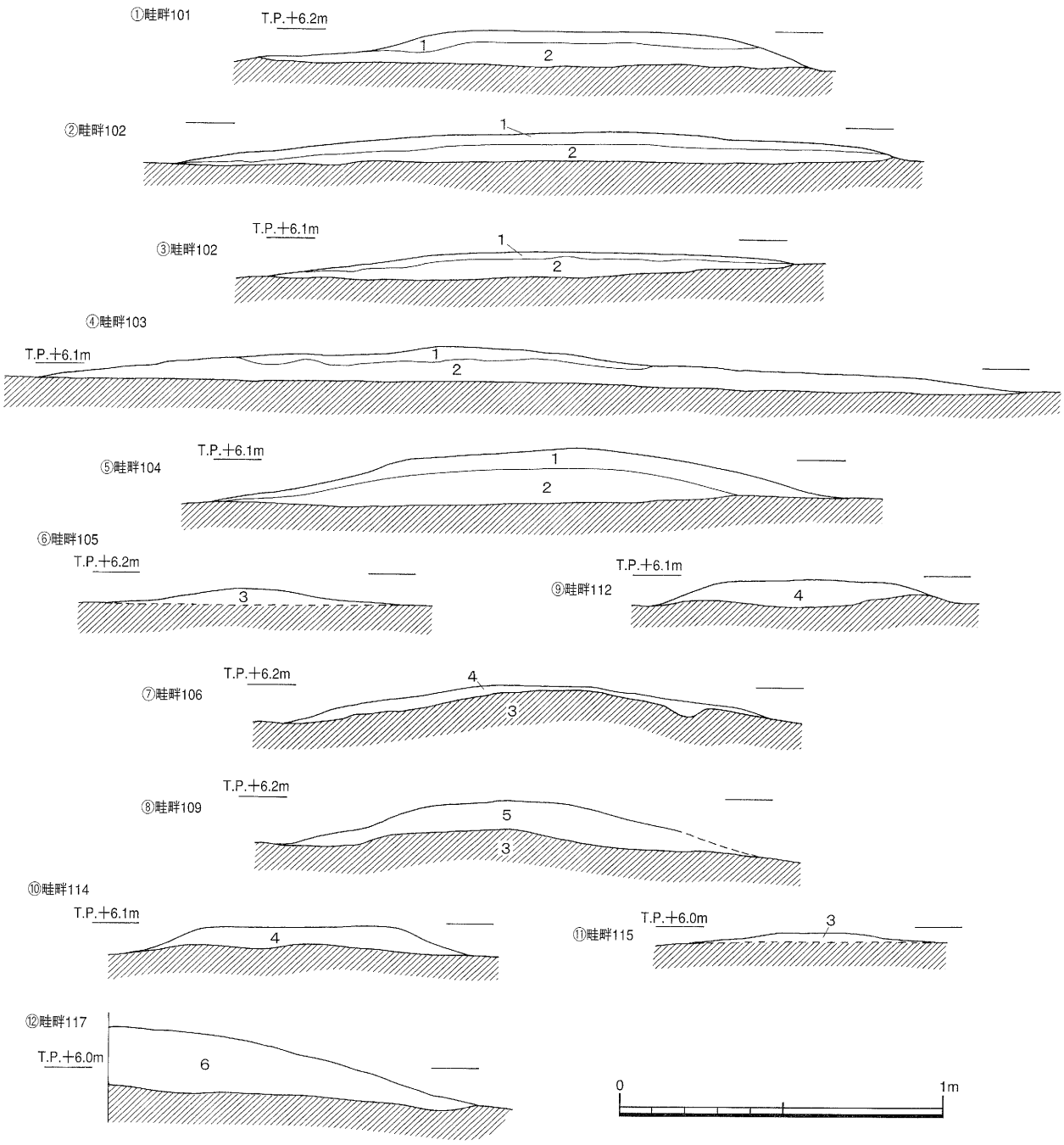
第８図　畦畔105・106、水田115出土遺物実測図

水田116・117、畦畔116・117

５調査区北部から６調査区にかけてのＶ－10－８～10Ａ地区、Ｖ－15－１Ａ地区で検出した。**畦畔116**より南側を**水田116**、**畦畔116**～**117**間を**水田117**とした。水田面の標高は**水田116**の南部でT.P.＋5.87m、**水田117**でT.P.＋5.8m前後を測る。**水田116・117**を区画する**畦畔116**は、第Ⅵ層を台形状に盛り上げて構築されており、検出長1.5m・上面幅0.9～1.0m・基底幅1.4～1.6m・畦畔高0.1m前後を測る。なお、畦畔上面から約４cm下部の地点で畦畔上面の北側ラインに並行して設置された大小２片の板材(**板材１・板材２**)を検出した。２点ともに、北側に向かって緩やかな傾斜面を持つ畦畔上面の傾斜面に沿って設置されている。板材の法量は、**板材１**が長さ1.2m、幅0.41m、厚さ0.06m、**板材２**が長さ0.42m・幅0.1m・厚さ0.04mを測る。２点ともに風化が著しく加工等の痕跡は不明である。畦畔内部からの出土であるため、畦畔の補強等を目的としたものと考えられる。**畦畔117**は北西－南東方向に伸びるもので、検出長2.0m・上面幅0.7m・基底幅1.4m・畦畔高0.2mを測る。畦畔上面の標高はT.P.＋6.06～5.88mを測る。構築に際しては下部の第Ⅵ層上に2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルトを盛っている。遺物は**畦畔117**盛土内から時期不明の土師器の小片が１点出土している。



第９図　畦畔116平断面図



畦畔101～104
　1　土壌化し、２層より灰色が強い
　2　2.5GY4/1暗オリーブ灰色　炭酸鉄含む
畦畔105・106・109・112・114・115
　3　5Y4/1灰色シルト質粘土　炭酸鉄・植物遺体・鉄分含む
　4　7.5Y3/1オリーブ黒色粘土　植物遺体・炭化植物含む
　5　10Y3/1オリーブ黒色粘土　炭化植物・鉄分含む
畦畔117
　6　2.5Y5/２暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト　植物遺体・鉄分含む

第10図　第１面畦畔断面図

第４表　第１面水田法量表（単位ｍ）

遺構番号	地　　区	規模：東西×南北	標高（T.P.+）	遺　物
水田101	Ⅴ-10-7～9H～J、Ⅵ-6-9A	28.0以上×25.0以上	5.84～6.07	
水田102	Ⅴ-10-9·10I·J、 Ⅴ-15-1H·I、Ⅵ-6-9·10A	31.0以上×10.0	5.98～6.06	
水田103	Ⅴ-10-10J、Ⅴ-15-1J、 Ⅵ-6-10A、Ⅵ-11-1A	15.5以上×10.0	6.01～6.06	
水田104	Ⅴ-15-1·2H～J、Ⅵ-11-2A	31.0以上×6.6	6.00～6.02	
水田105	Ⅴ-15-2～4H～J、Ⅵ-11-2A	26.0以上×16.5以上	5.95～6.08	
水田106	Ⅴ-15-2·3F	7.5以上×8.6以上	6.04～6.14	
水田107	Ⅴ-15-3F	1.4以上×3.0以上	6.10	
水田108	Ⅴ-15-3·4F	7.4以上×3.6以上	6.10	
水田109	Ⅴ-15-3EF	2.0以上×3.2以上	6.11	
水田110	Ⅴ-15-4·5E·F	10.5以上×2.5以上	6.10	
水田111	Ⅴ-15-5F	7.0以上×7.4	6.08～6.10	
水田112	Ⅴ-15-5F	1.6以上×0.8以上	6.05	
水田113	Ⅴ-15-5E·F	6.6×9.8以上	6.08	
水田114	Ⅴ-15-5E	3.4以上×1.2以上	6.03	木製杓子（２）
水田115	Ⅴ-15-5E	5.0以上×1.2以上	6.03	
水田116	Ⅴ-15-1A	1.5以上×5.2以上	5.87～5.92	
水田117	Ⅴ-10-9·10A	1.4以上×20.6	5.80～5.95	

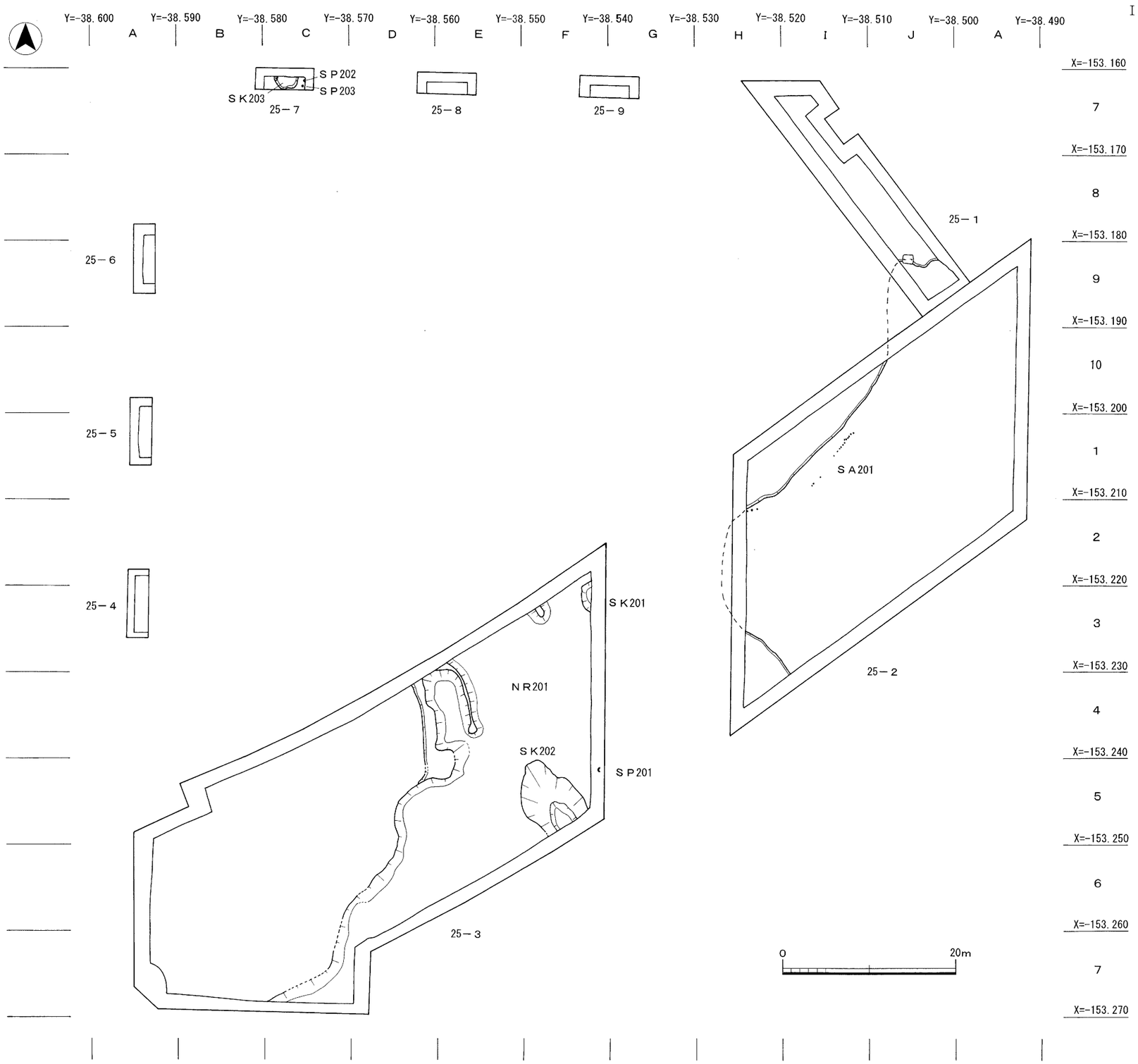
第５表　第１面畦畔法量表（単位ｍ）

遺構番号	地　　区	検出長	上　幅	基底幅	高　さ	備　　考
畦畔101	Ⅴ-10-9J、Ⅳ-6-9A	15.1	0.20～1.80	1.70～2.70	0.10～0.20	
畦畔102	Ⅴ-10-10I·J、 Ⅴ-15-1·2H～J、 Ⅳ-6-10A	34.7	0.40～0.93	1.63～1.78	0.08	
畦畔103	Ⅴ-15-1I·J、 Ⅳ-11-1·2A	16.4	0.95～1.40	2.10～3.10	0.08～0.20	
畦畔104	Ⅴ-15-1·2H～J、 Ⅳ-11-2A	28.5	0.55～1.65	1.55～2.30	0.14～0.18	須恵器杯身（１）
畦畔105	Ⅴ-15－3F	3.6	0.27～0.33	0.75～0.83	0.03～0.05	
畦畔106	Ⅴ-15-3E·F	10.1	0.39～0.75	1.13～1.64	0.01～0.09	
畦畔107	Ⅴ-15-3F	2.4	0.25～0.43	0.47～0.93	0.01～0.04	須恵器杯蓋
畦畔108	Ⅴ-15-4·5F	8.1	0.29～0.25	1.20～1.40	0.01～0.09	
畦畔109	Ⅴ-15-5F	6.6	0.29～0.54	1.20～1.50	0.01～0.09	
畦畔110	Ⅴ-15-5F	4.0	0.35～0.49	1.08～1.17	0.02～0.03	板材
畦畔111	Ⅴ-15-5F	1.5	0.22～0.37	0.58～0.66	0.02～0.03	
畦畔112	Ⅴ-15-5E	7.2	0.20～0.44	0.68～0.87	0.02～0.10	庄内甕
畦畔113	Ⅴ-15-5E	1.4	0.19～0.28	0.57～0.62	0.01～0.08	
畦畔114	Ⅴ-15-5E	5.0	0.35～0.53	0.94～1.01	0.01～0.04	
畦畔115	Ⅴ-15-5B	7.2	0.27～0.41	0.65～0.84	0.02～0.05	土師器
畦畔116	Ⅴ-10-10A、Ⅴ-15-1A	1.5	0.90～1.00	1.40～1.60	0.10	
畦畔117	Ⅴ-10-8·9A	2.0	0.7以上	1.40以上	0.2	

溝（ＳＤ）

ＳＤ101

３調査区西部、Ⅴ－15－５・６Ａ・Ｂ地区で検出した北東－南西方向の溝である。法量は検出長7.8ｍ・幅0.9～1.9ｍ・深さ約0.06ｍを測る。断面皿状を呈し、埋土は第１面を覆う第Ⅴ層である。畦畔115の西約3.0ｍに平行して伸びるもので、有機的な関連が想定される。遺物は出土していない。



第11図　第２面遺構平面図

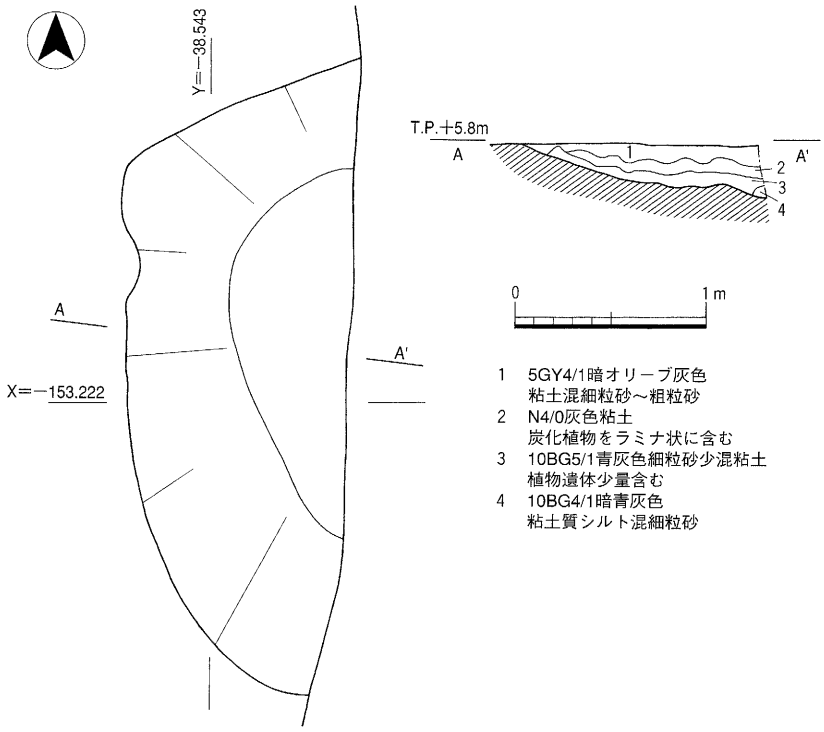
第２面

第２面は第１面より約0.3～0.5m下部の第Ⅶ層上面（T.P.＋5.6～5.4m）にあたる。１～３・７・９調査区で、土坑３基（ＳＫ201～203）、小穴３個（ＳＰ201～203）、杭列１条（ＳＡ201）、自然河川１条（ＮＲ201）を検出した。時期的には古墳時代後期のＳＫ202を除けば、古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ201

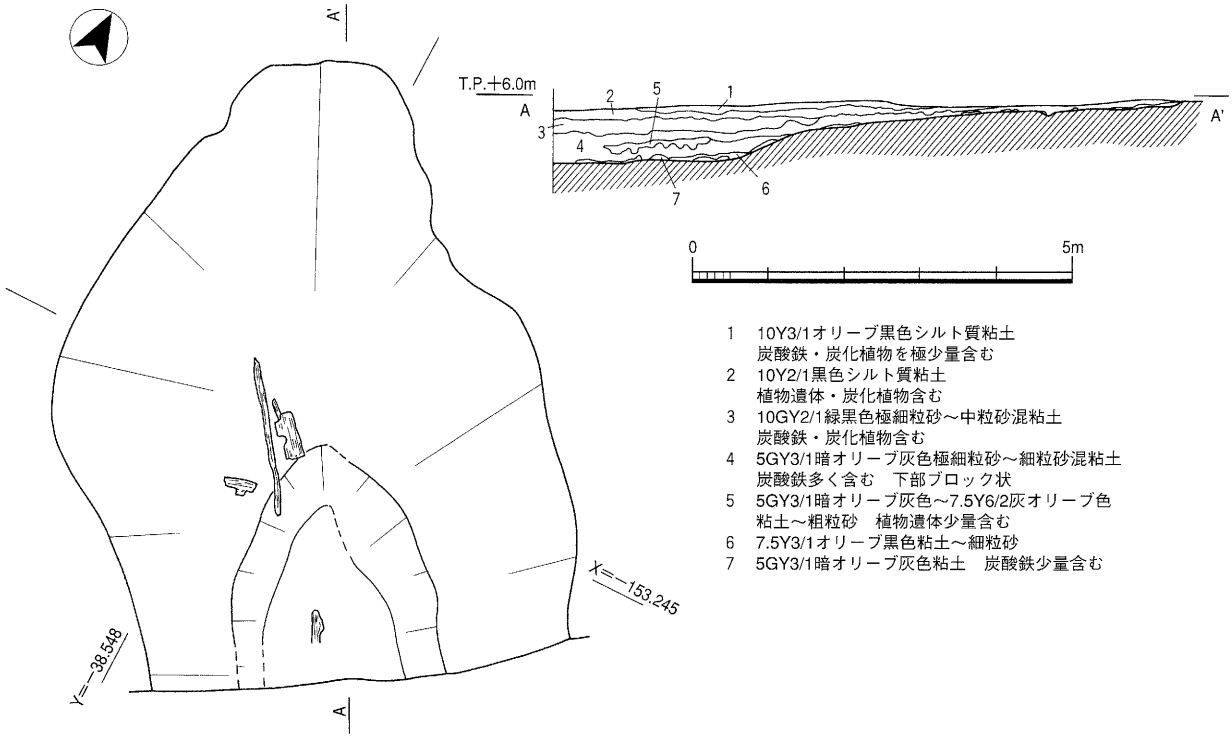
３調査区北東隅のＶ－15－３Ｆ地区で検出した。東部は調査区外に至る。検出部の平面形は半円形に近く、検出部分で東西幅1.1m・南北幅3.4m・深さ0.6mを測る。断面逆台形を呈する。埋土は４層から成り、おおむね灰色～暗青灰色系の細粒砂混じり粘土で、植物遺体・炭化植物を含む層相である。遺物の出土は第１層からのみであり、土器では小形の布留式甕１点（３）、他に自然木が出土している。３は球形に近い体部を呈するもので、法量は口径11.2cm・器高16.8cm・体部最大径16.7cmを測る。底体部は外面ハケ、内面ヘラケズリが全面に施され、内面底部には指頭圧痕が残る。内面にはヘラケズリの際に生じたと思われる粘土片が付着している。肩部外面には３個の刺突文を有する。外面のほぼ全体が煤けて黒色を呈する。時期は古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。



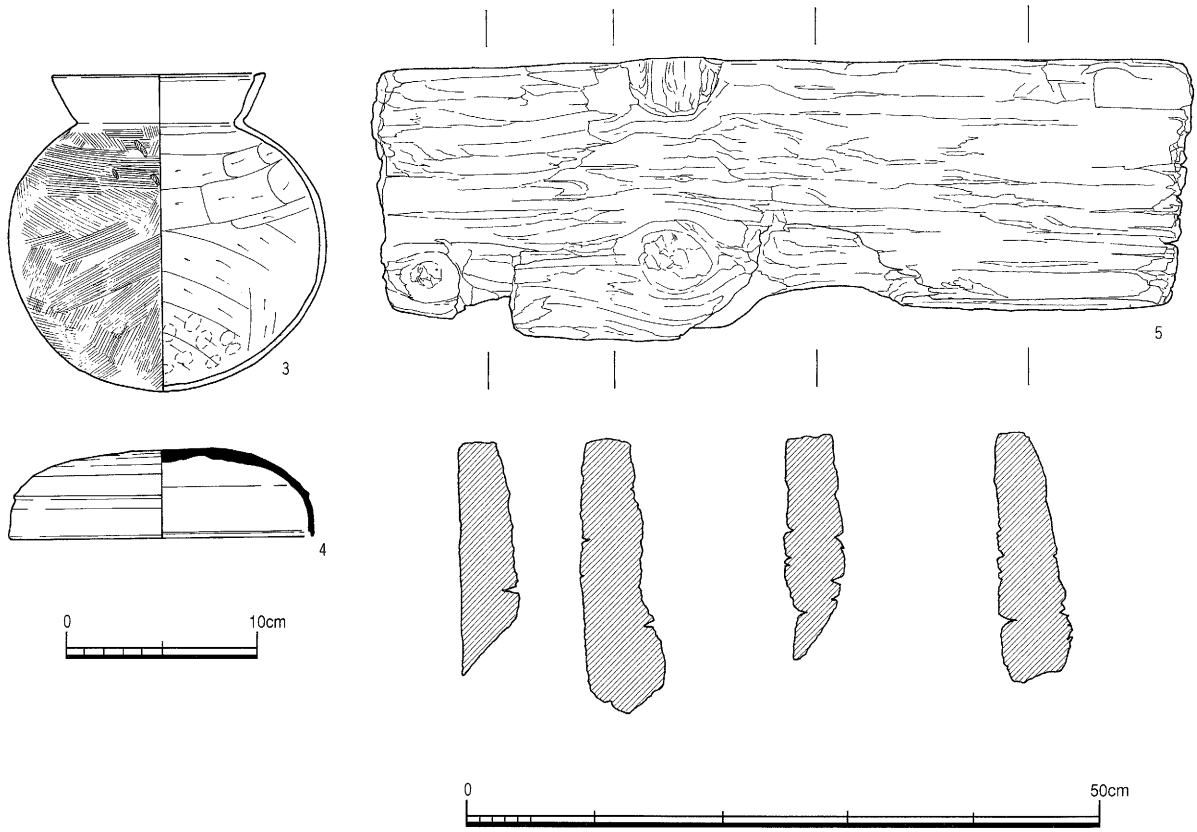
第12図　ＳＫ201平断面図

ＳＫ202

３調査区南東隅のＶ－15－５Ｅ～Ｆ地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅5.5m・南北幅8.2m・深さ0.8mを測る。掘方は、緩やかな傾斜から中央が断面逆台形に落ち込む二段掘り状である。埋土は７層から成り、上部は黒色系、下部は暗オリーブ灰色系を呈する。ブロック状を呈する層もみられ、全体に植物遺体・炭化植物・炭酸鉄を多く含んでいる。遺物は最上層からのみ出土しており、土器では須恵器杯蓋（４）、木製品では板材（５）の他、自然木が数点出土している。４は口径16.1cm・器高4.7cmを測るもので、ＭＴ15型式（６世紀初頭）に比定される。なお口縁の一部は、第１面畦畔109～111の交点付近から出土した破片が接合された。５は長



第13図　ＳＫ202平断面図

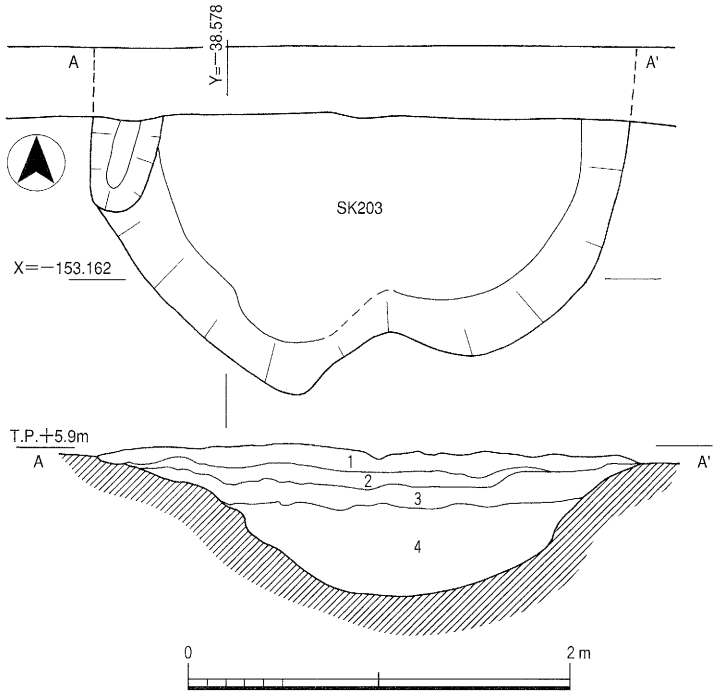


第14図　ＳＫ201・202出土遺物実測図

さ65.2cm・幅21.4cm・厚さ最大6.0cmを測る板材である。長辺側に抉りを施しており、規模から見て建築部材と考えられるが用途は不明である。

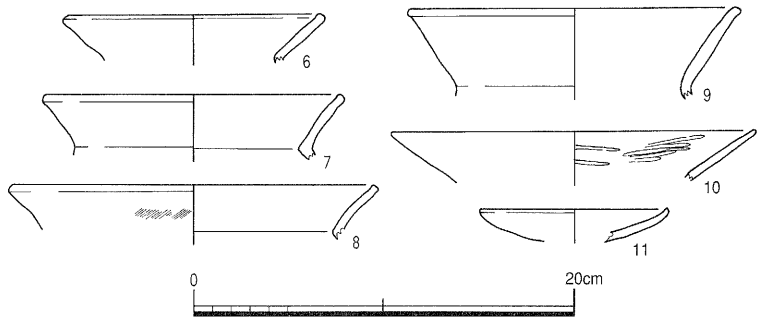
ＳＫ203

７調査区中央のＶ－10－７Ｃ地区で検出した。遺構は北壁および調査区の北側に広がっており、全容を確認することはできなかった。しかし、検出部分の形状と北壁の観察から、径3.0m前後の不定形な土坑になると思われる。深さ約0.8mを測り、埋土は暗緑灰色系の砂混じりシルト質粘土～粘土質シルトの４層から成る。全体的に炭の含有が認められ、第２層には粘土ブロックが含まれる。遺物は第１・２層から古墳時代前期後半（布留式新相）までに比定される土器が多く出土しているが、全てが小片である。６～11を図化したが、調整等に不明な点が多い。布留式甕（６・７）、庄内式甕（８）、短頸直口壷（９）、高杯（10）、小形器台（11）がある。甕は口縁端部が小さく肥厚する６、小さく巻き込む７、小さく摘みあげる８がある。８は生駒西麓産の胎土である。10は内面下部の様子からみて、二段に屈曲する杯部を有する高杯と思われる。



1　2.5GY2/1黒色シルト質粘土　炭多量に含む
2　5G2/1暗緑灰色粘土質シルト　黒色粘土ブロック含む
3　5G2/1緑黒色粗粒砂混粘土質シルト　炭少量含む
4　5G3/1暗緑灰色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土

第15図　ＳＫ203平断面図



第16図　ＳＫ203出土遺物実測図

小穴（ＳＰ）

ＳＰ201

３調査区南東部のＶ－15－５Ｆ地区で検出した。東壁内の検出で東部は調査区外に至る。西半部は側溝掘削時に削平しており詳細は不明である。平面形はほぼ円形を呈すると思われ、規模は直径約0.6m・深さ0.35mを測る。掘方は下部がオーバーハングし、埋土はおおむね上層がオリーブ黒色系の極細粒砂混粘土質シルト～シルト質粘土、中層が灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂（粘土ブロック含む）、下層がオリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト（ラミナ状）で、全体的に植物遺体を

含む。遺物は出土していない。

ＳＰ202

７調査区の東端のＶ－10－７Ｃ地区、ＳＫ203の東側で検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈し、法量は直径0.14×0.09m・深さ0.04mを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色粘土で、植物遺体を少量含むものである。遺物は最下部から布留式甕の細片１点が出土したのみである。

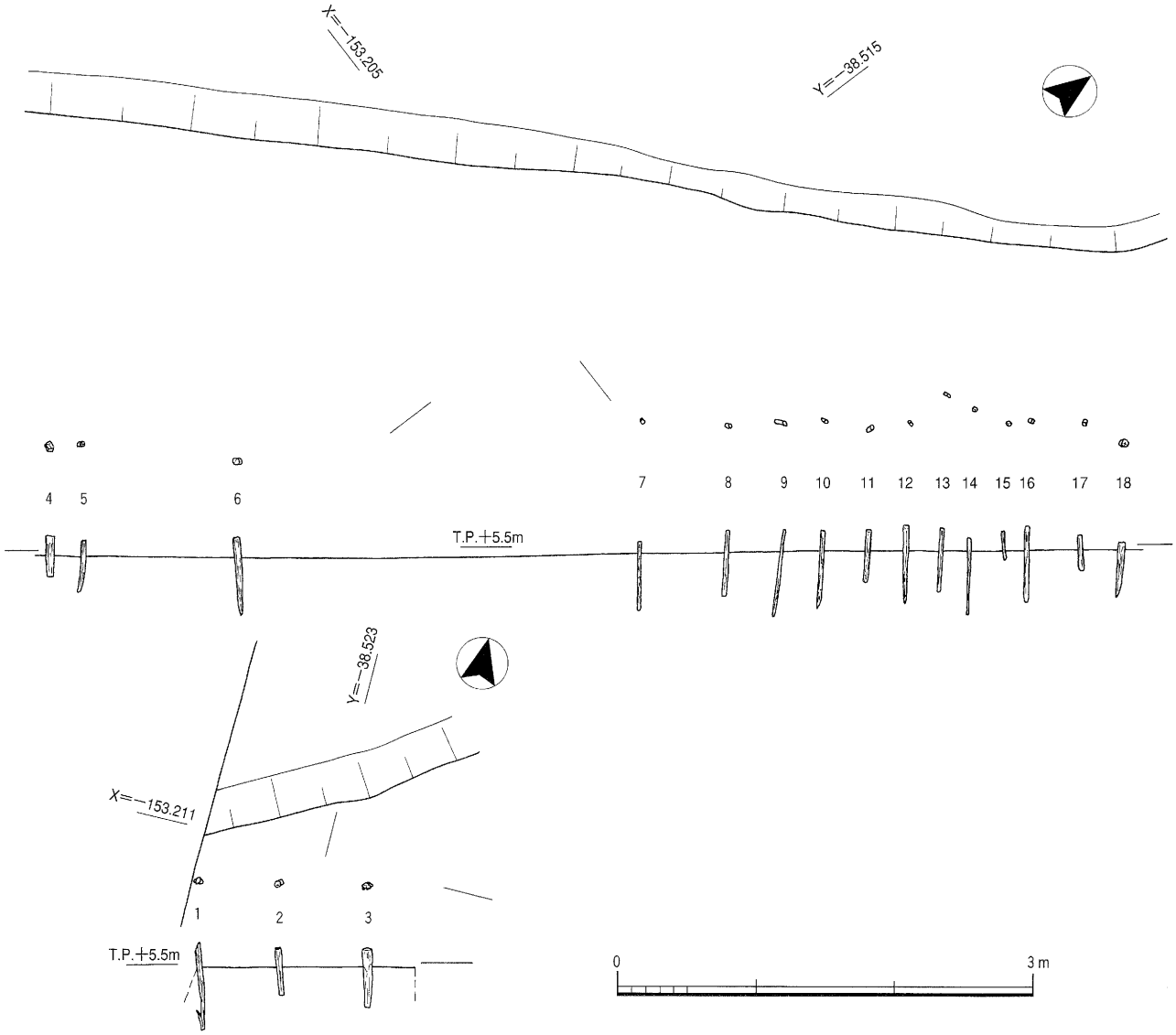
ＳＰ203

７調査区、ＳＰ202の北東約0.5mで検出した。平面偏円形を呈し、直径約0.14m・深さ0.07mを測る。埋土はＳＰ202と同じである。遺物は出土していない。

杭列（ＳＡ）

ＳＡ201

２調査区北西部のＶ－15－１Ｉ、２Ｈ地区で検出した。ＮＲ201の南岸に沿う杭列で、南岸から0.3～2.2mの間隔を保って杭が一列に打設されており、総延長約15.3mを測る。杭は0.15～



第17図　ＳＡ201平断面図

1.1mの間隔を開け、ほぼ垂直方向に0.05～0.45m程度打ち込まれている。杭は計18本（杭１～18）を平面で検出したが、調査区西壁内にも連続する杭１本を確認している。杭列はその配置により西から杭１～３、杭４～６、杭７～18の３組に区分され、組間の距離は約7.0m・3.0mを測る。杭に使用された木材については、杭３がみかん割りしたものを使用している以外は、径５cm前後・長さ20～65cm程度の丸木が大半である。そのうち、杭先を加工して尖らせたものは、杭９・10・18の３点のみである。時期的にはＮＲ201の存続時期である古墳時代前期後半（布留式新相）が推定される。

自然河川（ＮＲ）

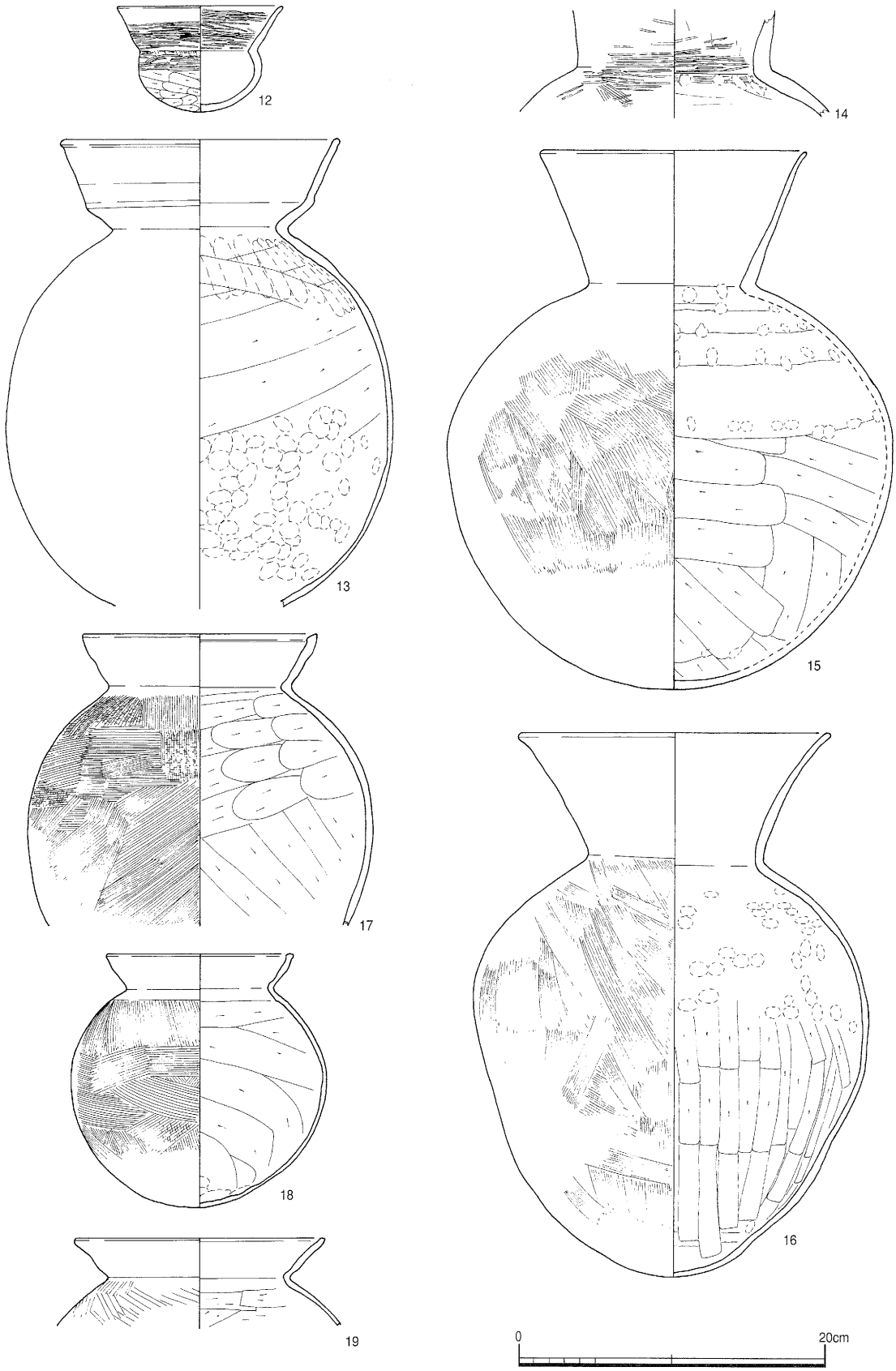
ＮＲ201

第Ⅶ層を切り込む自然河川で、１調査区のほぼ全域と２調査区の西部、３調査区の東部で検出した。１調査区南部、２調査区北西部・南西部で東肩、３調査区中央で西肩を確認しており、概ね南北方向の蛇行する流路で、各調査区の成果を総合すれば規模は検出長115m・幅45m・深さ0.2～1.0mを測る。３調査区においては北部および北東部で畦畔状の中州が認められた他、１調査区では調査区中央付近で人と偶蹄類の足跡が多くみられた。埋土はおおまかにみて上層が３調査区で見られたシルト系で、ほぼ水平なラミナが形成されている。中層は層厚約0.6mを測る極細粒砂～極粗粒砂で、３調査区南壁では粘質シルトの薄層を伴ったラミナの変化が顕著に認められることから、頻繁に急激な流れが生じていたものと考えられる。またこの砂層は３調査区東部中州部分西側～１調査区北部が最も厚く、両地点を結ぶ南西－北東方向に一時期の流心が求められる。下層は層厚0.2～0.3mを測る粘土～粘土質シルトであり、長期にわたって滞水状況にあったものと捉えられる。各層には植物遺体が多く含まれており、下層には部分的にひしの実が多く見られ、３調査区北東角では集中する部分が認められた。

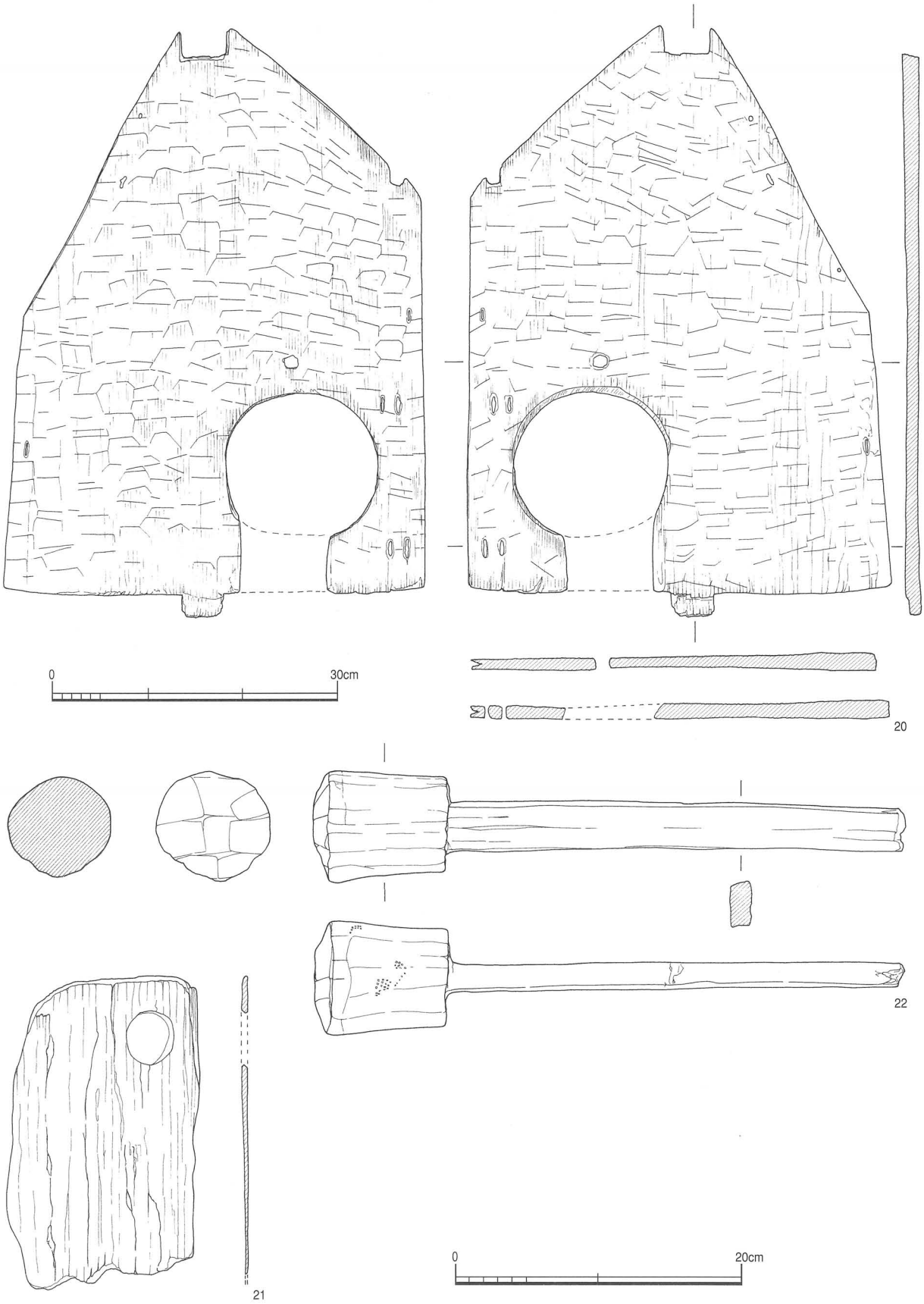
写真６　１調査区ＮＲ201内足跡群

ＮＲ201は全体を１条の河川として捉えているが、各地点で堆積状況等に違いがあることから複数の河道が存在したものと考えられる。１調査区、及び２調査区南西部検出部分は極細粒砂～中粒砂で充填されており、ラミナは一部で見られる程度で比較的短期間に埋没した状況である。２調査区北西部検出部分は、上層が粘土～細粒砂の互層、下層が緑灰色粘土である。上層は北壁に及んでおらず、肩に沿った幅3.5～4.0m程度・深さ0.2～0.4mの溝状を呈し、東部では層厚を減じて消滅している。ＮＲ201の最終的な河道部分と捉えられよう。３調査区では

写真７　３調査区ＮＲ201南壁



第18図　ＮＲ201出土遺物実測図①



第19図　ＮＲ201出土遺物実測図②

写真８　２調査区ＮＲ201西壁

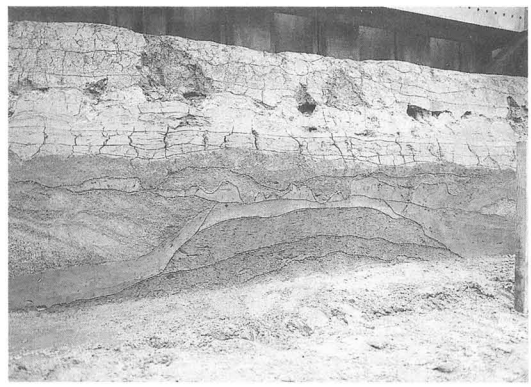


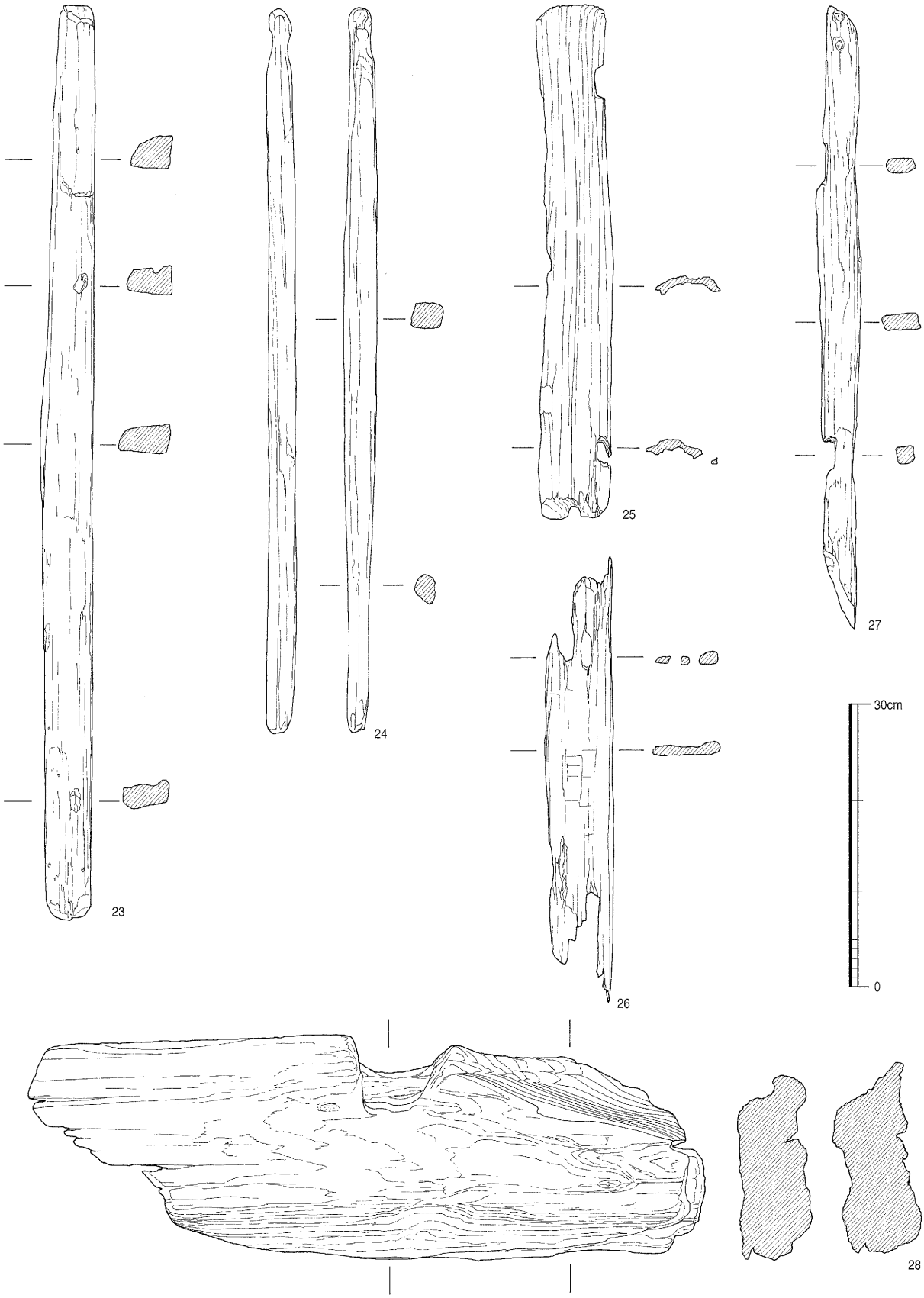
写真９　３調査区ＮＲ201中州部分北壁

北西部で見られた中州部分を境に層相が異なる。西側が極細粒砂～極粗粒砂で充填され、東側は粘土～粗粒砂の互層状で、東側が西側の砂層を切る状況である。東壁ではＳＫ201に削平されており明確ではないが、X=-153.224付近に相当する肩が位置すると考えられ、中州部分と結んだラインを南肩とする東西方向の河道が存在したことが看取される。なお南側に近接する第36次調査（ＫＨ2000－36）では、１・２調査区（36－１・２）全体を含む河川ＮＲ301を検出している。第25次３調査区南側に位置する36－１においては、Y=-38.550付近に西肩を成す河道の存在を確認しているが、第25次３調査区ではこの肩の続きは確認できなかった。

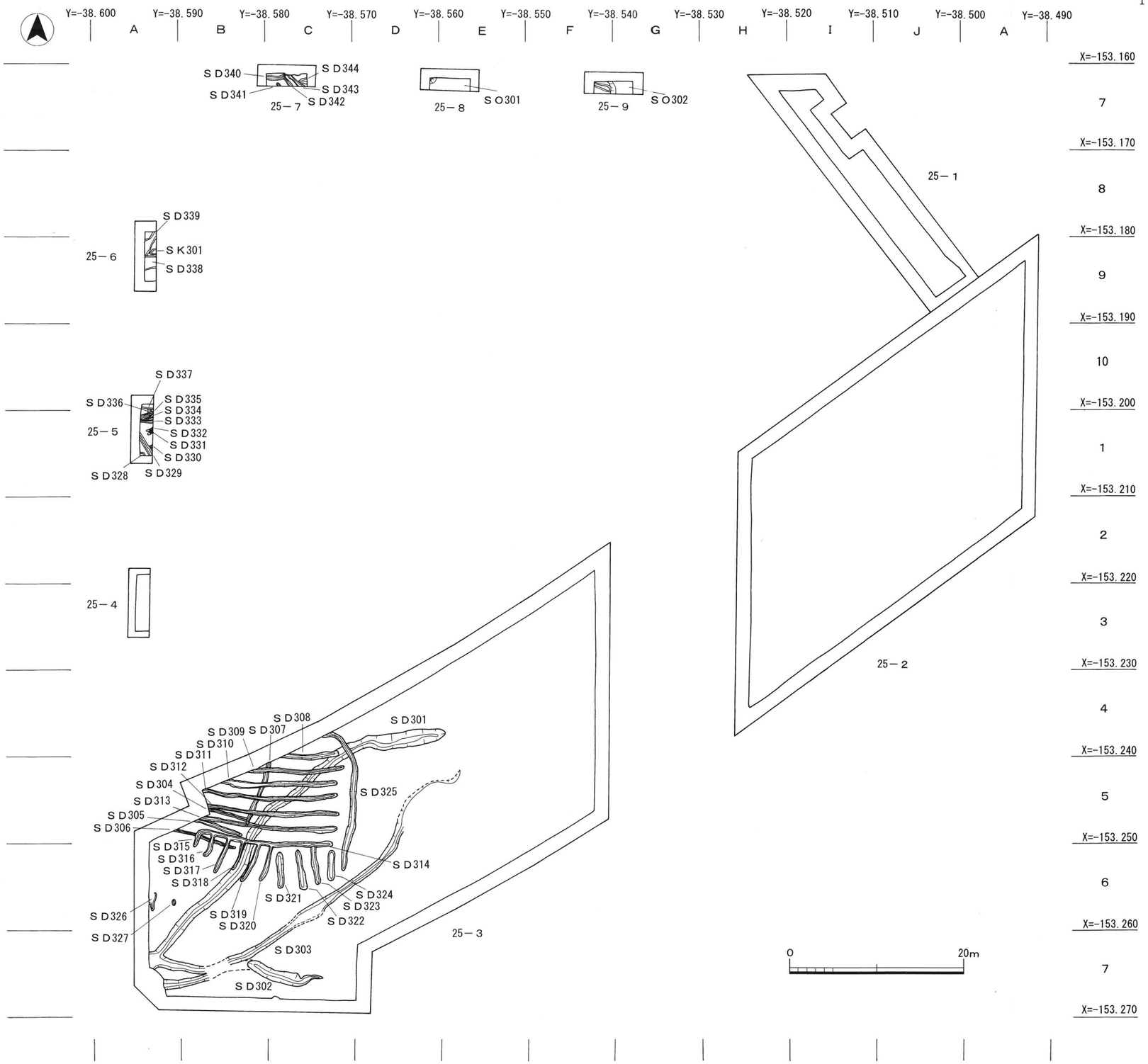
遺物は１～３調査区から古墳時代前期後半（布留式新相）までに比定される土器が出土した他、木製品では平鍬・紡織具？・用途不明品・板材・自然木が３調査区から出土している。土師器（12～19）、木製品（20～28）を図化した。12は小形丸底壷である。ほぼ完形で、口径10.7cm・器高7.0cm・体部最大径8.0cmを測る。口縁部内外面・体部外面上位をヘラミガキし、底体部外面はヘラケズリである。布留式古相に比定される。３調査区Ｖ－15－３・４Ｅ・Ｆ地区中層出土。13は複合口縁壷である。底体部の1/2を欠き、口径18.0cm・体部最大径25.2cmを測る。口縁部ヨコナデ、底体部外面は全面ナデで黒斑を有する。胎土中に砂粒を多く含み、色調は淡灰褐色を呈するもので、器形からみて山陰地方からの搬入品と考えられ、時期は布留式新相に比定される。３調査区Ｖ－15－６Ｅ地区上層出土。14は壷の頸部で、復元頸部径12.3cmを測る。複合口縁壷と思われる。色調は淡橙色を呈する。１調査区Ｖ－10－７Ｉ地区中層出土。15は直線的に伸びる口縁から端部がやや外反する直口壷である。口径17.5cm・器高35.4cm・体部最大径29.2cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケである。色調は淡黄灰色で、体部外面に直径約13cmの黒斑を有し、底部は煤ける。３調査区Ｖ－15－７Ｃ地区下層出土。16は外反気味の口縁部を成す広口壷で、口径20.4cm・器高35.8cm・体部最大径25.8cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部は外面ハケで、内面は下から上のヘラケズリである。底体部外面に黒斑を有し、その反対側には火襷が見られる。３調査区Ｖ－15－４Ｅ地区下層出土。15・16は庄内式新相～布留式古相に比定される。17～19は甕である。17は布留式甕で、復元口径15.2cm・体部最大径22.5cmを測る。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリで、外面全面が煤けている。布留式新相に比定される。２調査区Ｖ－15－１Ｈ地区中層出土。18はほぼ球形の体部を呈する布留式甕で、口径12.2cm・器高16.8cm・体部最大径16.8cmを測る。体部外面のハケは肩部が斜方向で一定し、以下は不定方向である。外面全面が煤けている。３調査区Ｖ－15－５Ｄ地区下層出土。布留式古相に比定される。19はいわゆる大和型庄内甕である。復元口径16.4cmを測り、外面は粗い左上がり平行タタキ、内面はヘラケズリで、頸部屈曲部内面は丸

い。胎土は生駒西麓産である。庄内式新相に比定される。２調査区Ｖ－15－４Ｈ地区中層出土。下層出土の15・16・18は、土圧により潰れた状況で出土したもので、いずれもほぼ完形に復元される。20は１調査区南東角のⅥ－６－９Ａ地区、ＮＲ201の南肩ライン近くで出土した。ほぼ水平な状態で出土しており、北側には１箇所木杭（長さ10cm・径４cm）が打たれていた。このことからＮＲ201が機能していた時期に何らかの理由で足元を安定させるために設置されたと推定される。法量は長辺61.3cm・短辺44.6cm・厚さ1.0～1.8cmを測る。山状の頂点に縦2.5cm・幅4.5cmの抉りを施し、対称となる底辺中央の位置にほぼ同寸法の枘を有する。右斜辺下部にも小さい抉りを施している。さらに左側縁部に１箇所、右側縁部に５箇所の枘穴（幅約0.5cm・長さ1.0～1.7cm）、右下に一部欠損しているが直径約16.0cmの円孔、その上に直径約1.3cmの円孔が穿たれている。右側縁の枘穴のうち２組（４箇所）は規則的に配列される。また、右側縁端面には深さ約1.0cmの溝が彫られており、別の板材を嵌め込むための加工と推定される。保存状態は良好で、表面には手斧痕が明瞭に観察できる。右側端の枘穴と右側縁端面の溝という特徴は、三重県六大Ａ遺跡から出土している建築部材のうち、壁材の板壁板と共通性が認められる。これは隣接材との緊縛用加工であり、本資料も同様の板壁板材である可能性が高い。転用時の加工によるものかもしれないが、形状は寺院建築などでみられる破風板に酷似している。樹種はスギ。21～28は３調査区の出土である。21は平鍬である。約2/3が残存しており、残存長27.0cm、幅は約25cmに復元できる。柄の挿入孔は直径約4.0cmの円形を呈する。Ｖ－15－４Ｆ地区下層出土。樹種はコナラ属（根株材）。22は用途不明品である。丸太材から削り出されたもので、円柱状の頭部と断面長方形の柄部から成り、残存長41.5cmを測る。頭部は長さ9.5cm、直径は6.6～7.9cmを測り先端に向かって太くなる。先端面は面取りされ中央が高くなる形状で、これは竪杵に類似しているといえよう。柄部は端部が欠損しており、残存長32.0cm・断面3.0×1.5cmを測る。Ｖ－15　－５Ｅ地区下層出土。類例としては当地の北西約250ｍで調査された大阪市亀井北遺跡で出土している。これは古墳時代前期の土坑から出土したもので、頭部が小振りで柄部断面が正方形を呈するものである。樹種はヒノキ。23は用途不明品である。断面長方形の角棒状を呈し、中央がやや太い。法量は長さ95.8cm・幅4.0～5.3cm・厚さ2.3～3.5cmを測る。Ｖ－15－７Ｃ地区下層で、土師器直口壷（15）に近接して出土した。24も棒状を成し、一方の端部付近を削って頭部を作り出している。長さ75.5cmを測り、断面は中央部が2.8×3.2cmの方形を呈するが、端部では角が取れ円形気味になる。織機の部材であろうか。Ｖ－15－４Ｄ地区中層出土。25～27は厚さ1.0～1.8cmを測る板材で、いずれも長さ３cm程枘の　穴を有する。全体を知れるものは無く用途不明である。25はＶ－15－５Ｄ地区、26はＶ－15－６Ｃ地区、27はＶ－15－７Ｃ地区で、いずれも中層の砂層から出土した。28は長さ71.0cm・幅23.5cm・厚さ最大8.2cmを測る用途不明の板材である。長辺側に幅約7.0cmの抉りを施しており、規模から見て建築部材と考えられる。Ｖ－15－４Ｅ地区下層出土。

写真10　木製品（20）実測風景



第20図　ＮＲ201出土遺物③



第21図　第３面遺構平面図

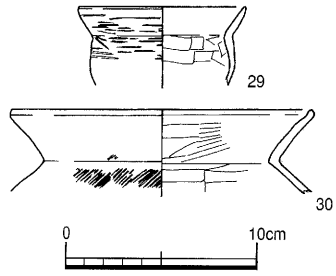
第３面

第３面は３・５～９調査区の第Ⅷ層上面(T.P.＋5.8～5.4m)で土坑１基（ＳＫ301）、溝44条（ＳＤ301～344）、畑状遺構１箇所（畑状遺構301）、落ち込み２箇所（ＳＯ301・302）を検出した。このうちＳＤ304～325は、畑状遺構301を構成する小溝群である。３調査区東半部以東は、第２面ＮＲ201により削平されている。３調査区西部の状況を見ると、大規模な溝ＳＤ301が埋没した後に畑状遺構301が形成されている。そしてこの小溝部分上位には第３面を覆う第Ⅶ層が落ち込んで堆積している。第３面の時期は古墳時代初頭後半～前期前半（庄内式新相～布留式古相）に比定される。

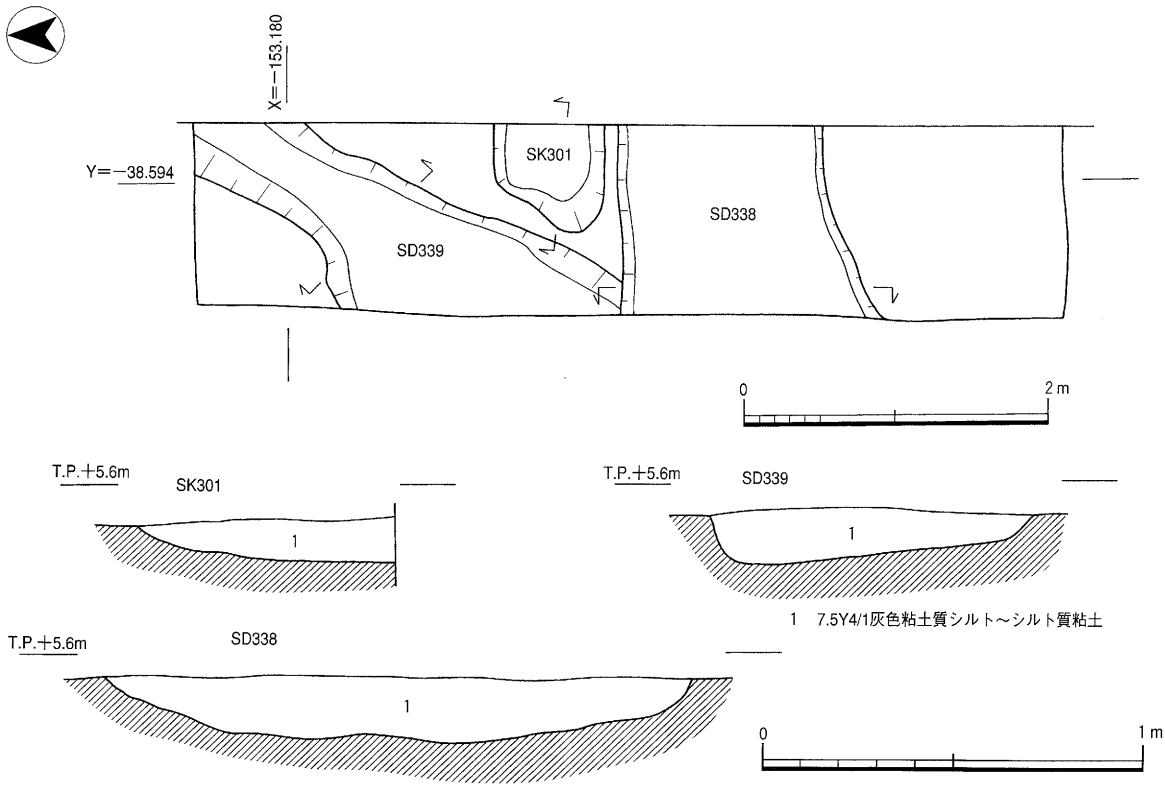
土坑（ＳＫ）

ＳＫ301

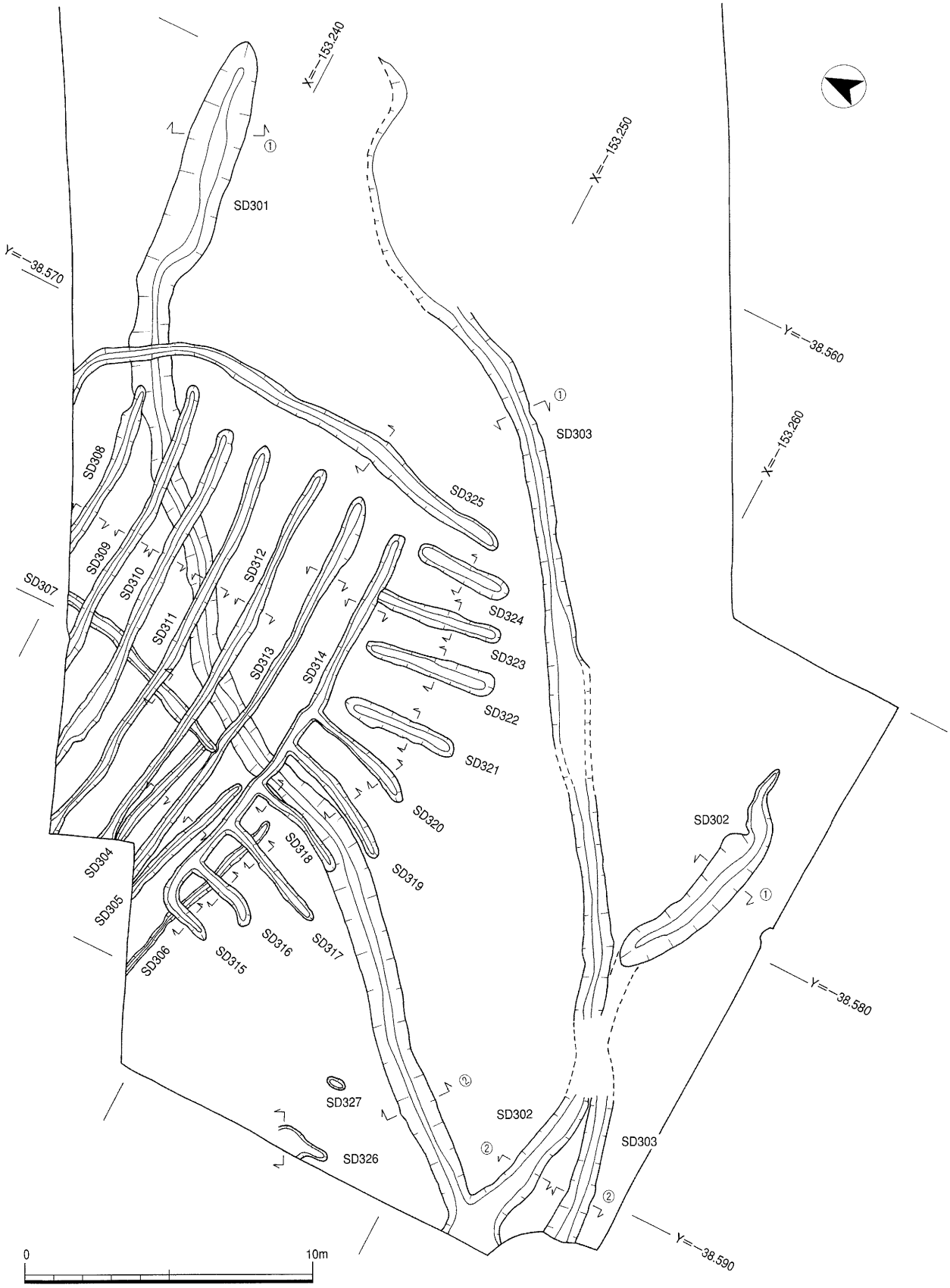
６調査区中央東端のＶ－10－９Ａ地区で検出した。平面形状は不整形で、東側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅0.73m・東西幅0.7m・深さ0.1mを測る。断面皿状を呈し、埋土は7.5Y4/1灰色粘土質シルト～シルト質粘土の単一層である。遺物は古墳時代初頭後半～前期前半（庄内式新相～布留式古相）に比定される土師器の小片が少量出土しており、小形丸底壷（29）・甕（30）を図化した。29は粗製の小形丸底壷である。復元口径8.8cm



第22図　ＳＫ301出土遺物実測図



第23図　６調査区第３面遺構平断面図



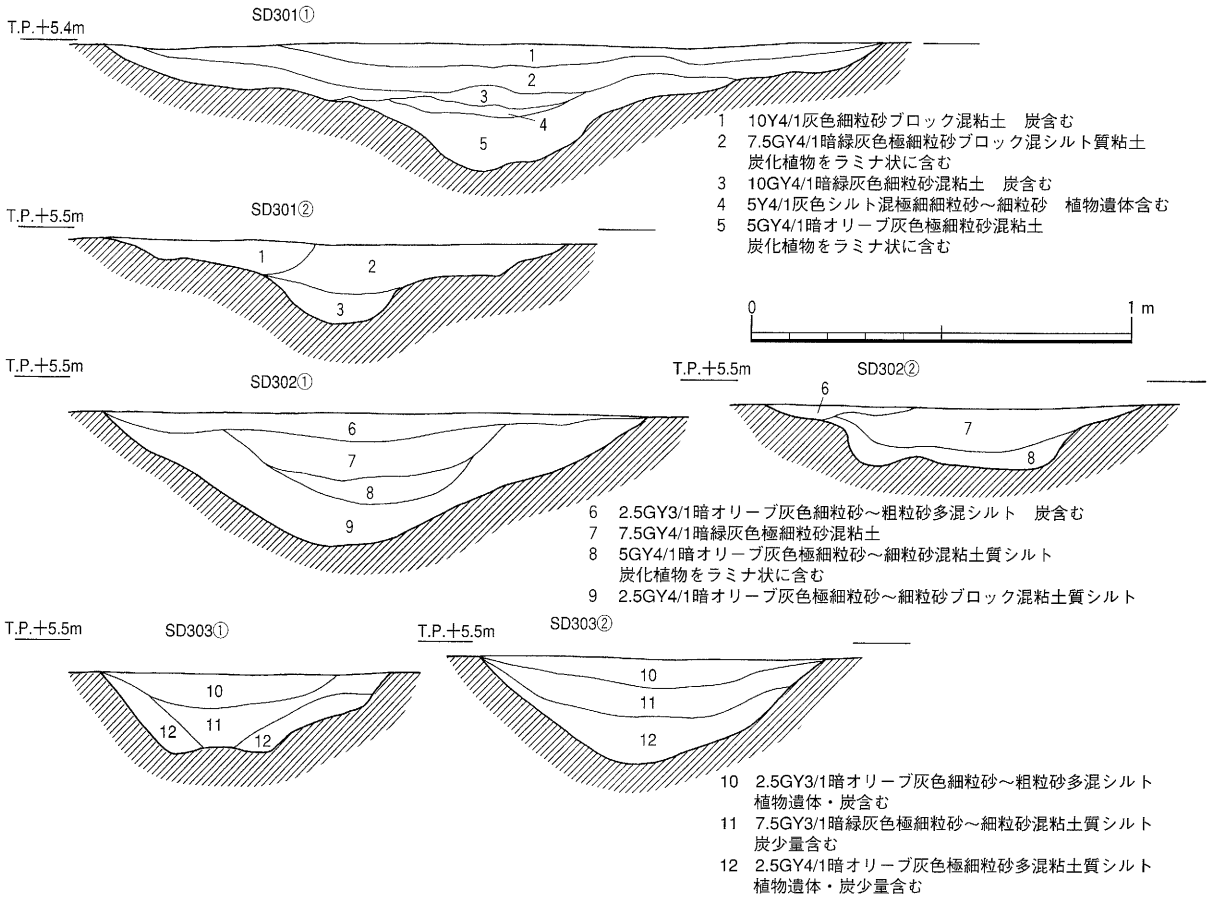
第24図　3調査区第3面遺構平面図

を測り、体部径よりやや大きい。口縁部～体部の外面に粗くヘラミガキを施す。底体部外面が煤ける。30は庄内式甕で、復元口径16.0cmを測る。外面の平行タタキは８本/cm と細かい。生駒西麓産の胎土である。

溝（ＳＤ）

ＳＤ301

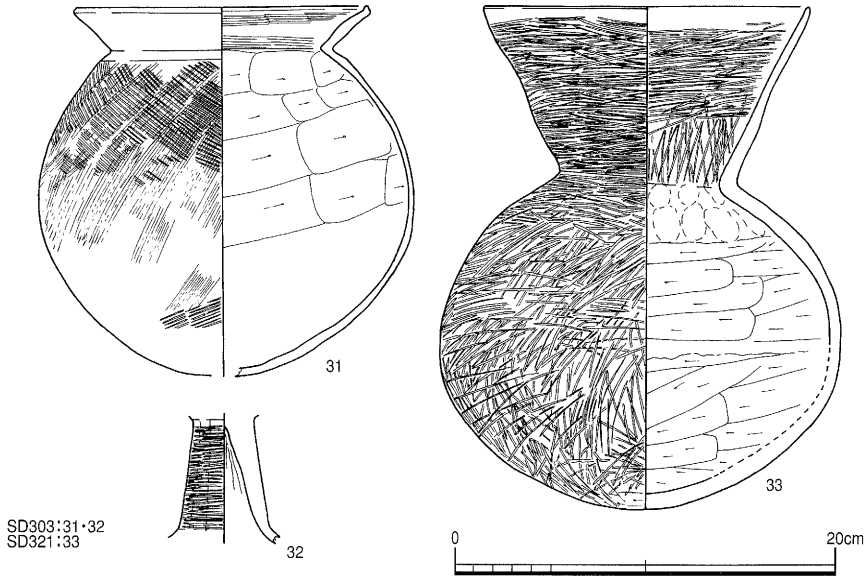
３調査区で検出した北東－南西方向に蛇行して伸びる溝である。調査区西端のＶ－15－７Ａ地区でＳＤ302と合流しており、切り合い関係は無い。規模は検出長約43.5m・幅0.7～1.8m・深さ0.23～0.35mを測る。断面形状は二段掘り状を呈し、底のレベルは東部が低い。埋土は下部では一部流水状況を示す砂層も見られるが、ラミナを形成する砂混じり粘土を基調とするもので、常時顕著な流水状況にあった堆積ではない。上層部はブロック状を呈しており、最終的には埋められたと考えられる。遺物は出土していない。



第25図　３調査区ＳＤ301～303断面図

ＳＤ302

３調査区で検出した東西方向の溝で、ＳＤ301西端から伸びている。規模は検出長約19.0m・幅0.62～1.55m・深さ0.18～0.36mを測る。断面形状はおおむね逆台形を呈し、底のレベルは東部が低い。埋土は砂混じり粘土～シルトを基調とするもので、顕著な流水状況は認められない。なお断面観察から溝の掘り直しが推察される。遺物は出土していない。



第26図　３調査区第３面溝出土遺物実測図

ＳＤ303

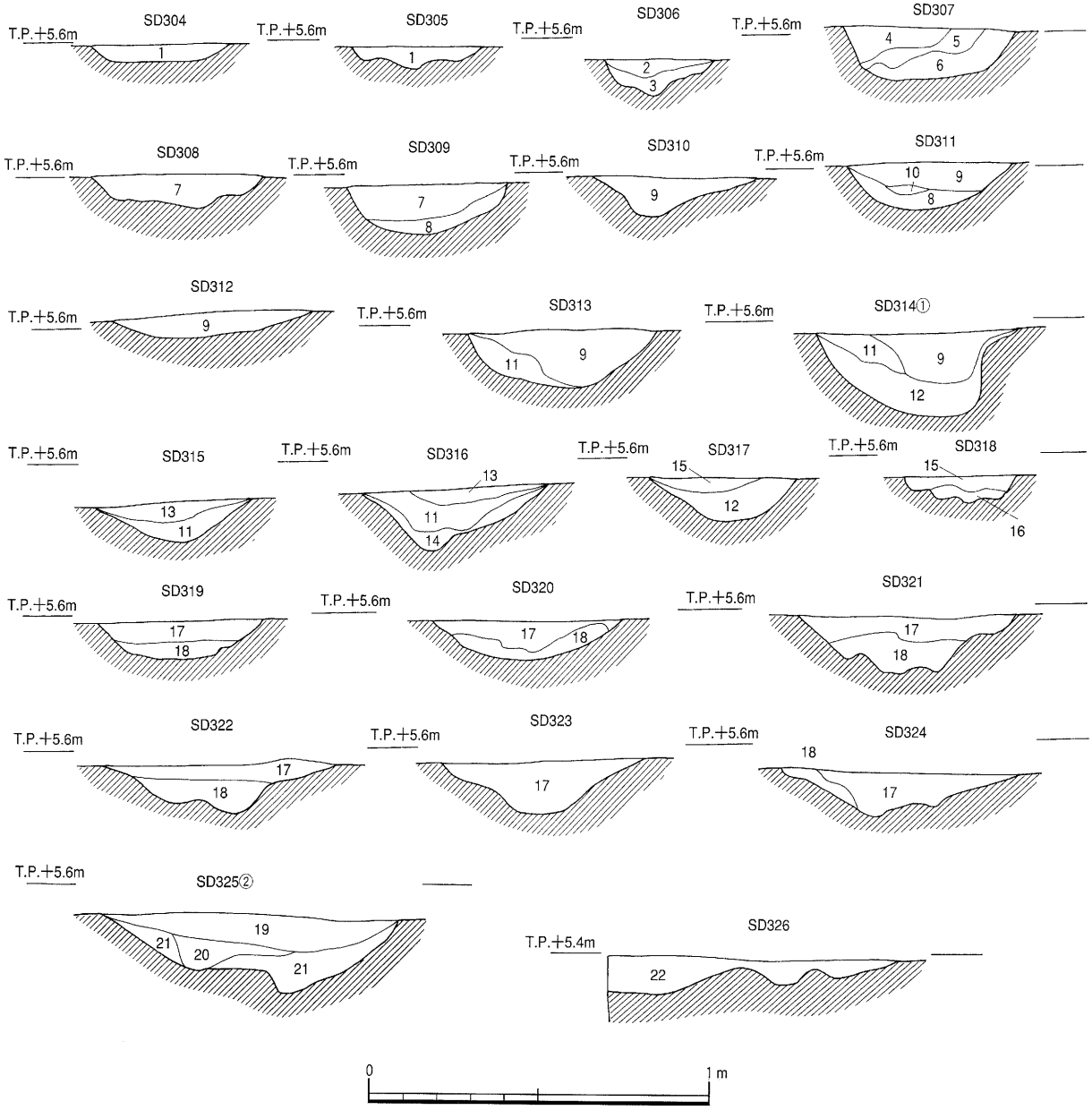
３調査区で検出した北東－南西方向の溝である。Ｖ－15－７Ｂ地区でＳＤ302と合流しているようであるが、撹乱部分に当たり切り合い等は明確にできなかった。規模は検出長約32.7m・幅0.65～1.3m・深さ0.21～0.32mを測る。断面形状はおおむね逆台形を呈し、底のレベルはほぼ一定している。埋土は砂混じり粘土質シルト～シルトの３層から成り、全体に炭を含んでいる。遺物は上層から庄内式新相～布留式古相に比定される土器が少量出土している。図化した甕(31)、高杯(32)以外では甕の小片２点のみである。31はほぼ完形に復元される庄内甕である。法量は口径15.3cm・器高19.7cm・体部最大径19.7cmを測る。口縁部外面～体部が煤けている。底体部は球形に近く、頸部内面屈曲部は尖らずやや丸味をもつもので、布留式傾向と言えよう。32は脚柱部のみ残存するもので詳細は不明である。２点共にＶ－15－６Ｃ地区出土。

ＳＤ304～307

３調査区北西部のＶ－15－５・６Ａ～Ｃ地区で検出した。北西－南東方向のＳＤ304～306と、これに直交する方向のＳＤ307があり、ＳＤ307はＳＤ304を切る。ＳＤ304～306は約1.3m間隔で平行している。規模は幅0.27～0.61m・深さ0.05～0.16mを測り、断面ほぼ逆台形を呈する。埋土は灰色系のシルト質粘土を基調とするもので、ＳＤ307下層には撹拌されたベース層のブロックが顕著である。ＳＤ306がＳＤ315～317に、またＳＤ307がＳＤ309～313に切られていることから、溝群ＳＤ308～325に先行する溝群であると考えられる。遺物は出土していない。

ＳＤ308～314

３調査区北部のＶ－15－４～６Ｂ・Ｃ地区で検出した。東西方向の溝群で、0.7～1.3m間隔で平行している。規模は幅0.30～0.85m・深さ0.08～0.26mを測る。断面ほぼ逆台形を呈し、埋土は灰色～オリーブ黒色の粘土質シルトを基調とするもので、ＳＤ314下層が粘土ブロック混じりの砂層である。遺物は出土していない。



1　7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土
2　5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混シルト質粘土　鉄分少量含む
3　5Y4/1灰色シルト～極細粒砂混粘土質シルト
4　7.5Y4/1灰色細粒砂少混粘土質シルト
5　10Y4/1灰色極細粒砂混シルト質粘土
6　5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土ブロック混細粒砂～中粒砂
7　7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　鉄分含む
8　5Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルト
9　7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
10　7.5Y5/1灰色シルト～極細粒砂
11　10Y4/1灰色極細粒砂混シルト質粘土
12　7.5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土ブロック混細粒砂～中粒砂
13　7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土　鉄分含む
14　5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト
15　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂～細礫混粘土質シルト
16　10Y4/1灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
17　5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト　植物遺体・鉄分少量含む
18　7.5Y4/1灰色シルト～極細粒砂混粘土質シルト
19　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂ブロック混シルト質粘土　植物遺体少量含む
20　7.5Y4/1灰色極細粒砂混シルト質粘土
21　10Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
22　10Y4/1灰色シルト質粘土ブロック状　植物遺体少量含む

第27図　３調査区ＳＤ304～326断面図

ＳＤ315～324

３調査区西部のＶ－15－５・６Ｂ・Ｃ地区、溝群ＳＤ308～314の南側で検出した。南北方向の溝群で、ＳＤ315～320・323はＳＤ314からほぼ直角方向に南に派生している。ＳＤ315～320は0.9～1.3m間隔、ＳＤ321～324 は0.9～1.6m間隔で平行しており、やや方向が異なる。規模は幅0.29～0.81m、深さ0.09～0.20mを測る。断面ほぼ逆台形を呈し、埋土はオリーブ黒色～灰色系の粘土質シルトを基調とする。出土遺物は１点のみで、ＳＤ321から完形に近い直口壷(33)が出土している。33は溝に沿って口縁を北に向けた横位で底部から出土した。ヘラミガキを多用する精製品である。ほぼ完形で、口径17.2cm・器高26.7cm・体部最大径21.2cmを測る。体部外面に一箇所の黒斑を有する。庄内式新相～布留式古相に比定される。

ＳＤ325

３調査区中央部のＶ－15－４～６Ｃ・Ｄ地区で検出した。南北方向の溝で、北部では弧を描いて西に方向を変えている。西側の溝群ＳＤ308～ＳＤ314を取り囲むような状況が想定でき、**畑状遺構**301を区画する性格が考えられる。規模は幅0.41～0.88m・深さ0.19～0.24mを測る。断面ほぼ逆台形を呈し、埋土はオリーブ黒色～灰色の粘土質シルト～シルト質粘土の３層から成り、上層には細粒砂～中粒砂ブロックが含まれる。遺物は出土していない。

ＳＤ326・327

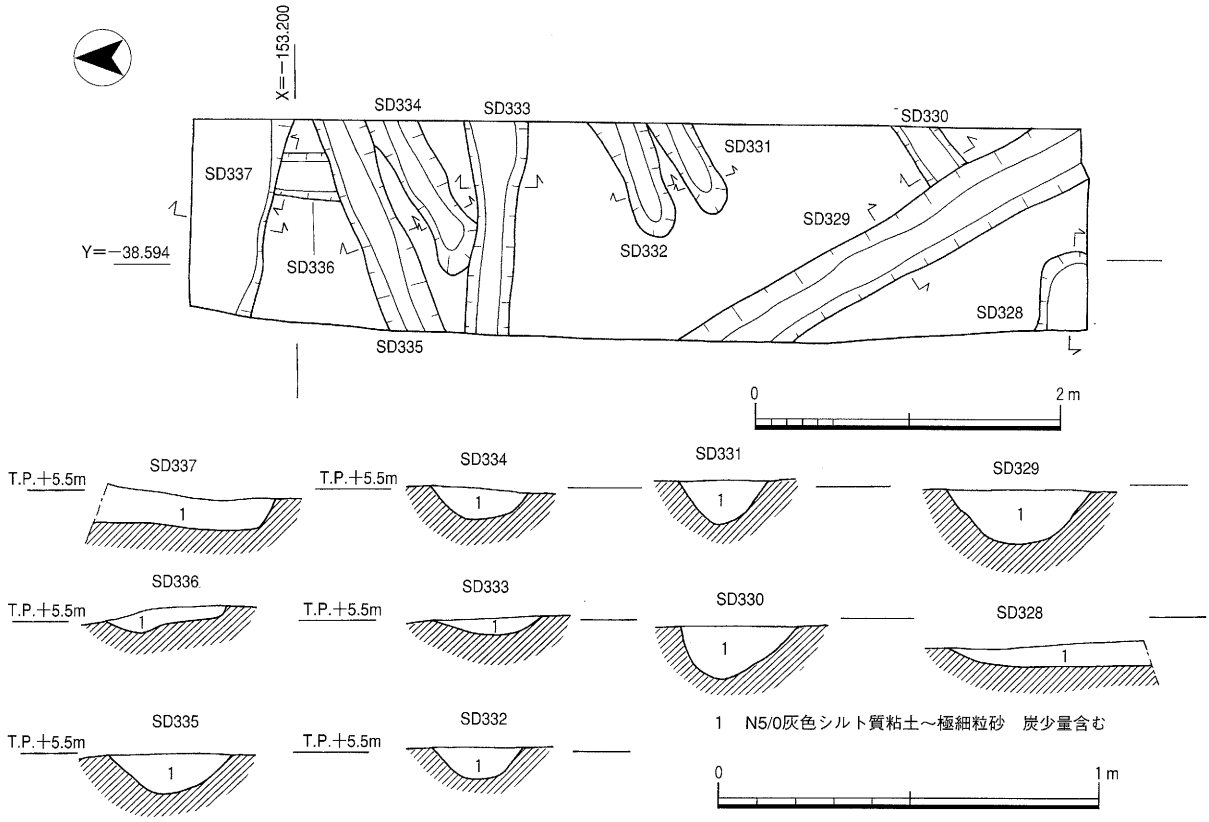
３調査区西部のＶ－15－６Ａ地区で検出した。性格については不明であるが、**畑状遺構**301を構成する溝群と一連の溝と思われる。埋土は灰色シルト質粘土で、ＳＤ326はブロック状を呈する。遺物は出土していない。

ＳＤ328～337

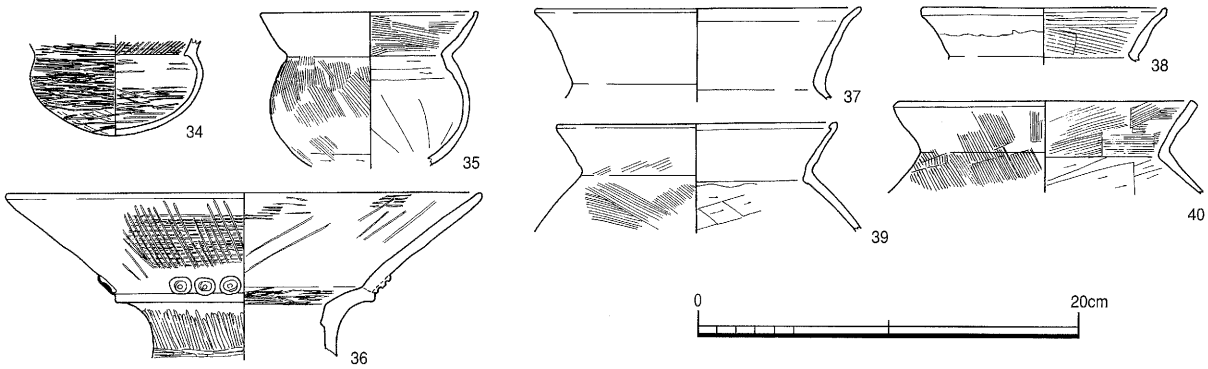
５調査区全域のＶ－10－10Ａ地区、Ｖ－15－１Ａ地区で検出した。規模は検出長0.4～2.7m・幅0.22～0.65m・深さ0.04～0.14mを測る。構築方向で分けると、東－西方向３条(ＳＤ328・333・337)、南北方向１条(ＳＤ336)、北東－南東方向５条(ＳＤ330・331・332・334・335)、北西－南東方向１条(ＳＤ329)に区別される。断面形状は概ね「Ｕ」字状で、埋土は炭を少量含むN5/0灰色シルト質粘土の単一層である。溝間に切り合いは見られるものの埋土は同一であることから、ほぼ同時期に機能していたと考えられる。遺物はＳＤ335から庄内式甕の小片1点、ＳＤ337から器種不明の土師器小片１点が出土している。ＳＤ335から出土した庄内式甕からみて、構築時期は概ね古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。なお、南の３調査区では**畑状遺構**301が検出されているが、当溝群についても畑作に関連したものであった可能性が高い。

ＳＤ338

６調査区中央部分のＶ－10－９Ａ地区で検出した。東西方向に伸び、調査区外に至る。検出部分で検出長1.25m・幅1.35～1.7m・深さ0.16mを測る。埋土は7.5Y4/1灰色粘土質シルトの単一層である。断面形状は浅い椀形である。遺物は古墳時代初頭後半～前期前半(庄内式新相～布留式古相)に比定される土師器（壷・甕・鉢）と桃の種子１点が出土している。34～40を図化した。34・35は小形丸底壷である。34は体部最大径8.8cmを測る。ヘラミガキを多用する精製品で、底部外面に黒斑を有する。35は口径11.4cm・体部最大径10.5cmを測る。調整は口縁部外面ヨコナデ、体部外面・口縁部内面ハケ、底部外面ヘラケズリ。外面は肩部以外が煤ける。36は複合口縁壷で、復元口径25.0cmを測る。口縁部外面下端に３個一組の竹管円形浮文をおそらく５方向に付す。調



第28図　５調査区第３面遺構平断面図



第29図　ＳＤ338出土遺物実測図

整はヘラミガキを多用する。37は復元口径17.0cmを測る短頸の直口壷で、口縁端部がやや外反する。口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリである。38～40は甕である。38は復元口径13.0cmを測り、口縁端部は短く摘み上げる。生駒西麓産の胎土である。39は復元口径14.8cmを測り、口縁端部は小さく巻き込む。40は復元口径16.0cmを測り、口縁端部は丸みを帯びた方形に収める。口縁部外面に縦方向、内面に横方向のハケを施す。体部は外面ハケ、内面ヘラケズリである。

ＳＤ339

６調査区北半部分のＶ－10－８・９Ａ地区で検出した。北東－南西に伸びており、南端部分がＳＤ338により切られている。検出部分で検出長2.5m・幅0.6～0.95m・深さ0.14mを測る。埋

土は１層で7.5Y4/1灰色粘土質シルトの単一層である。断面形状は浅い椀形である。遺物は古墳時代初頭後半～前期前半(庄内式新相～布留式古相)に比定される土師器甕の小片が少量と、火を受けた石英(4.4×2.4cm)１点が出土している。

ＳＤ340

７調査区西部のＶ－10－７Ｃ地区で検出した。東西方向から東端でやや北に屈曲して伸びる溝で、ＳＤ342を切っている。検出部分で検出長2.4m・幅0.26～0.48m・深さ0.05mを測る。埋土は10G3/1暗緑灰色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ341

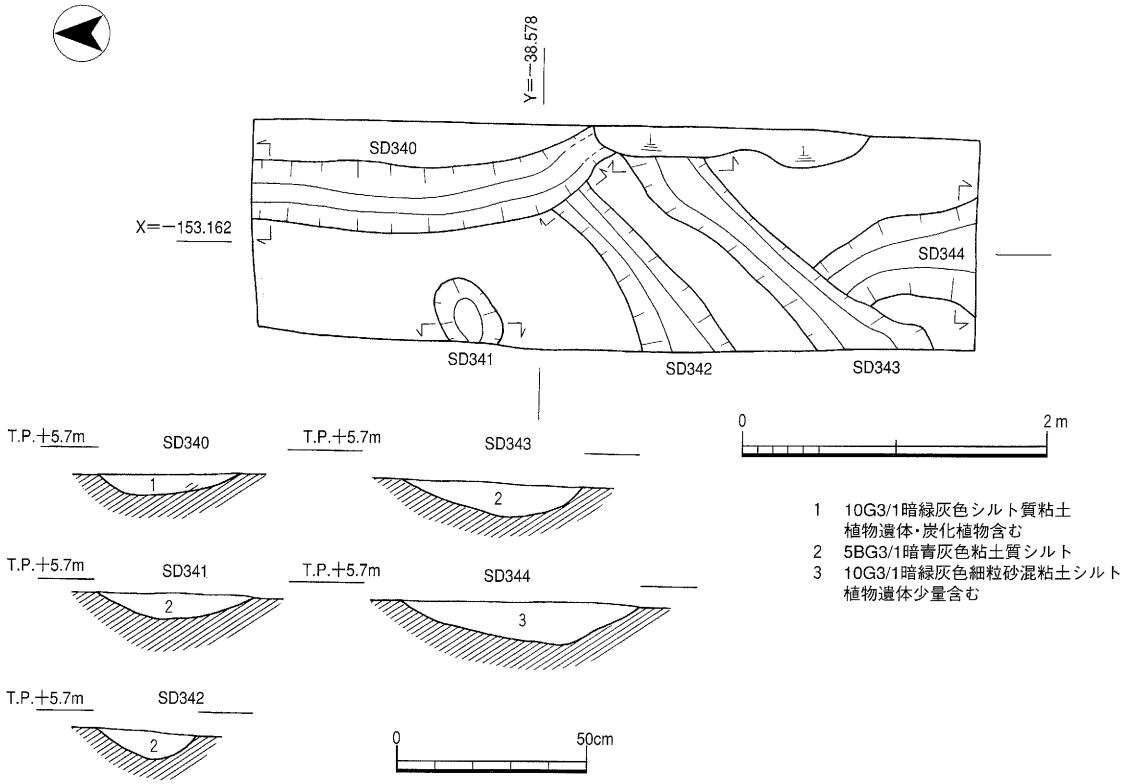
７調査区西部のＶ－10－７Ｃ地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出長0.53m・幅0.4m・深さ0.07mを測る。断面形状は浅い椀形を呈し、埋土は5BG3/1暗青灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ342

７調査区中央のＶ－10－７Ｃ地区で検出した。北西－南東方向に伸びる溝で、北端をＳＤ340に切られる。検出長1.45m・幅0.27～0.50m・深さ0.07mを測る。断面形状は浅い椀形を呈し、埋土はＳＤ341と同じである。遺物は出土していない。

ＳＤ343

７調査区東部のＶ－10－７Ｃ地区で検出した。ＳＤ342と平行して南東－北西に伸びる溝で、ＳＤ344を切っている。検出部分で検出長2.4m・幅0.30～0.42m・深さ0.10mを測る。断面形状は浅い椀形を呈し、埋土はＳＤ341と同じである。遺物は出土していない。



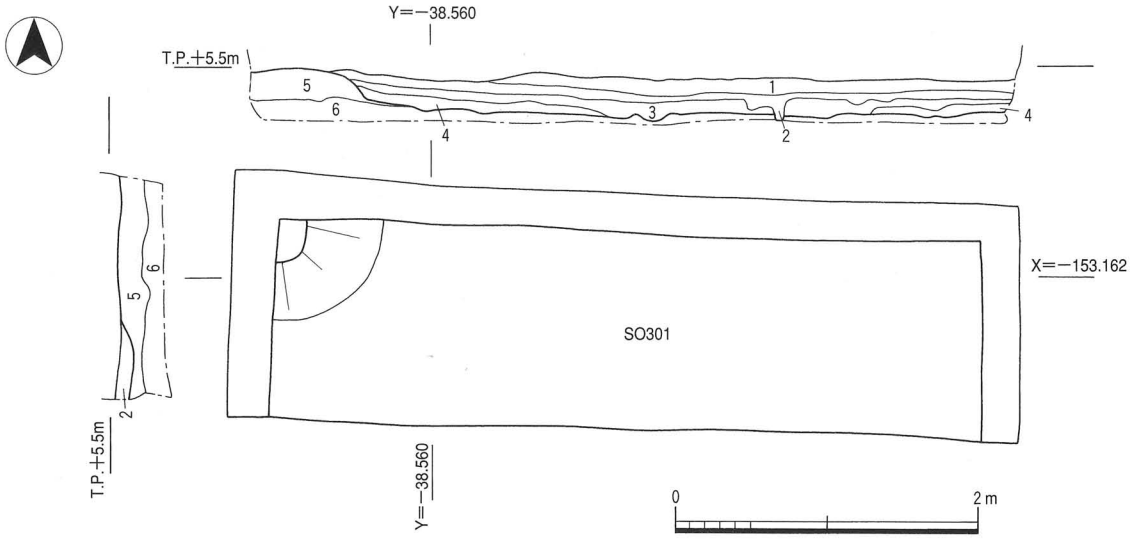
第30図　７調査区第３面遺構平断面図

ＳＤ344

７調査区東部のＶ－10－７Ｃ地区で検出した。東西方向に伸びるやや弧状を呈する溝である。検出長1.2m・幅0.45～0.8m・深さ0.11mを測る。断面形状は浅い椀形を呈し、埋土は10G3/1暗緑灰色細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は古墳時代初頭のＶ様式系甕と思われる破片が１点出土したのみである。

第６表　第３面溝（SD304～344）一覧表

遺構名	調査区	地　区	方向	検出長（m）	幅（m）	深さ（m）	出土遺物
ＳＤ304	3	Ｖ－15－５Ｂ	北西－南東	4.45	0.31～0.40	0.05	
ＳＤ305	3	〃	〃	5.47	0.30～0.44	0.07	
ＳＤ306	3	Ｖ－15－５・６ＡＢ	〃	7.44	0.27～0.35	0.12	
ＳＤ307	3	Ｖ－15－５Ｂ・Ｃ	北東－南西	7.66	0.29～0.61	0.16	
ＳＤ308	3	Ｖ－15－４・５Ｃ	東西	6.55	0.38～0.59	0.10	
ＳＤ309	3	Ｖ－15－５Ｂ・Ｃ	〃	11.55	0.42～0.51	0.15	
ＳＤ310	3	〃	〃	13.14	0.41～0.85	0.12	
ＳＤ311	3	〃	〃	15.36	0.33～0.58	0.14	
ＳＤ312	3	〃	〃	14.96	0.30～0.65	0.08	
ＳＤ313	3	〃	〃	15.46	0.31～0.72	0.17	
ＳＤ314	3	Ｖ－15－５Ｂ・Ｃ、６Ｃ	〃	14.80	0.39～0.56	0.10～0.26	
ＳＤ315	3	Ｖ－15－５・６Ｂ	北東－南西	1.90	0.40～0.51	0.13	
ＳＤ316	3	〃	〃	2.58	0.41～0.55	0.20	
ＳＤ317	3	〃	〃	4.15	0.29～0.46	0.13	
ＳＤ318	3	〃	〃	3.70	0.30～0.41	0.09	
ＳＤ319	3	Ｖ－15－６Ｂ	〃	4.71	0.45～0.48	0.12	
ＳＤ320	3	Ｖ－15－６Ｂ・Ｃ	〃	4.09	0.29～0.55	0.12	
ＳＤ321	3	Ｖ－15－６Ｃ	南北	4.11	0.60～0.76	0.17	土師器壷(33)
ＳＤ322	3	〃	〃	4.60	0.51～0.81	0.15	
ＳＤ323	3	〃	〃	4.41	0.54～0.72	0.16	
ＳＤ324	3	〃	〃	3.44	0.66～0.81	0.15	
ＳＤ325	3	Ｖ－15－４・５Ｃ・Ｄ、６Ｃ	〃	17.86	0.41～0.88	0.21	
ＳＤ326	3	Ｖ－15－６Ａ	〃	2.00	0.50以上	0.11	
ＳＤ327	3	〃	〃	0.60	0.30	0.06	
ＳＤ328	5	Ｖ－15－１Ａ	東西	0.5	0.32以上	0.06	
ＳＤ329	5	〃	北西－南東	2.7	0.4～0.45	0.14	
ＳＤ330	5	〃	北東－南西	0.4	0.28	0.14	
ＳＤ331	5	〃	〃	0.7	0.22	0.12	
ＳＤ332	5	〃	〃	0.8	0.24～0.3	0.08	
ＳＤ333	5	〃	東西	1.4	0.24～0.4	0.04	
ＳＤ334	5	〃	北東－南西	1.15	0.24	0.08	
ＳＤ335	5	〃	〃	1.5	0.3	0.11	庄内式甕
ＳＤ336	5	Ｖ－10－10Ａ、Ｖ－15－１Ａ	南北	1.25	0.3	0.06	
ＳＤ337	5	Ｖ－10－10Ａ	東西	1.3	0.65以上	0.08	土師器小片
ＳＤ338	6	Ｖ－10－９Ａ	〃	1.25	1.35～1.70	0.16	土師器(34～40)
ＳＤ339	6	Ｖ－10－８・９Ａ	北東－南西	2.50	0.60～0.95	0.14	土師器小片
ＳＤ340	7	Ｖ－10－７Ｃ	東西	2.40	0.26～0.48	0.05	
ＳＤ341	7	〃	北西－南東	0.53	0.4	0.07	
ＳＤ342	7	〃	〃	1.45	0.27～0.50	0.07	
ＳＤ343	7	〃	〃	2.40	0.30～0.42	0.10	
ＳＤ344	7	〃	東西	1.20	0.45～0.80	0.11	Ｖ様式系甕



1　7.5GY4/1暗緑灰色粘土　植物遺体極少量含む
2　10GY4/1暗緑灰色粘土　炭酸鉄・植物遺体多く含む
3　5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土～シルト
4　10Y4/1シルト混粘土　植物遺体・炭化植物多く含む
5　10Y5/1灰色粘土　植物遺体極少量含む
6　5G4/1暗緑灰色粘土　植物遺体極少量含む

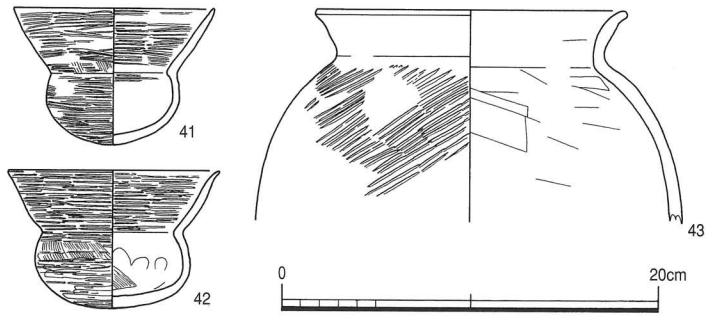
第31図　8調査区第3面平断面図

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ301

８調査区のほぼ全域で検出した。調査区の北西角の高まり（第31図第５層）から、東・南に落ち込むものである。検出部分の規模は東西4.45m・南北1.40m・深さ0.35mを測る。埋土は暗緑灰色～灰色系粘土～シルトの４層から成り、全体に植物遺体を多く含む層相である。遺物は出土していない。肩となる高まりから出土した小形丸底壷２点(41・42)、甕(43)を図化した。41・42はヘラミガキを多用する精製品で、それぞれ口縁部の約3/4・1/2が欠損する。口径・器高・体部最大径は、41－10.8cm・7.4cm・7.1cm、42－11.1cm・7.4cm・8.3cmを測る。42は底部外面に黒斑を有する。43はＶ様式系甕で、復元口径16.6cmを測る。外面粗い平行タタキで、残存部にはハケは認められない。

写真11　8調査区ＳＯ301肩北壁



第32図　8調査区第5層出土遺物実測図

高まりについては、自然地形であるのか、あるいは水田畦畔のような遺構になるのかは明確でない。ただ高まりから出土した小形丸底壷(41・42)について、口縁部の一部を欠損するという特徴を意図的な要素と捉えた場合、遺構である可能性が高いといえよう。

ＳＯ302

９調査区で検出した第Ⅷ層は、調査区西部において北西から南東に舌状(長さ1.9m・幅　0.4m)に張りだす状況である。これを肩として東に、また北・南にも落ち込んでおり、この部分をＳＯ302とした。深さは最大で、東に27cm、北に12cm、南に10cmを測る。埋土は上層が10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト、下層が5GY2/1オリーブ黒色シルト質粘土で、全体に植物遺体を含んでいる。なお全体を一連の落ち込みとしたが、南への落ち込み部分の埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルトブロック混じり極細粒砂であり、３調査区**畑状遺構301**を構成する溝群との類似性が認められた。このことから南側に関しては同様の溝である可能性がある。遺物は古墳時代初頭後半～前期前半(庄内式新相～布留式古相)に比定される土器が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

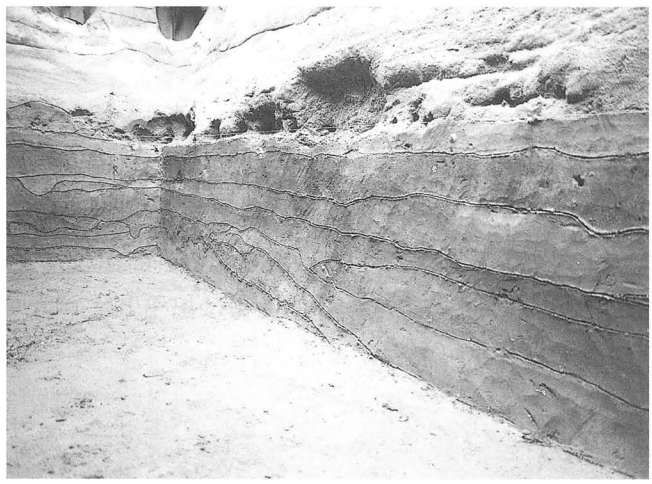
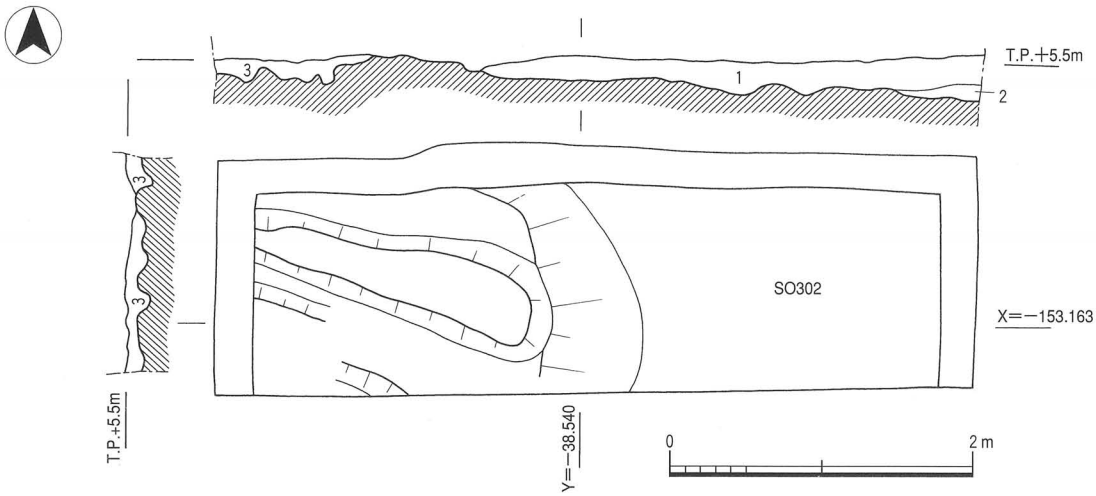


写真12　９調査区ＳＯ302肩西～北壁



1　10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト　植物遺体含む
2　5GY2/1オリーブ黒色シルト質粘土　植物遺体少量含む
3　5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルトブロック混極細粒砂　ブロック状

第33図　９調査区第３面平断面図

第４面

３調査区西半、及び７調査区の第Ⅸ層上面(T.P.＋5.6～5.3m)で、土坑１基(ＳＫ401)、溝４条(ＳＤ401～404)、落ち込み２基(ＳＯ401・402)を検出した。各遺構内から遺物は全く出土しておらず時期は明確ではないが、第８層出土遺物から勘案して弥生時代後期末～古墳時代初頭頃を考えている。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ401

３調査区のＶ－15－６Ｃ地区で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1.66m・短辺0.72m・深さ0.11mを測る。断面ほぼ逆台形で、埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土の単一層である。遺物は出土していない。ＳＤ401と同一の埋土であることから、一連の溝であった可能性がある。

溝（ＳＤ）

ＳＤ401

３調査区のＶ－15－５Ｄ、６Ｃ・Ｄ地区で検出した東西方向の溝である。規模は検出長6.25m・幅0.30～1.06m・深さ最大0.23mを測る。断面皿状を呈し、埋土はＳＫ401と同一である。遺物は出土していない。

ＳＤ402

３調査区のＶ－15－６Ｂ・Ｃ地区に位置する北東－南西方向の溝である。規模は検出長8.84m・幅0.37～1.34m・深さ最大0.20mを測り、南部で幅が増す部分がある他、北部で一部途切れる。断面皿状を呈し、埋土は上層が7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、下層が5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土で、上層に炭化植物を少量含む。遺物は出土していない。

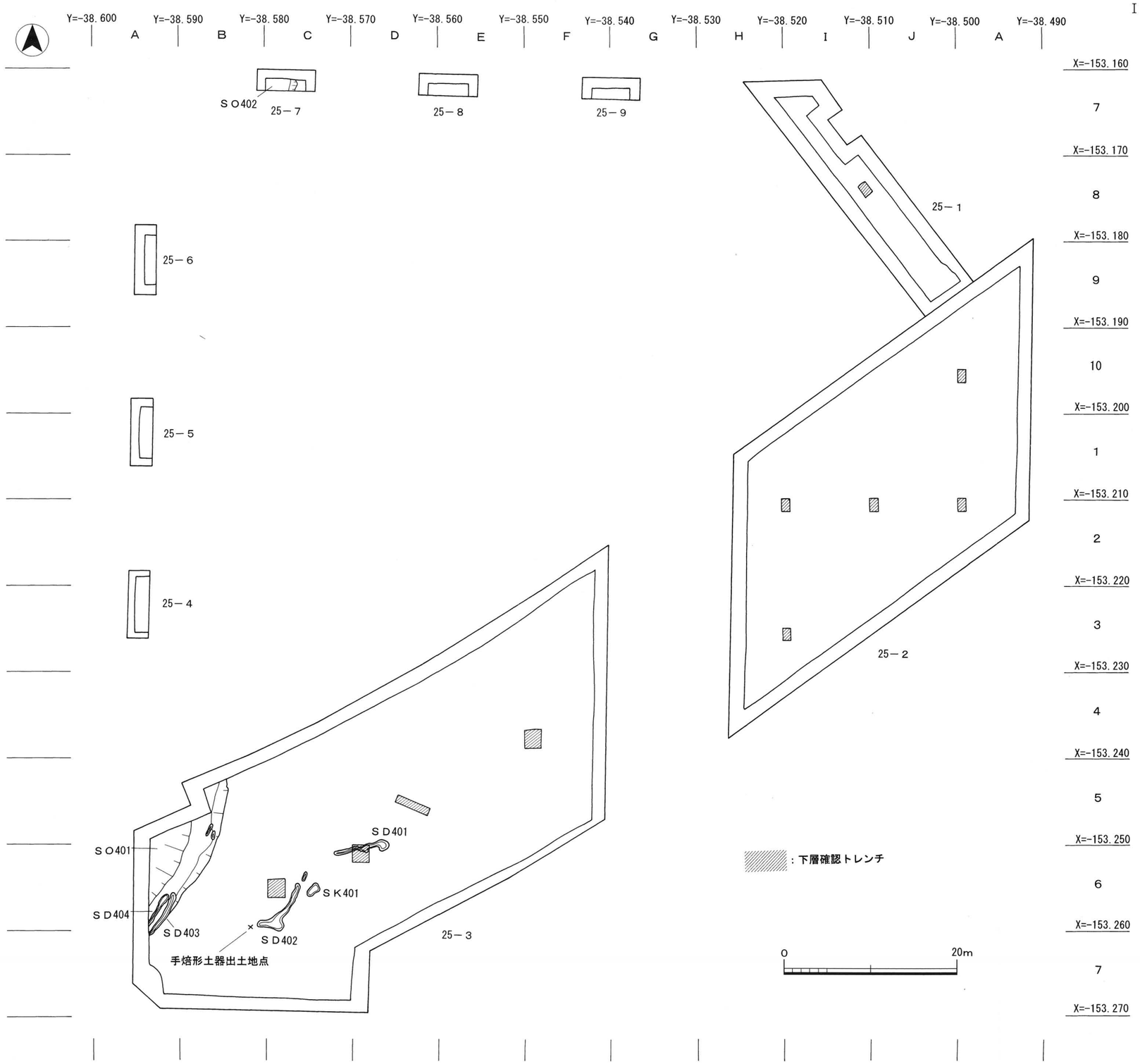
落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ401

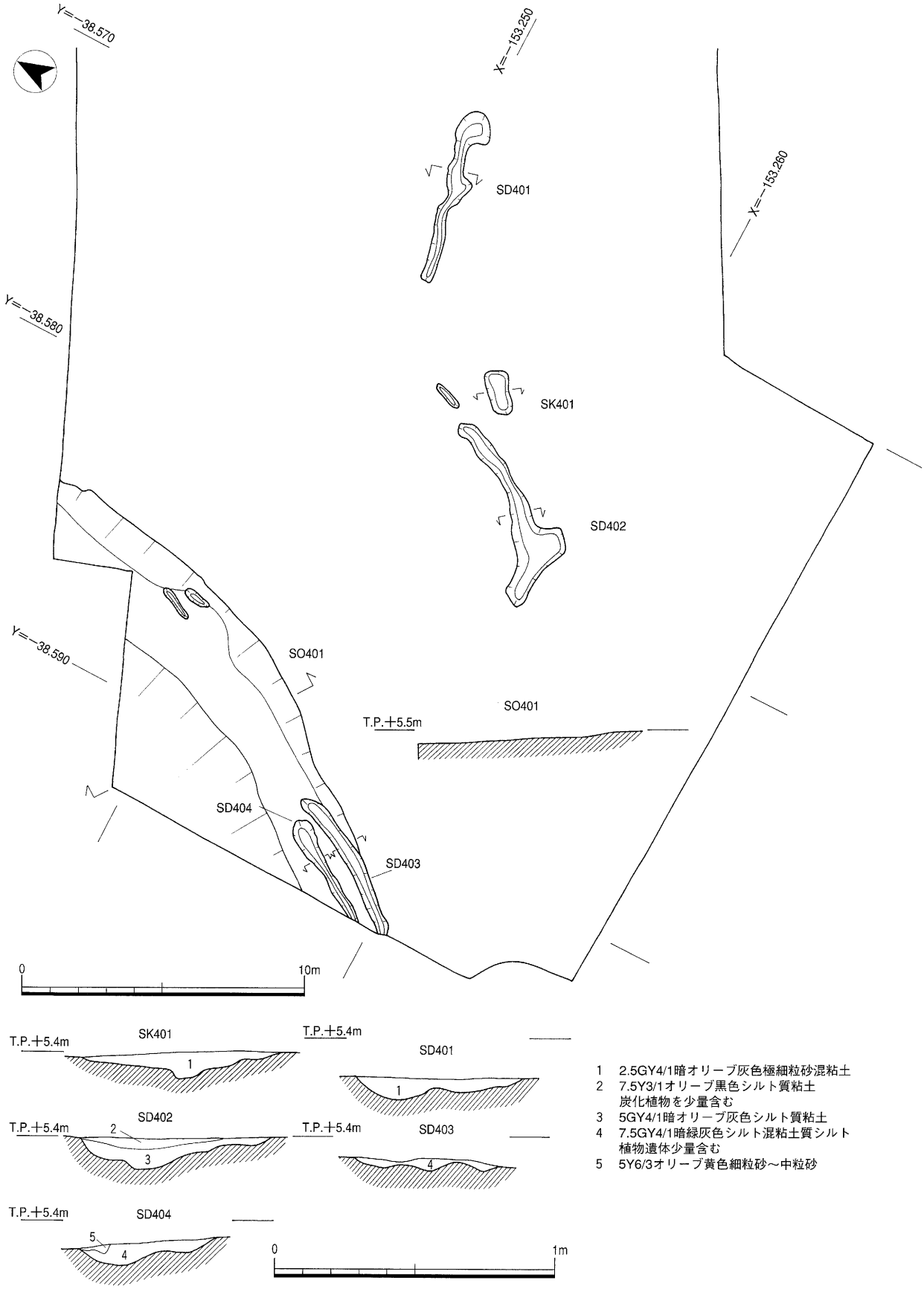
３調査区西部のＶ－15－５～７Ａ～Ｂ地区に位置する。北東－南西方向の弧状を呈する肩から北西に緩やかに落ち込むものである。深さ約0.1mで幅約2.0mのテラス部分を形成した後、さらに約0.2m落ち込む。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色シルトでやや粘性があり植物遺体を少量含む。遺物は出土していない。なおＳＤ403・404は、ＳＯ401内のテラス部分で肩に沿って検出した溝で、一連の遺構と捉えられる。規模はＳＤ403が検出長4.4m・幅0.24～0.73m・深さ0.13m、ＳＤ404が検出長5.8m・幅0.34m～0.58m・深さ0.13mを測る。

ＳＯ402

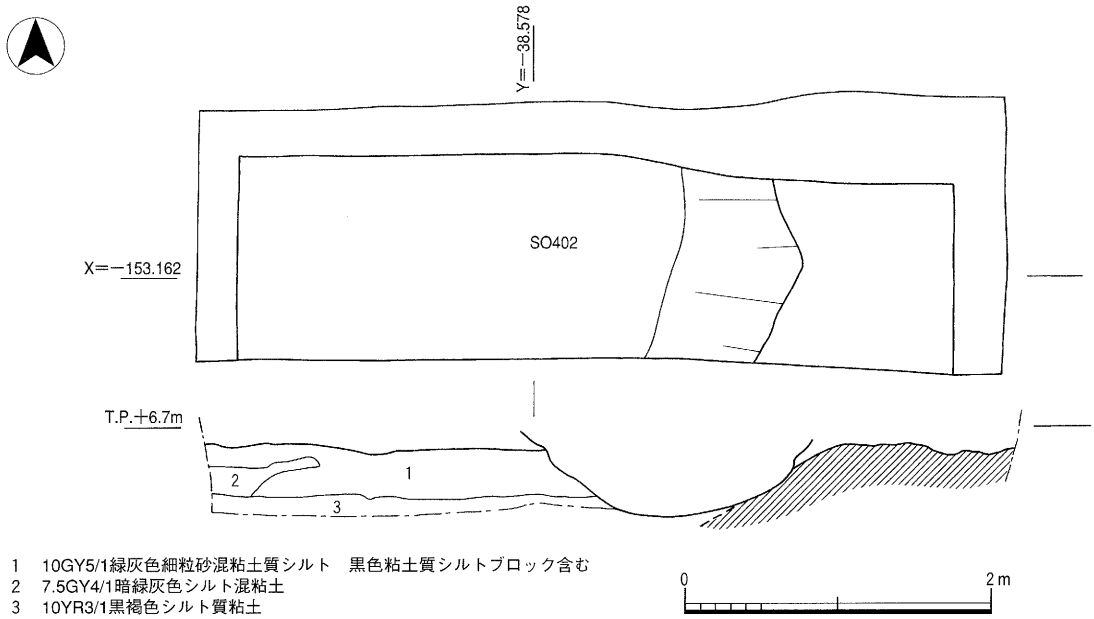
Ｖ－10－７Ｃ地区で検出した７調査区西半を占める落ち込みである。東部の第９層を肩とし、西に向かって落ち込む状況である。規模は東西3.7m以上・南北1.3m以上・深さ0.4m以上を測り、底は最終掘削深度以下に及ぶため確認していない。検出部分の埋土は緑灰色～黒褐色系粘土質シルト～シルト質粘土の３層から成り、上部には黒色粘土質シルトのブロックが含まれる。遺物は出土していないが、上層から自然木とおもわれる木片が出土している。



第34図　第４面遺構平面図



第35図　３調査区第４面遺構平断面図



第36図　7調査区第4面平断面図

遺構に伴わない遺物

第Ⅵ層出土遺物

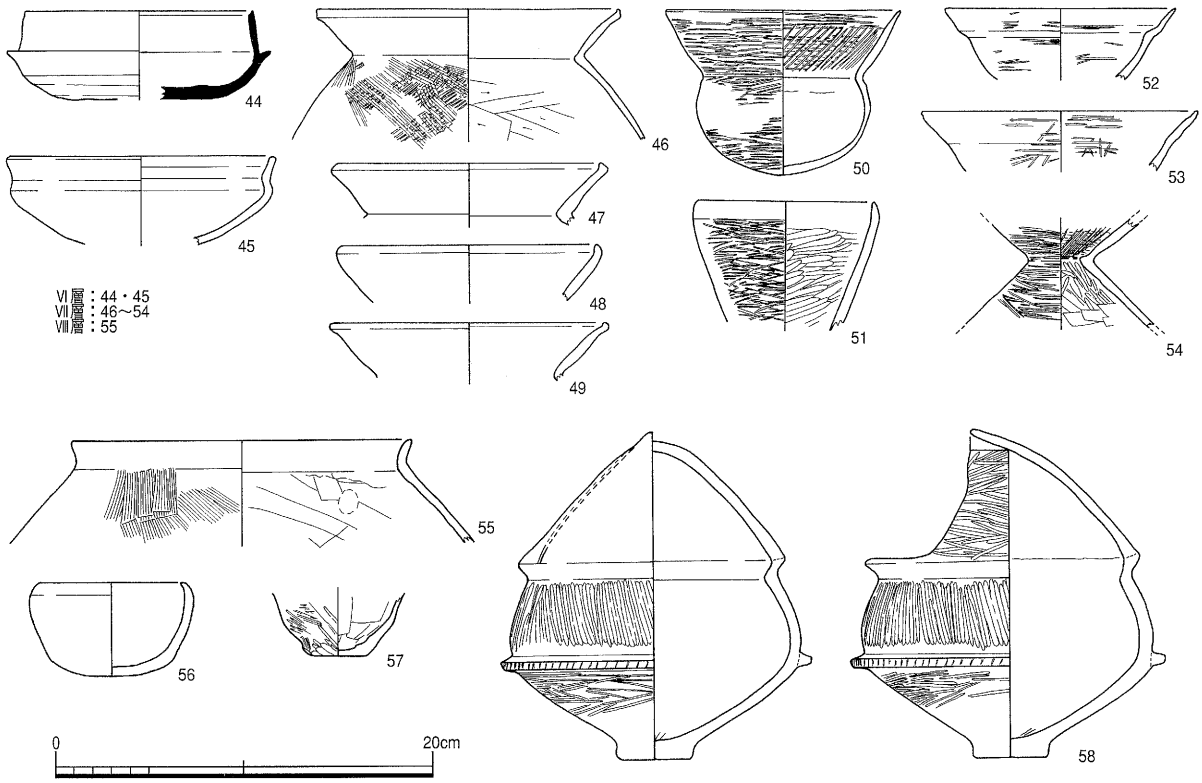
44は須恵器杯身で、復元口径12.2cm・器高4.7cmを測る。時期的には5世紀末に比定される。2調査区Ⅴ−10−10J地区出土。45は土師器鉢で、復元口径14.3cmを測る。口縁部ヨコナデで、底部外面には掌紋が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、器形から吉備地方からの搬入品と考えられ、時期は古墳時代初頭(庄内式期)に比定される。1調査区Ⅴ−10−7J地区出土。

第Ⅶ層出土遺物

46〜49は庄内甕である。46は口径16.0cmを測り、体部外面平行タタキ後ハケ。3調査区Ⅴ−15−6・7B地区出土。48は口縁端部が内灣する。47〜49は7調査区Ⅴ−10−7B・C地区出土。50は土師器小形丸底壷である。上部・下部を図上で復元したもので、口径12.5cm・復元器高8.9cm・体部最大径9.2cmを測る。ヘラミガキを多用する精製品である。3調査区Ⅴ−15−3E地区で北壁掘削時に出土した。51は直口壷の口頸部で、復元口径9.8cmを測る。内外面を横方向に密にヘラミガキする。淡黄褐色を呈し、口縁端部が内灣して直立する特徴は在地のものとは趣が異なり、搬入品の可能性がある。1調査区Ⅴ−10−7I地区出土。52・53は口縁部が二段屈曲する小形鉢の小片である。7調査区Ⅴ−10−7B・C地区出土。54は鼓形器台である。6調査区Ⅴ−10−8A　地区出土。これらの土器の時期は古墳時代初頭後半〜前期前半（庄内式新相〜布留式古相）に比定される。

第Ⅷ層出土遺物

55は短く屈曲する口縁部から肩の張る形態の甕で、復元口径18.0cmを測る。肩部は粗い板ナデを強く施す特異な調整である。小片のため不明確であるが口縁部に歪みがあり、片口を有する可能性がある。搬入品であろう。6調査区Ⅴ−10−9A地区出土。56は手捏ね成形による小形の鉢で、口径7.8cm・器高5.0cmを測る。口縁部はヨコナデ、他はナデである。2調査区Ⅵ−11−1A



第37図　第Ⅵ～Ⅷ層出土遺物実測図

地区出土。57は底径3.6cmを測り、小形の壷と思われる。外面へラミガキを施し、黒斑を有する。６調査区Ｖ－10－９Ａ地区出土。55～57の時期は不明である。58は手焙形土器で、ほぼ完形に復元される。口径14.7cm・器高17.3cm・体部最大径16.8cmを測る。外面へラミガキで、突帯端面に刻み目を施し、突帯下面～底部上半に一箇所黒斑を有する。弥生時代後期末に比定されよう。３調査区Ｖ－15－６Ｂ地区出土。

参考文献

・村上年生　1998「第Ⅱ章第７節　木製品」『河内平野遺跡群の動態Ⅳ　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－北遺跡群弥生時代後期以降編－』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
・穂積裕昌　2000「一般国道23号中勢道路（８工区）建設事業に伴う　六大Ａ遺跡発掘調査報告（木製品編）」『三重県埋蔵文化財調査報告115-17』三重県埋蔵文化財センター
・中川　寧　2003「山陰における古式土師器の編年と派生する問題について～出雲を中心に～」『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』(財)大阪府文化財センター

第４章　自然化学的分析

第１節　久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98－25）に伴う花粉分析

総合科学株式会社　水谷陸彦

１．調査概要

１）業務名

久宝寺遺跡第25次調査（ＫＨ98－25）に伴う花粉分析

２）目 的

八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に先立って、継続的に発掘調査が行われている。調査地全体では、弥生時代後期以降から現在までに堆積した地層がみられる。今回の第25次調査では主に古墳時代の地層がみられ、溝がほぼ平行に何本か並ぶことから農業をしていたと考えられる遺構が発掘された。古墳時代以降の環境変遷を推定するとともに、農業をしていたと考えられる遺構での作物の種類を考える。

３）調査地

大阪府八尾市北亀井町３丁目（図－１・２参照）

４）履行期間

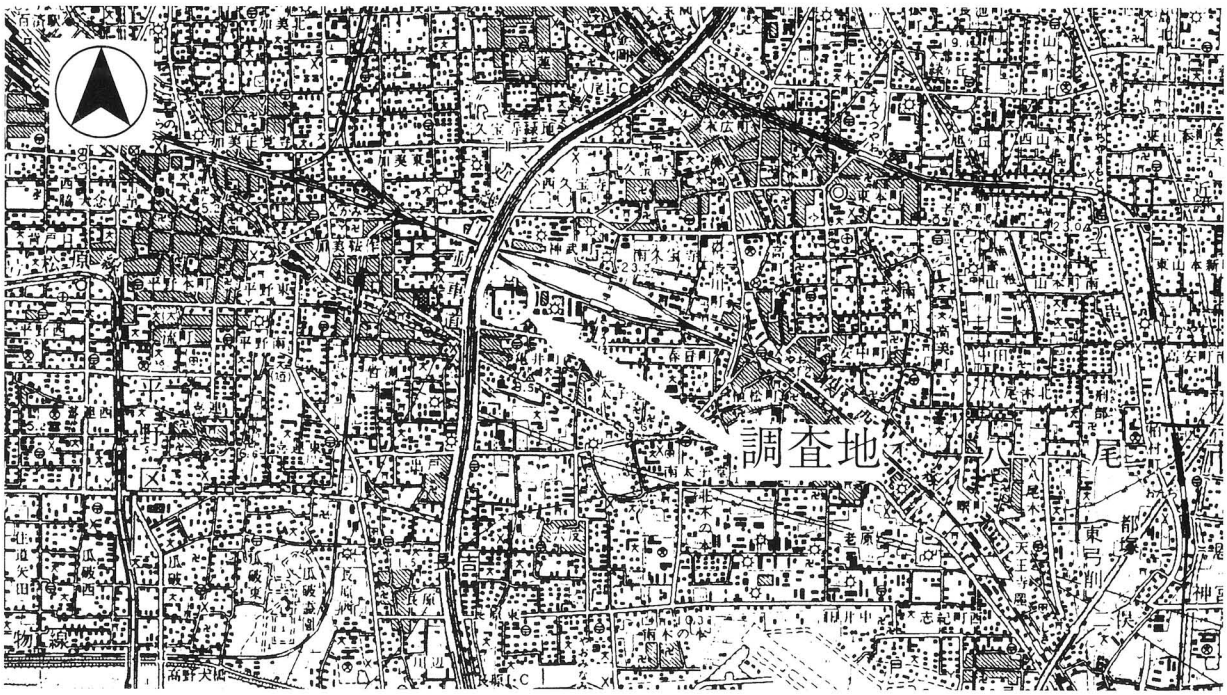
平成11年６月10日～平成11年８月31日

５）分析試料の数量

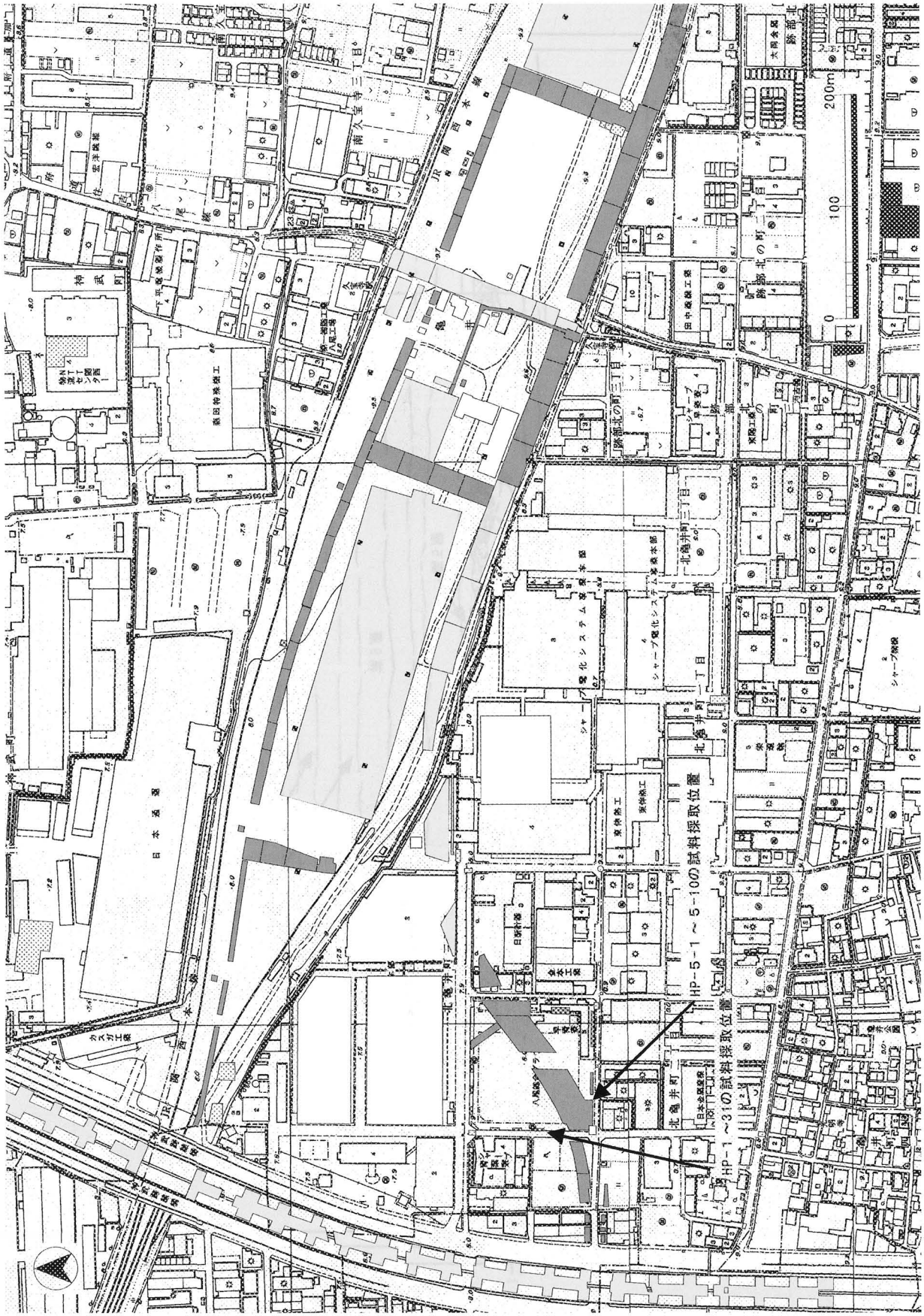
花粉分析：41点

６）分析試料の採取位置

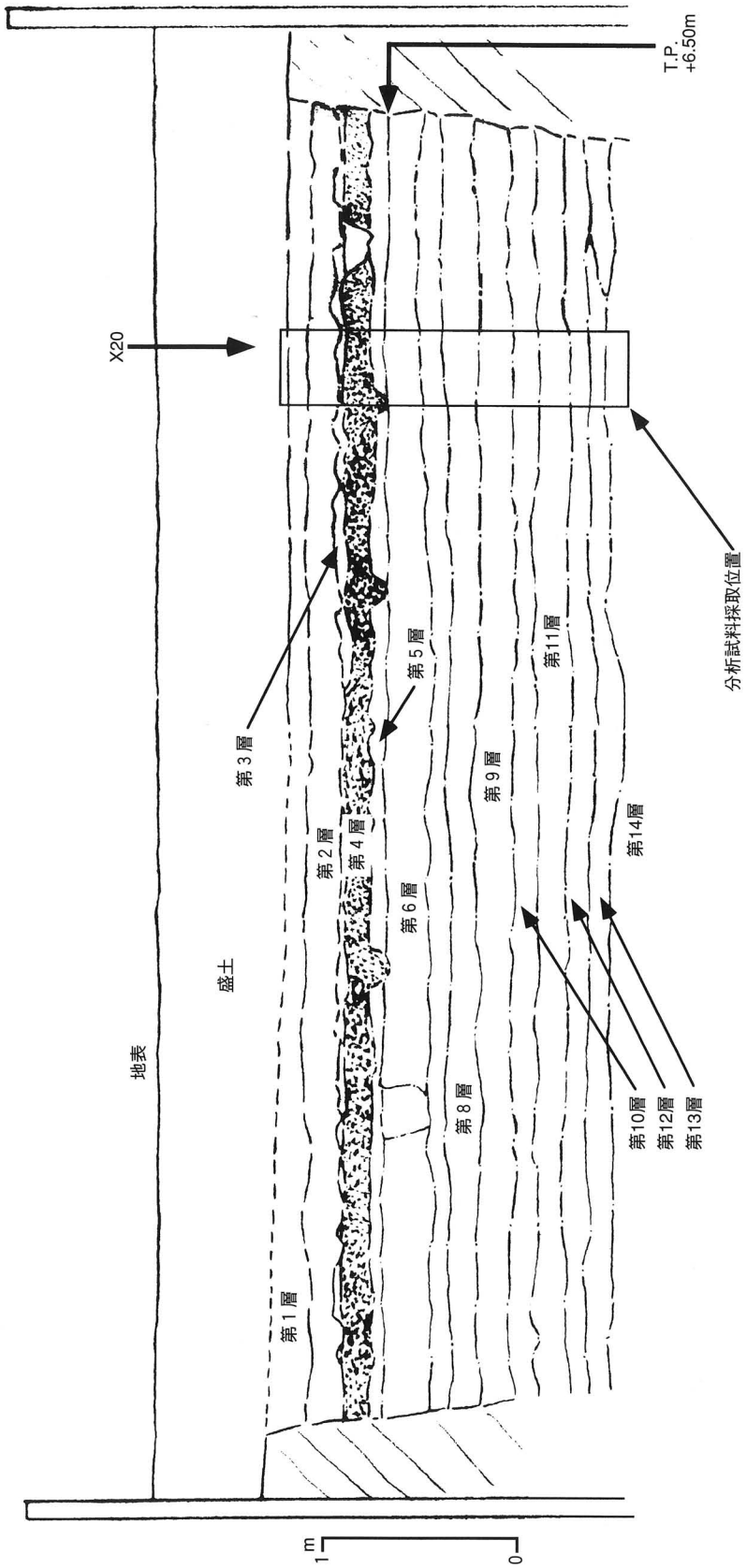
分析試料の採取位置を図－３の壁面図と図－４の柱状図、図－５の平面図に示す。



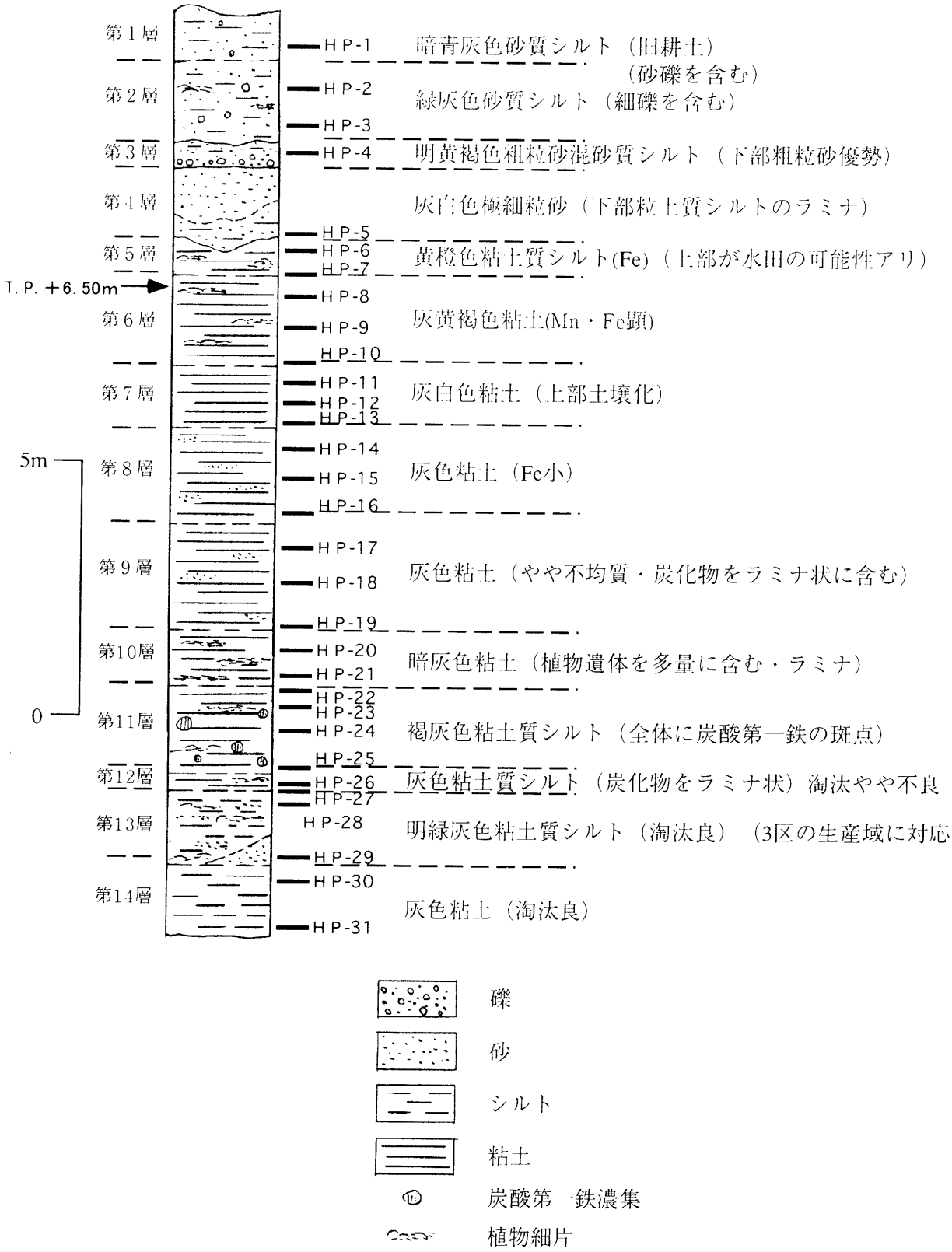
図－１　調査位置図



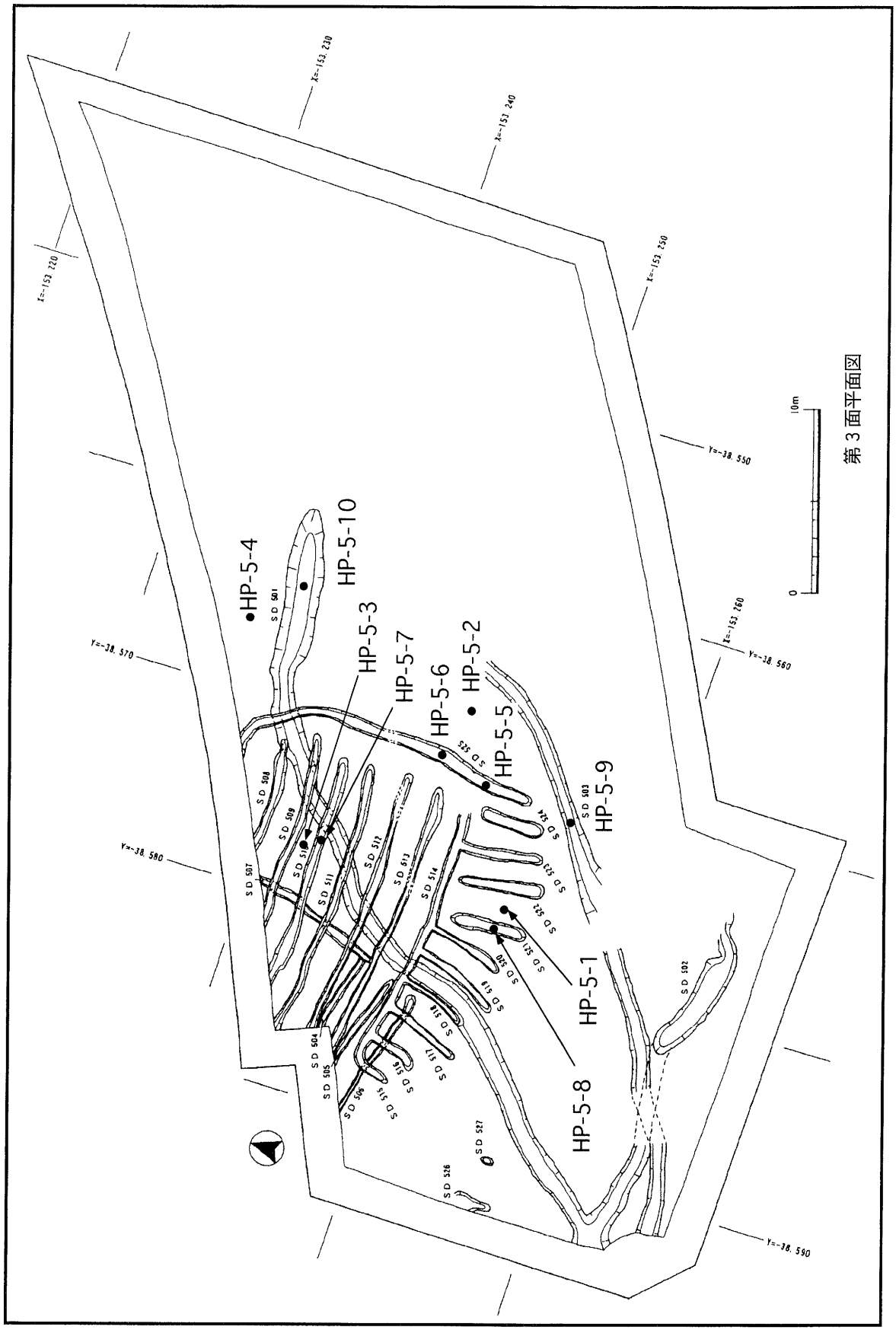
図－２　試料採取位置図



図－3　25－4グリッドにおける試料採取位置壁面図



図－４　25－４グリッドにおける試料採取位置柱状図



図－５　25－３グリッドにおける試料採取位置図

２．分析方法

試料からの花粉化石抽出およびプレパラートの作成は、以下の手順で行った。

(1)湿潤重量で20ｇ程の試料を10％水酸化カリウム水溶液に室温で１日浸す。
(2)砂粒および植物片の除去。
(3)傾斜法により粘土鉱物およびフミン酸の除去。
(4)蒸発皿処理によるシルト粒および植物片の除去。
(5)塩化亜鉛（飽和水溶液）による重液分離（800r.p.m.で15分、その後2000r.p.m.で10分間、遠心分離）。
(6)フッ化水素酸処理（室温で１日）。
(7)アセトリシス処理（１分間湯煎）。
(8)グリセリジェリーで封入。
(9)ネイルエナメルで密封。

上記の方法で各試料２～５枚のプレパラートを作成した。花粉の同定は、オリンパスの生物顕微鏡(BH２)で主に400倍（接眼10倍×対物40倍）、必要に応じて1000倍（接眼10倍×対物100倍）の鏡下で行った。集計はメカニカルステージを用いて木本花粉の総数が200個を越えるまで同定・計数を行い、その過程で検出される草本花粉やシダ・コケ胞子についても同定・計数した。出現率の計算は、木本花粉の総数を基数として行った。

表－１　分析重量と花粉化石産出状況

試料番号	分析重量(湿潤重量)ｇ	産出状況	試料番号	分析重量(湿潤重量)ｇ	産出状況
HP-1	20.61	◎	HP-22	24.81	◎
HP-2	25.41	◎	HP-23	23.39	◎
HP-3	20.21	○	HP-24	20.27	◎
HP-4	21.14	○	HP-25	23.16	◎
HP-5	20.68	○	HP-26	20.09	◎
HP-6	22.91	◎	HP-27	21.68	◎
HP-7	21.47	◎	HP-28	20.41	◎
HP-8	20.10	◎	HP-29	29.52	◎
HP-9	24.98	◎	HP-30	20.13	◎
HP-10	23.07	◎	HP-31	20.01	◎
HP-11	20.79	◎	HP-5-1	20.06	△
HP-12	20.85	◎	HP-5-2	20.16	△
HP-13	26.35	◎	HP-5-3	20.09	△
HP-14	24.01	◎	HP-5-4	21.28	△
HP-15	22.62	◎	HP-5-5	20.50	◎
HP-16	21.25	◎	HP-5-6	20.28	△
HP-17	20.09	◎	HP-5-7	20.15	△
HP-18	20.34	◎	HP-5-8	21.76	△
HP-19	21.46	◎	HP-5-9	20.21	△
HP-20	21.13	◎	HP-5-10	20.06	◎
HP-21	22.01	◎			

◎:木本花粉200個以上
○:木本花粉50～200個未満　　△:木本花粉50個未満

3．分析結果

花粉化石の産出状況を表－１に、花粉ダイアグラムを図－６、７に、産出頻度が低かったタクサを表－２、３に示す。

今回、25-３グリッドと25-４グリッドの２ヶ所から試料を採取した。25-３グリッドから採取した試料にはその試料番号の頭に「HP-５-」を、25-４グリッドから採取した試料にはその試料番号の頭に「HP-」をつけて区別した。

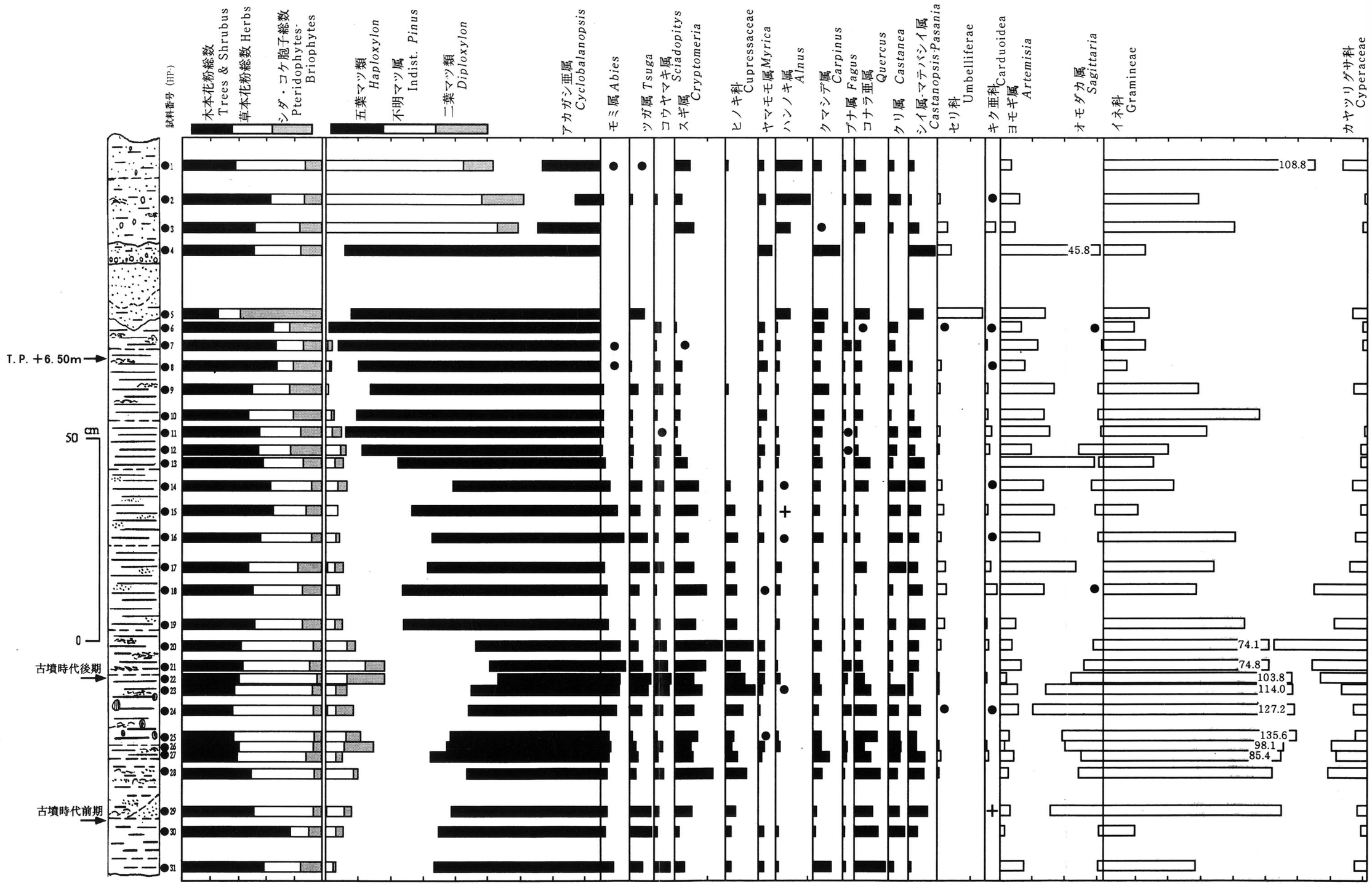
畝状遺構がみつかった25-３グリッドから採取した試料では、HP-５-５とHP-５-10の２試料を除いて木本花粉の総数が20個未満と非常に少なかった。通常このような試料では花粉化石１個の産出で出現率に大きな違いが出てくるため、花粉ダイアグラムとしては表さないことが多い。今回の場合、産出傾向をすこしでも視覚的にとらえようと、異常な割合を示していながらも花粉ダイアグラムとして表した。

今回採取したすべての試料から花粉化石は産出した。ただし、HP-４と５、HP-５-１～４とHP-５-６～９では、木本花粉の総数が50個未満と少なかった。

産出した木本花粉として、HP-４～31およびHP-５-１～10ではアカガシ亜属（*Cyclobalanopsis*）が非常に多く、クリ属（*Castanea*）やシイ属-マテバシイ属（*Castanopsi-Pasania*）、コナラ亜属（*Quercus*）などの広葉樹の花粉も伴われた。これらの試料で針葉樹の花粉はいずれも少なくスギ属（*Cryptomeria*）やヒノキ科（*Cupressaceae*）、モミ属（*Abies*）、ツガ属（*Tsuga*）が産出した。HP-1～3では二葉マツ類（*Diploxylon*）を主としたマツ属（*Pinus*）が非常に多く、アカガシ亜属やハンノキ属（*Alnus*）などが伴われた。

草本花粉としては、イネ科（*Gramineae*）が非常に多く、ヨモギ属（*Artemisia*）やカヤツリグサ科（*Cyperaceae*）、オモダカ属（*Sagittaria*）なども多く産出した。わずかであるが、HP-２と７、10からはソバ属（*Fagopyrum*）が、HP-１と３カラハワタ属（*Gossypium*）が産出した。

シダ・コケの胞子では、オシダ科・チャセンシダ科を含んだ単条口の胞子が非常に多く、三条口の胞子はわずかであった。また、花粉でも胞子でもないが、土壌菌がHP-１～３とHP-５-10で多く産出した。



図－６　久宝寺遺跡第25次調査　25－４グリッドの花粉ダイアグラム

表－2①　久宝寺遺跡第25次調査　25－4グリッドの産出頻度が低かったタクサ

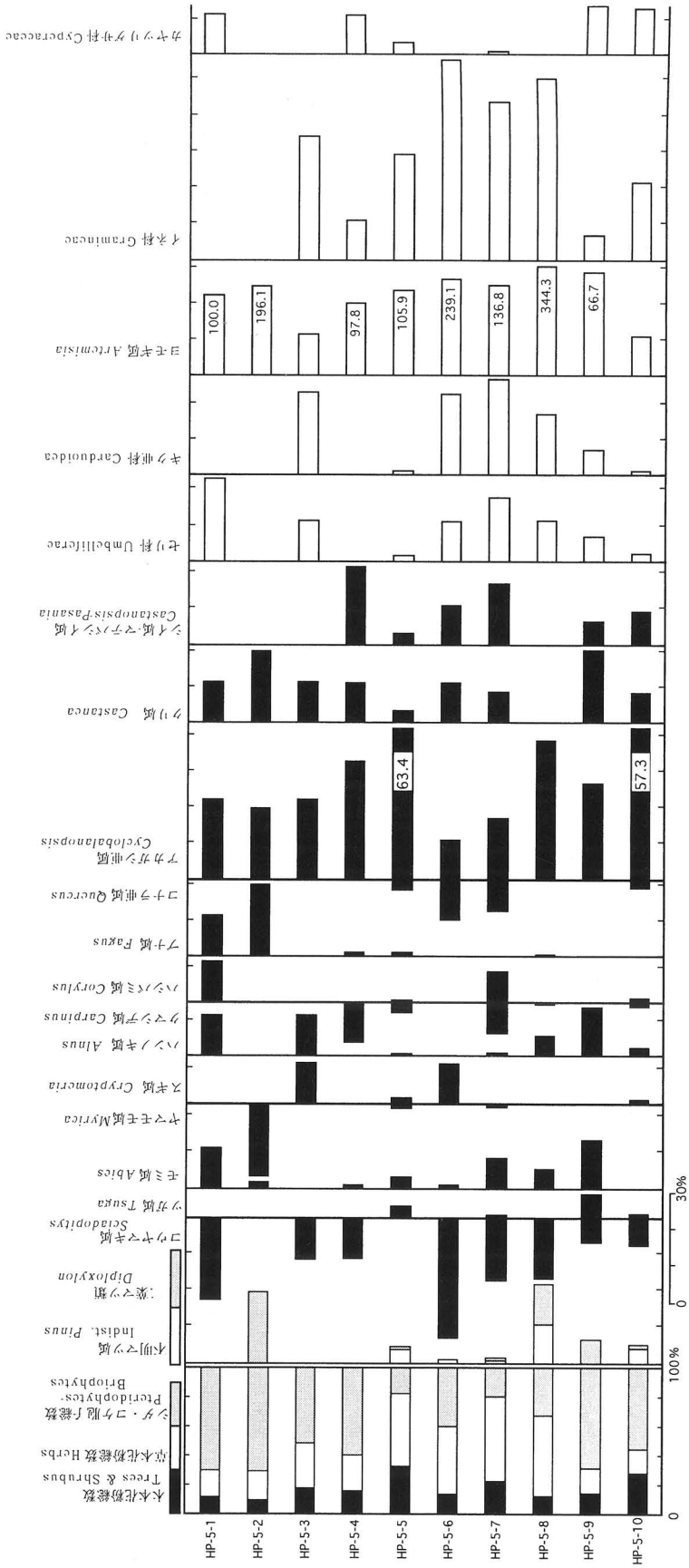
Sample NO.	Picea トウヒ属	Podocarps マキ属	Cupres-saceae ヒノキ科	Salix ヤナギ属	Juglans -Ptero. クルミ属・サワグルミ属	Betula カバノキ属	Ulmus-Zelkova ニレ属・ケヤキ属	Celtis-Aphana. エノキ属・ムクノキ属	Liquidamber フウ属	Lagerst-roemia サルスベリ属	Melia センダン属	Mallotus アカメガシワ属	Phello-dendron キハダ属	Ilex モチノキ属	Acer カエデ属	Aescu-lus トチノキ属	Parthe-nocis. ツタ属	Tilia シナノキ属	Elaeag-nus グミ属
HP-1	-	-	0.8	-	-	0.8	-	0.8	-	0.8	-	0.1	-	-	-	-	-	-	-
HP-2	-	0.7	-	0.7	-	-	0.7	0.7	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-	-	-
HP-3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-6	-	0.1	-	-	0.1	0.7	0.1	-	-	-	-	0.7	-	-	-	0.7	-	-	-
HP-7	-	-	-	-	0.1	2.0	0.7	-	-	-	-	0.7	0.1	-	-	0.1	-	-	-
HP-8	-	-	-	-	-	0.6	0.1	0.6	-	-	-	1.2	-	0.6	0.6	-	-	-	-
HP-9	-	0.8	0.8	-	-	-	-	1.6	-	-	-	1.6	-	-	-	-	-	-	-
HP-10	-	0.8	-	-	2.5	-	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-11	-	-	-	-	-	0.1	-	0.1	-	-	-	-	-	-	-	0.9	-	-	-
HP-12	-	0.6	-	-	0.1	0.1	0.6	0.1	-	-	-	0.6	-	0.1	0.6	-	-	-	0.1
HP-13	-	1.4	-	-	1.0	0.5	1.9	1.0	0.5	-	-	-	-	-	0.5	0.5	-	-	-
HP-14	-	0.7	1.5	-	0.1	1.5	2.2	0.1	-	-	-	3.6	-	1.5	0.1	-	-	-	-
HP-15	-	1.2	2.8	-	1.6	0.4	0.4	-	-	-	-	-	-	0.4	0.8	-	0.4	-	0.0
HP-16	0.6	-	3.6	0.6	0.1	1.2	1.8	-	-	-	-	0.1	0.6	0.1	0.1	0.1	-	-	0.1
HP-17	-	1.2	3.0	-	-	-	1.8	0.6	-	-	-	-	-	0.6	0.6	0.6	-	0.6	0.1
HP-18	-	-	3.5	1.4	-	0.7	-	0.1	-	-	-	-	0.7	-	-	2.1	-	-	-
HP-19	-	-	3.5	0.6	0.6	1.2	0.6	-	-	-	-	0.6	-	0.6	-	-	-	-	0.1
HP-20	-	2.0	8.6	-	0.5	1.0	0.5	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	-	-	-
HP-21	-	0.6	4.5	-	0.6	0.6	2.6	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-22	0.6	1.3	5.8	0.6	0.6	1.3	0.6	2.6	-	-	-	0.6	-	-	-	-	-	-	-
HP-23	-	1.3	9.0	-	0.1	0.6	-	1.3	-	-	-	0.6	-	-	-	-	-	-	-
HP-24	-	0.6	5.5	-	0.6	0.1	4.9	2.4	-	-	-	0.6	0.1	-	0.1	-	-	0.6	-
HP-25	-	0.9	2.7	-	0.9	0.9	2.7	2.7	-	-	-	1.8	-	-	-	-	-	-	-
HP-26	-	0.6	1.9	0.6	0.6	1.9	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-27	-	0.5	3.6	0.5	0.5	0.5	1.0	1.0	-	-	0.5	0.1	-	-	-	-	-	-	-
HP-28	-	-	6.4	-	0.0	1.0	0.5	1.5	-	-	-	-	-	-	0.5	0.5	-	-	-
HP-29	-	0.4	3.0	1.1	0.8	1.9	1.9	2.6	-	-	-	-	0.4	-	0.4	-	-	-	-
HP-30	-	-	1.8	0.5	-	0.5	1.8	4.5	-	-	-	0.9	-	0.5	1.4	0.9	0.5	-	0.5
HP-31	-	0.8	1.6	1.6	-	-	0.8	2.4	-	-	-	-	-	-	-	0.8	-	-	-

表－2②　久宝寺遺跡第25次調査　25－4グリッドの産出頻度が低かったタクサ

Sample NO.	Erica-ceae ﾂﾂｼﾞ科	Symplo-cos ﾊｲﾉｷ属	Styrax ｴｺﾞﾉｷ属	Ligust-rum ｲﾎﾞﾀﾉｷ属	Fraxi-nus ﾄﾈﾘｺ属	Lonice-ra ｽｲｶｽﾞﾗ属	Clerode-ndoron ｸｻｷﾞ属	Fagopyrum ｿﾊﾞ属	Persic.-Echin. ｻﾅｴﾀﾃﾞ・ｳﾅｷﾞﾂｶﾐ節	Reynou-tria ｲﾀﾄﾞﾘ節	Rumex ｷﾞｼｷﾞｼ属	Chenop-diaceae ｱｶｻﾞ科	Caryo-phyll. ﾅﾃﾞｼｺ科	Nymphaea ﾋﾂｼﾞｸｻ属	Ranunculs ｷﾝﾎﾟｳｹﾞ属	Thalic-trum ｶﾗﾏﾂﾂｳ属	Cruciferae ｱﾌﾞﾗﾅ科	Sanguisorba ﾜﾚﾓｺｳ属
HP-1	-	-	-	-	-	-	-	-	0.1	-	-	3.3	1.6	-	0.8	-	0.8	-
HP-2	0.7	-	-	0.1	0.7	-	-	0.1	0.7	-	-	0.1	0.7	-	-	-	1.4	-
HP-3	-	-	-	-	-	-	-	-	0.2	-	-	4.5	4.5	-	0.2	-	-	-
HP-4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.5	-	4.5
HP-6	0.1	0.1	0.1	0.1	-	-	-	-	0.1	-	-	0.1	0.1	0.7	-	-	-	-
HP-7	0.1	-	-	-	-	-	-	0.7	-	-	-	0.1	0.1	-	-	-	-	-
HP-8	0.1	-	0.1	-	-	-	-	-	0.6	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-
HP-9	0.1	0.8	0.8	-	-	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-10	0.1	-	-	-	-	-	-	0.8	0.8	-	-	-	-	-	-	-	0.8	-
HP-11	0.1	-	-	-	-	-	-	-	0.9	0.1	-	0.1	0.9	-	-	-	-	-
HP-12	0.1	-	-	-	-	-	-	-	0.1	0.1	-	0.1	0.1	-	-	-	-	-
HP-13	0.0	-	0.5	-	-	-	-	-	0.0	0.5	-	0.5	0.5	-	-	-	0.5	-
HP-14	0.1	-	-	0.1	0.7	0.1	-	-	-	0.1	-	1.5	0.7	0.7	-	-	-	-
HP-15	0.0	-	-	0.0	-	-	0.0	-	0.4	-	-	0.4	-	-	-	-	0.4	-
HP-16	0.6	-	0.6	0.6	-	-	-	-	3.6	0.1	-	0.1	1.2	-	-	-	0.1	-
HP-17	-	-	-	-	-	0.1	-	-	0.6	2.4	-	1.2	1.2	-	-	-	-	0.1
HP-18	0.1	-	0.7	-	0.7	-	-	-	0.7	-	-	-	-	-	-	-	1.4	-
HP-19	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.2	-	-	-	0.6	-
HP-20	-	-	0.5	-	-	-	-	-	3.6	0.1	-	1.0	0.1	-	-	-	1.0	-
HP-21	-	-	-	-	-	-	-	-	5.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-22	-	0.1	0.1	-	-	-	-	-	0.6	-	-	-	-	-	-	-	1.3	-
HP-23	-	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	-	-	0.6	-	-	-	-	-
HP-24	-	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	0.6	0.1	0.1	-	-	-	-	-
HP-25	0.9	-	-	-	-	-	-	-	0.9	-	-	0.9	0.1	-	-	-	-	-
HP-26	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-27	0.1	-	-	-	-	-	-	-	3.1	-	-	-	1.0	1.0	-	-	-	-
HP-28	-	-	0.0	-	-	-	-	-	1.0	-	-	-	-	0.5	-	-	0.5	-
HP-29	-	-	-	-	-	0.0	-	-	1.9	-	-	0.4	-	0.4	-	-	-	-
HP-30	0.0	-	0.5	-	0.5	0.5	-	-	0.0	-	-	0.0	-	-	-	-	-	-
HP-31	-	-	-	0.1	-	-	-	-	1.6	-	-	0.8	1.6	-	-	-	-	-

表－2③　久宝寺遺跡第25次調査　25－4グリッドの産出頻度が低かったタクサ

Sample NO.	Leguminosae マメ科	Trapa ヒシ属	Epilobium アカバナ属	Araliaceae ウコギ科	Nymphoides アサザ属	Calystegia ヒルガオ属	Labiatae シソ科	Clinopodium クルマバナ属	Actinostemma コキヅル属	Gynostemma アマチャヅル属	Patrinia オミナエシ属	Geranium フウロソウ属	Cichorioideae タンポポ亜科	Typha ガマ属	Alisma サジオモダカ属	Gossypium ワタ属
HP-1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.5	-	0.1
HP-2	-	-	-	-	-	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-	-	-
HP-3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.5	-	27.2
HP-4	-	-	-	-	-	-	-	-	4.2	-	-	-	-	-	-	-
HP-5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.5	-	-
HP-6	0.7	0.1	-	-	-	-	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-	-
HP-7	1.3	1.3	-	-	-	-	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-	-
HP-8	-	0.1	-	-	-	-	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-9	-	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.8	-	-
HP-10	4.2	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.1	-
HP-11	0.1	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-12	0.6	-	-	-	-	-	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-
HP-13	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.0	-	0.0	-
HP-14	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.1	0.1	-	-
HP-15	0.4	-	0.4	-	-	-	-	-	-	-	0.4	-	-	0.4	-	-
HP-16	0.6	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	-	-	0.1	0.1	-	-
HP-17	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	1.2	-	-	-	1.2	-	-
HP-18	2.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-19	1.2	-	-	-	-	-	1.2	-	-	0.6	-	0.1	0.6	1.2	-	-
HP-20	1.5	0.1	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	-	0.5	3.6	-	-
HP-21	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.3	-	-
HP-22	1.3	0.6	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	-	-	0.1	0.6	-
HP-23	-	0.6	-	-	-	-	-	0.1	-	-	-	-	-	0.6	-	-
HP-24	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8	-	-	-	-	-	-
HP-25	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-26	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	1.9	-	-	-	1.9	0.6	-
HP-27	1.0	-	-	-	-	-	-	-	2.1	4.1	-	-	-	4.7	-	-
HP-28	-	-	-	-	0.5	0.5	-	-	8.9	5.4	-	-	-	1.0	-	-
HP-29	0.4	-	-	-	-	-	-	-	1.5	0.8	-	-	0.0	2.3	-	-
HP-30	-	-	-	0.5	-	-	-	-	-	1.4	-	-	-	1.4	-	-
HP-31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.8	-	-	-	-	-	-



図－7　久宝寺遺跡第25次調査　25－3グリッドの花粉ダイアグラム

表－３　久宝寺遺跡第25次調査　25－３グリッドの産出頻度が低かったタクサ

Sample NO.	Podocarps マキ属	Cupres-saceae ヒノキ科	Juglans -Ptero. クルミ属・サワグルミ属	Betula カバノキ属	Ulmus-Zelkova ニレ属・ケヤキ属	Acer カエデ属	Tilia シナノキ属	Camellia ツバキ属	Althaea タチアオイ属	Erica-ceae ツツジ科	Symplo-cos ハイノキ属	Persic. -Echin. サナエタデ・ウナギツカミ節	Chenop-diaceae アカザ科	Caryo-phyll. ナデシコ科	Thalic-trum カラマツソウ属	Legumi-nosae マメ科	Epilobium アカバナ属	Melothria スズメウリ属	Cichor-ioideae タンポポ亜科	Typha ガマ属
HP-5-1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.1	-	11.1	-	-	-	-
HP-5-2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-
HP-5-3	11.1	-	-	-	-	-	-	-	11.1	-	11.1	11.1	-	11.1	-	11.1	11.1	11.1	-	-
HP-5-4	10.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.9	10.9	1.1	-	10.9	-	-	-	-
HP-5-5	1.1	3.8	0.5	0.5	0.5	-	0.5	0.5	-	0.5	0.5	0.5	1.6	0.5	-	2.2	-	-	0.5	0.5
HP-5-6	-	10.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1	-	10.9	-	10.9	-	-	-	-
HP-5-7	-	-	-	-	0.9	-	0.9	-	-	-	-	8.5	25.6	0.9	-	0.9	-	-	0.9	-
HP-5-8	-	10.9	-	-	0.5	-	-	-	-	-	-	0.5	-	0.5	-	5.5	-	-	5.5	5.5
HP-5-9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.7	-	6.7	-	-	-	-	6.7	-
HP-5-10	-	2.1	-	-	1.0	1.0	-	-	-	-	-	0.1	2.1	-	1.0	6.3	-	-	-	-

4．古植生・古気候

4－1　25-4グリッド

(1) 分帯

25-4グリッドで試料を採取した地層は、花粉化石群集にもとづいて下位よりⅠ帯（HP-31～4）とⅡ帯（HP-3～1）に大きく分帯される。Ⅰ帯はさらに①亜帯（HP-31～20）、②亜帯（HP-19～14）、③亜帯（HP-13～4）の3亜帯に下位より分帯される。各花粉帯の花粉化石群集の特徴は次の通りである。

Ⅰ帯（HP-31～4）

全体にアカガシ亜属が非常に高率に産出し優占する。木本花粉としてアカガシ亜属以外のタクサは伴われる程度で、広葉樹としてはクリ属やシイ属-マテバシイ属、コナラ亜属など、針葉樹としては二葉マツ類を主としたマツ属やスギ属、ヒノキ科、モミ属などがある。

①亜帯から②亜帯そして③亜帯へと上位になるにつれてアカガシ亜属が段階的に増加する。これに対して①亜帯では10%前後産出していたマツ属が②亜帯では5%前後の産出になり、モミ属やツガ属、スギ属、ヒノキ科は③亜帯になって減少してモミ属とヒノキ科はほとんど産出しない。

草本花粉として、①亜帯ではオモダカ属とカヤツリグサ科を伴ってイネ科が高率である。②亜帯ではオモダカ属が激減してほとんど産出せず、イネ科も減少する。ヨモギ属が増加しやや高率に産出している。③亜帯は②亜帯に類似し、イネ科とヨモギ属がやや高率に産出している。

Ⅱ帯（HP-3～1）

二葉マツを主としたマツ属が高率に産出し優占する。Ⅰ帯で非常に高率であったアカガシ亜属は激減する。ハンノキ属が10%程度産出するが、その外は針葉樹も広葉樹も低率である。

草本花粉としてはイネ科が高率に産出する。

(2) 古植生・古気候

花粉化石群集にもとづき、各帯ごとにそれぞれの地層が堆積した時代の古植生と古気候を考える。

Ⅰ帯の時代

遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占し、クリ属やシイ属-マテバシイ属などがまじる暖温帯常緑広葉樹林であったと考えられる。低率ながら産出するモミ属やツガ属、スギ属、コウヤマキ属、ブナ属、コナラ亜属などから、後背地である生駒山地や金剛山地の高標部には中間温帯林や冷温帯南部の落葉広葉樹林があったと推定される。

①亜帯の時代、水田雑草としてもみられるオモダカ属を伴ってイネ科が非常に高率であることから、稲作が行われていた可能性がある。①亜帯はⅠ帯の中でアカガシ亜属の産出がもっとも低く、木本花粉総数の割合も低い。これは、稲作などの人間の活動によって遺跡周辺の森林が極端ではないが破壊を受けた影響であると考えられる。そしてこの森林の破壊に伴う二次林としてアカマツやコナラなどが遺跡周辺に増え、②亜帯や③亜帯に比べて①亜帯でマツ属とコナラ亜属の花粉がやや多く産出していると推定される。

①亜帯の最上部、HP-23～20ではヒシ属（*Trapa*）が産出する。これらの試料は第11層の最上部から第10層にまたがっている。第11層では、最上部を除いて炭酸第一鉄の斑点が見られることか

ら低湿地の環境が推定されている。この環境の後、第11層の最上部から第10層が堆積する時期には、ヒシ属が生息できる池のような滞水域へと移り変わっていったと考えられる。

②亜帯、③亜帯の時代は、イネ科が減少しオモダカ属はほとんど産出せず代わりにヨモギ属がやや高率に産出すること、アカガシ亜属の産出が段階的に増加するとともに木本花粉総数の割合も増えることから、稲作などの人間の活動が少なくなり森林が徐々に回復していったと考えられる。

気候は、推定された植生から植生帯区分の暖温帯に属し、現在の大阪平野と同じぐらいの温かさであったと考えられる。

Ⅱ帯の時代

Ⅰ帯の時代にあったアカガシ亜属の優先する暖温帯常緑広葉樹林が大幅に減少し、マツ属の優占する林に移り変わったことがうかがえる。時代を特定できる遺物などは出土しなかったが、第１層は旧耕土でありHP-１やHP-３からはワタ属の花粉が産出することから、Ⅱ帯の地層は近世以降に堆積したと考えられる。したがって、この時代のマツ属の優占する林は、暖温帯常緑広葉樹林を伐採した後のアカマツの二次林であると思われる。

４－２　25-３グリッド

このグリッドの試料からはあまり花粉が産出しなかったが、同じ層準から試料を採取しているので、比較的花粉が産出したHP-３-５とHP-３-10を中心に第３面の地層が堆積した時代の環境を考える。

植生はアカガシ亜属が優占しクリ属やシイ属-マテバシイ属などがまじる暖温帯常緑広葉樹林で、気候は現在の大阪平野と同じぐらいの温かさであったと推定される。

ヨモギ属が高率に産出することから、第３面の時代に25-３グリッドには乾燥した草地があったと考えられる。また、花粉は紫外線や土中の細菌によって花粉膜が傷み化石として残らないこともあることから、花粉があまり産出しない第３面の地層は、しばしばあるいは相当長い間乾燥し太陽光を直接あびる環境にあった可能性がある。25-３グリッドの第３面にみられた溝がほぼ平行に複数本並ぶ遺構は畑状遺構あるいは畝状遺構に類似していて、第３面の遺構が畑の跡であるとする解釈と花粉分析の結果は矛盾しない。ただ、栽培種の可能性がある植物の花粉は産出しなかった。

５．他の遺跡との比較

久宝寺遺跡の周辺には亀井遺跡や加美遺跡、瓜生堂遺跡など多くの遺跡が点在している。これらのうち、今回分析をした古墳時代に堆積した地層があり、その地層の花粉分析を行っているいくつかの遺跡の分析結果と今回の分析結果を比較する。

亀井遺跡では、含貝海成層の直下から弥生時代そして古墳時代前期～中期の地層およびそれ以後の地層が分析されている（那須・坂本，1980）。那須・坂本（1980）では遺跡周辺の基本的な森林植生はカシ林を主とする暖温帯照葉樹林で、この森林植生は古墳時代まであまり極端な破壊を受けなかったと考えられている。

瓜生堂遺跡ではＤ地区、Ｅ地区、Ｆ地区、H地区、Ｉ地区、Ｊ地区において弥生時代から庄内式期、古墳時代の地層が分析されている（安田，1980，1981，1982など）。安田（1981）では、古墳時代の瓜生堂遺跡周辺にはカシやシイの照葉樹林が存在したと考えられている。そして、遺跡周辺で照葉樹林が切り開かれアカマツの二次林が拡大するのは歴史時代おそらく近世以降のことであると考えられている。

以上、久宝寺遺跡の周辺の遺跡でも古墳時代の遺跡周辺には暖温帯の常緑広葉樹林（照葉樹林）が広がっていたことがうかがえる。そして、この常緑広葉樹林が大きく破壊されアカマツの二次林が拡大するのはずっと後の時代であると考えられる。

６．まとめ

今回の花粉分析では、以下のことが明らかになった。

(1)　25-4グリッドで試料を採取した地層は花粉化石群集にもとづき下位よりＩ帯の①亜帯、②亜帯、③亜帯とⅡ帯に分帯される。

(2)　Ｉ帯の地層が堆積した時代の遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占する暖温帯の常緑広葉樹林で、現在の大阪平野と同じぐらいの暖かさであったと考えられる。

(3)　Ｉ帯のうち①亜帯の時代には稲作などの人間活動が遺跡周辺であり、森林をわずかに破壊したと考えられる。その後、②亜帯そして③亜帯の時代には人間活動が少なくなり、森林が徐々に回復したと考えられる。

(4)　Ⅱ帯の地層が堆積した時代の遺跡周辺の植生はマツ属の針葉樹林で、これは人間による暖温帯常緑広葉樹林破壊後のアカマツの二次林であると思われる。

(5)　25-3グリッドの第３面にみつかった遺構は畑の跡であるとする解釈と、花粉分析の結果は矛盾しない。

７．文献

那須孝悌・坂本清子，1980：花粉分析。亀井・城山 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書―本文編―，Ｐ423-431．大阪文化財センター

安田喜憲，1980：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析Ⅱ。瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，Ｐ427-436．大阪文化財センター

安田喜憲，1981：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析（Ⅲ）。瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，Ｐ347-371．大阪文化財センター

安田喜憲，1982：瓜生堂・巨摩廃寺遺跡の泥土の花粉分析。巨摩・瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，Ｐ321-360．大阪文化財センター

安田喜憲，1983：若江北遺跡Ａトレンチ北壁の花粉分析。若江北 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，Ｐ75-78．大阪文化財センター

図　　版

図版 I

1　アカガシ亜属（HP-28）

2　コナラ亜属（HP-17）

3　アカメガシワ属（HP-27）

4　シイ属-マテバシイ属（HP-15）

5　クリ属（HP-15）

6　カバノキ属（HP-29）

7　ヤマモモ属（HP-7）

8　ニレ属-ケヤキ属（HP-31）

9　エノキ属-ムクノキ属（HP-28）

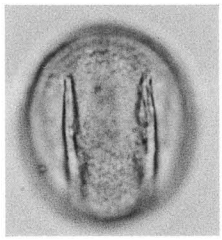
10　ツツジ科（HP-19）

11　トチノキ属（HP-17）

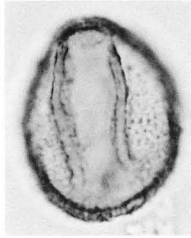
12　モチノキ属（HP-16）

13　スイカズラ属（HP-17）

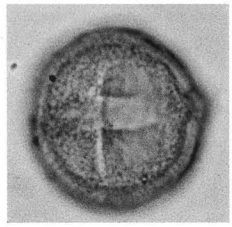
図版 I



1



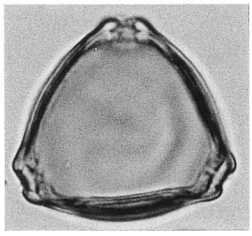
2



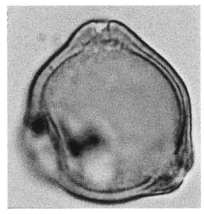
3

4

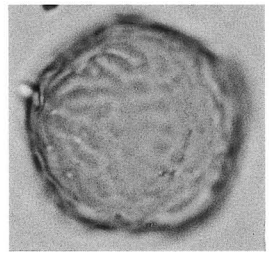
5



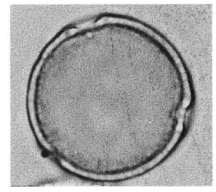
6



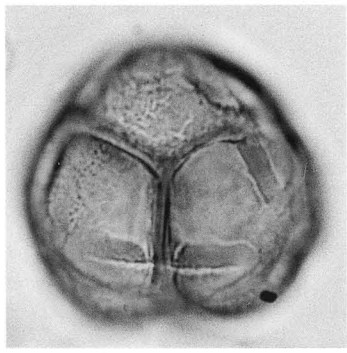
7



8

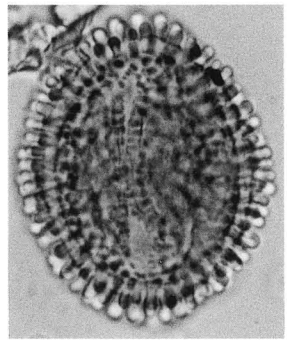


9

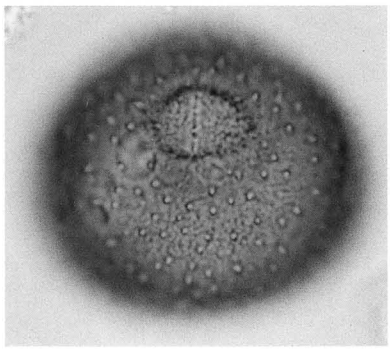


10

11



12



13

図版Ⅱ

1　二葉マツ類（複雑管束亜属）(HP-29)

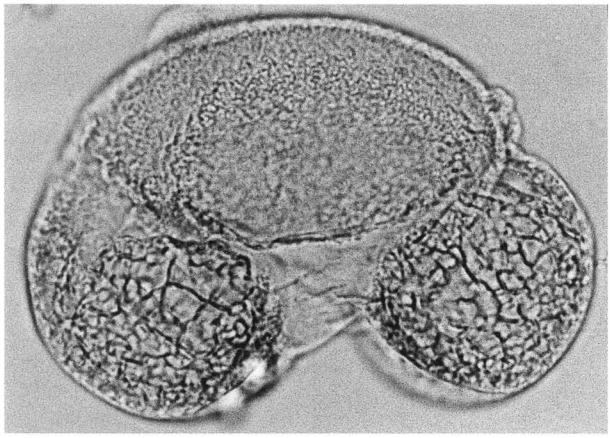
2　スギ（HP-29）

3　五葉マツ類（単雑管束亜属）(HP-29)

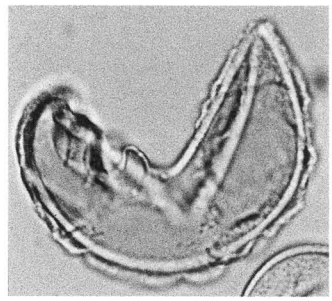
4　ツガ属（HP-17）

5　モミ属（HP-17）

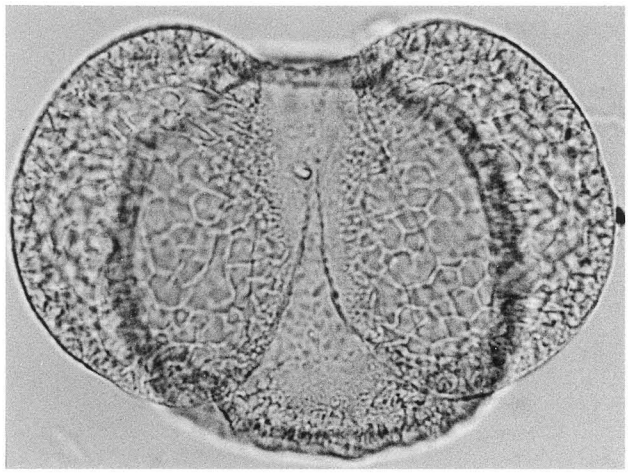
図版Ⅱ



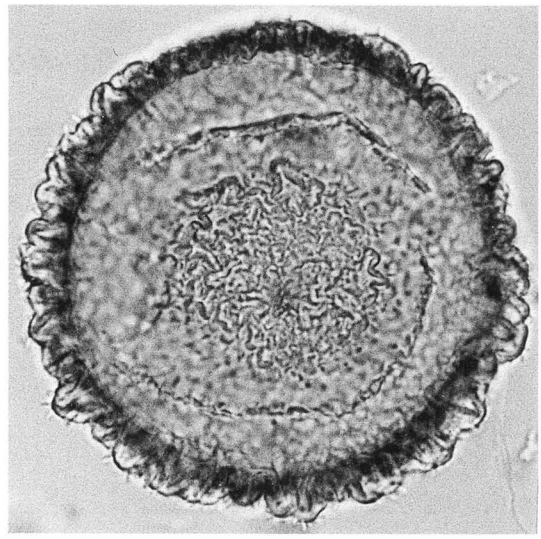
1



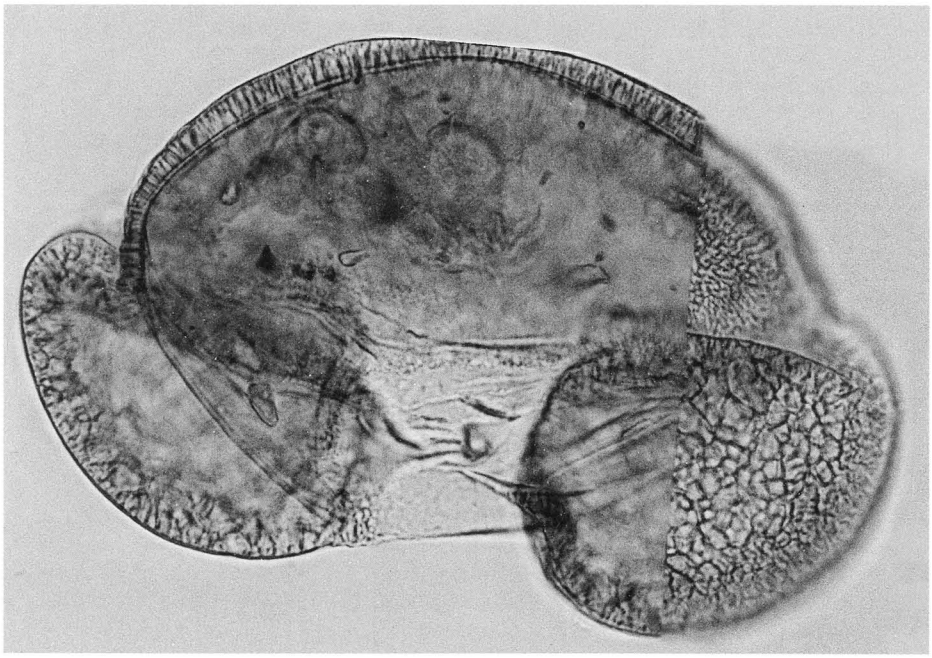
2



3



4



5

図版Ⅲ

1　ヒシ属（HP-9）

2　ガマ属（HP-20）

3　ヒツジグサ属（HP-29）

4　オモダカ属（HP-29）

5　ワタ属（HP-3）

6　ナデシコ科（HP-17）

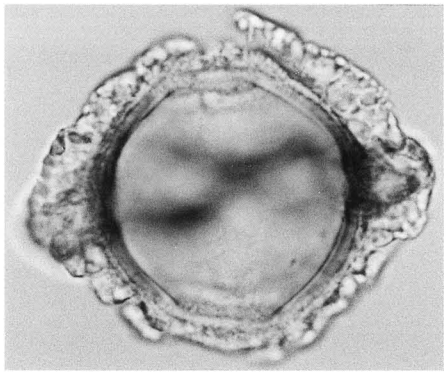
7　キク亜科（HP-17）

8　キンポウゲ属（HP-3）

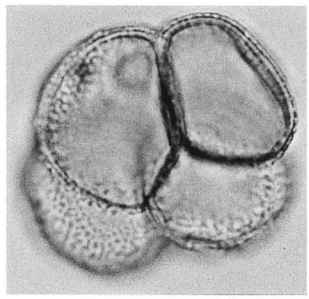
9　タンポポ亜科（HP-29）

10　ヨモギ属（HP-7）

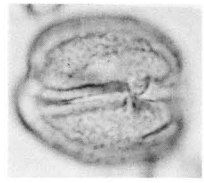
図版Ⅲ



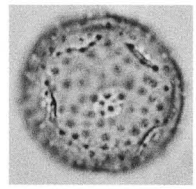
1



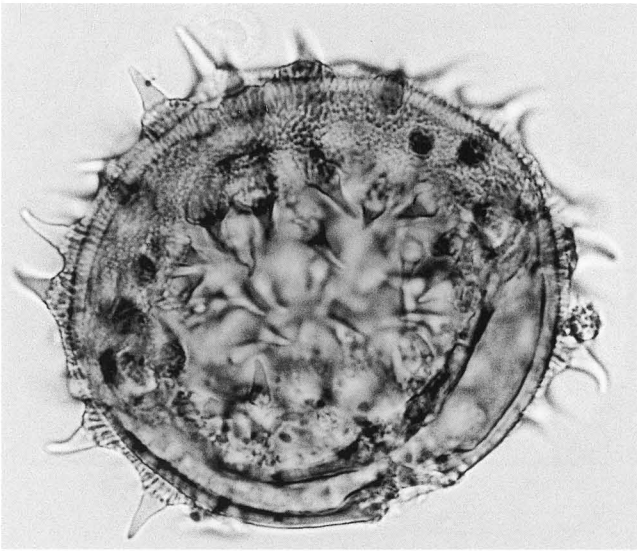
2



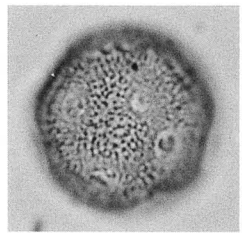
3



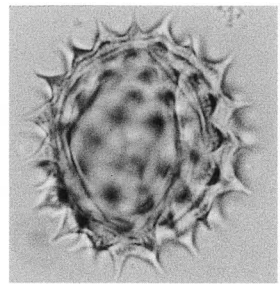
4



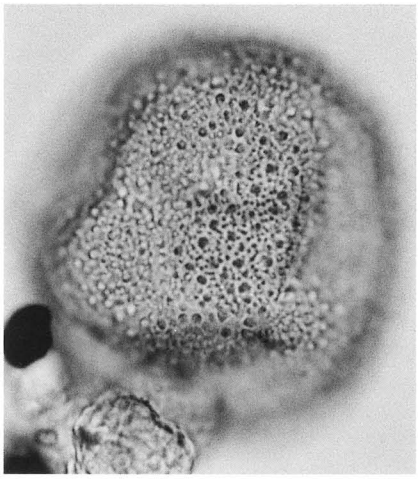
5



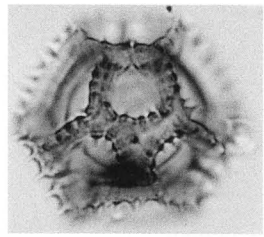
6



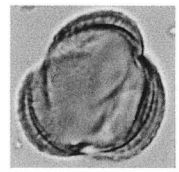
7



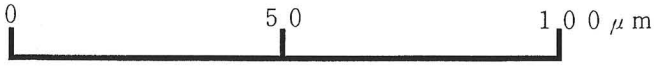
8



9



10



図版Ⅳ

1　サナエタデ節-ウナギツカミ節（HP-27）

2　カヤツリグサ科（HP-21）

3　イネ科（HP-7）

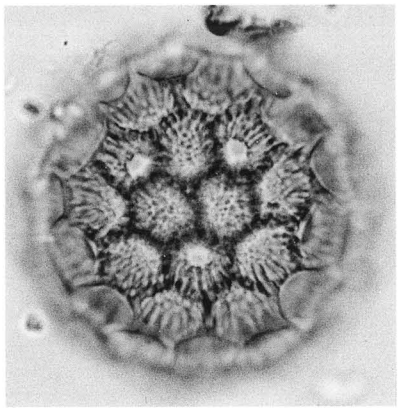
4　ハナヤスリ属（HP-4-7HP-15）

5　トウゲシバ亜属（HP-4-7HP-15）

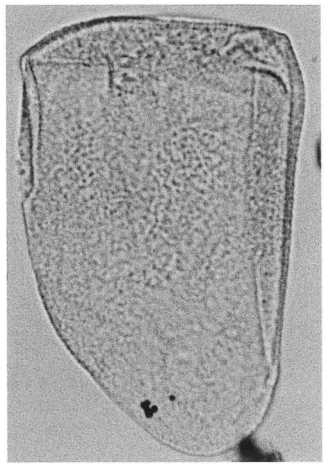
6　トウゲシバ亜属（HP-4-7HP-29）

7　土壌菌（HP-4-7）

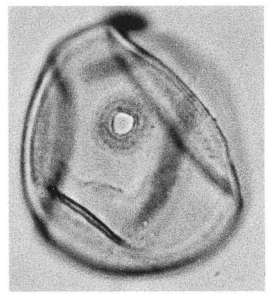
図版Ⅳ



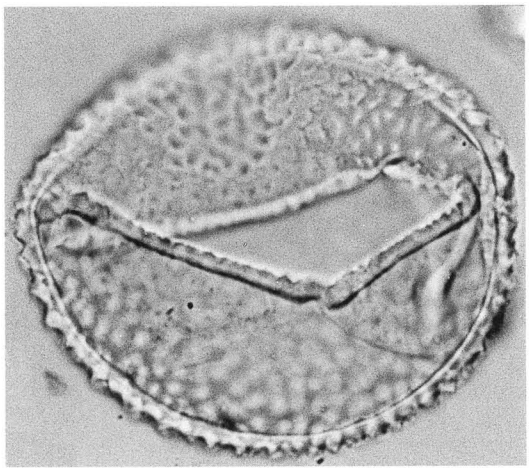
1



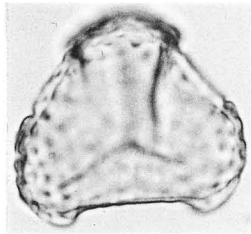
2



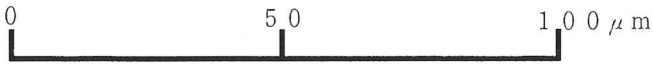
3

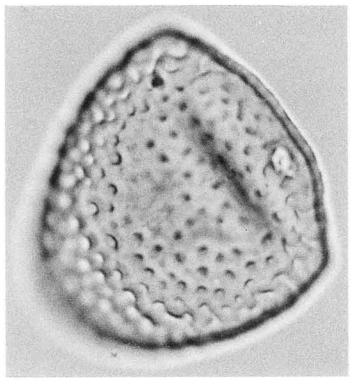


4



5





6

7

第５章　まとめ

今回、実施した久宝寺遺跡第25次（ＫＨ98－25）の発掘調査は、大阪竜華都市拠点地区の基盤整備事業に伴う新設道路予定地（竜華東西線・区画道路３号線・区画道路４号線）を調査対象としたものである。調査は９箇所の調査区（ＫＨ98－25－１～ＫＨ98－25－９）に区分して実施した。そのうち、竜華東西線を対象とした２・３調査区（ＫＨ98－25－２・３）が比較的調査面積が大きい他は、区画道路３号線・区画道路４号線では１調査区（ＫＨ98－25－１）を除けば20m²に満たない小規模な調査区であった。

調査の結果、弥生時代後期～古墳時代後期に至る遺構・遺物が検出され、久宝寺遺跡西部での考古学的な知見を新たに加える結果となった。ここでは、周辺で実施された既往調査成果を含めて、古墳時代初頭後半（庄内式新相）～古墳時代後期の集落推移を概観してみたい。

・弥生時代後期

明確に弥生時代といえる遺構は検出されなかったが、包含層や下層確認トレンチで土器が少量出土している。３調査区第４面で検出された遺構の時期は明確ではないが、西部において遺存状態良好な手焙形土器が出土していることから、第４面が弥生時代後期末に相当する可能性がある。また周辺に当該期の集落が存在する可能性を示唆する遺物といえよう。西方の亀井北（その２）では同一面に弥生時代後期、古墳時代前期の遺構が形成されている。

・古墳時代初頭後半～前期前半（庄内式新相～布留式古相）

当該期の遺構は３・５～９調査区第３面、７調査区第２面で検出されており、調査地西部で南北方向に展開したことが想定される。各調査区の標高は、北部の７調査区がT.P.＋5.9～5.8m、南部の３調査区がT.P.＋5.6～5.4mで、最大で0.5mの標高差が認められた。南部の３調査区付近の標高が低い点については、３調査区の中央部から東部で検出されたＮＲ301に起因するものと推定される。検出された遺構についても、この標高差に符合した拡がりが想定され、標高の低い南部の３調査区、５調査区、６調査区では畑作を中心とした生産域を構成したものと推定される多条の小溝が検出されており、北部の標高の高い７調査区では、居住域を構成する遺構が検出されている。３調査区第３面では、同一方向に同規模の小溝を多条に配する溝群が検出された。これらの遺構群は、その形状および規則性や埋土の均一性、更には出土遺物が少量である点から勘案して、畑作を中心とした生産域に関連した遺構であると推定され畑状遺構とした。既往調査では、亀井北（その１）や北部の久宝寺遺跡第23次調査２調査区（ＫＨ97－23－２）で同様の小溝群を配する遺構が検出されており、調査地周辺一帯では当該期にこのような形状の遺構を残す土地利用方法が行われていたようである。なお今回実施した花粉分析においては、長期にわたって太陽光を直接浴びる乾燥した環境が復元され、畑であるとする解釈と矛盾しないものの、栽培種の可能性がある植物の花粉は産出しなかった。亀井北（その１）で検出された小溝群に関連した花粉分析の結果報告においても、栽培植物の花粉検出が期待されたが、土壌の酸化状況が強かったためか、花粉は検出されておらず栽培植物を限定するに至っていない。一方、当該期の居住域としては調査区の北側に隣接する第９次調査（ＫＨ91－９）・第22次調査（ＫＨ97－22）・第27次調査（ＫＨ99－27）で検出されている。７調査区で検出した遺構については、第９次調査で検出された

当該期の居住域に含まれるものと考えられる。墓域としては、西部の亀井北(その１)・亀井北(その２)、北部の第22次調査で方形周溝墓が、またＮＲ301を隔てた東側では、東接する第37次調査(ＫＨ2001－37)やその北側の第９次調査で古墳・土器棺墓からなる墓域が検出されている。

・古墳時代前期後半(布留式新相)

１～３・７・９調査区第２面で自然河川および溝・土坑が、概ね３調査区の中央部より東で検出されている。１～３・９調査区で検出されたＮＲ301は、南側の第36次調査(ＫＨ2000－36)から続く自然河川である。第36次調査地と同様、埋土中で切り合いが認められることから、流路を変えつつこの時期に埋没し機能を停止している。ＮＲ301埋没後は第１面の水田が営まれるようになるまで長く湿地状の環境にあったようで、散発的に遺構が検出されるのみである。なお７調査区で検出した土坑については、北側の第９次調査で確認されている集落域に包括されるものであろう。

・古墳時代後期

１～３・５・６調査区第１面の標高T.P.＋6.1～5.9m付近で水田遺構が検出されている。比較的規模の大きい畦畔で区画された水田であるが、統一された規則性が見出せず、おそらく微地形に規制され、それに沿った水田構築が行われたものと推定される。灌漑水利についても、明瞭な水口が無いため高低差を利用した導排水が行われたものと推定される。北接する第９次調査では、南東－北西に伸びる当該期の自然河川が検出されており、この自然河川より導水を行った可能性が高い。なお、水田面を覆う土層中に砂粒が含まれておらず、粘性が高い粘土中に自然木や植物遺体が多量に含まれていることから、水田遺構の廃棄後は抽水植物が繁茂する沼沢地状の環境であったことが想定される。同時期の水田は西100m地点の亀井北(その２)・亀井北(その３)、東の第37次調査で検出されており、今回の調査地を含めて東西方向に少なくとも250m以上に渡って広がることが確認された。

参考文献

・服部文章他　1986『亀井北（その１)』(財)大阪文化財センター
・奥 和之・山上　弘　1986『亀井北（その２)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・竹原伸次他　1986『亀井北（その３)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・成海佳子　1992「13．久宝寺遺跡第９次調査（ＫＨ91－９)」『平成３年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区区画道路２号線に伴う－　(財)八尾市文化財調査研究会報告68』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則・岡田清一・古川晴久・樋口　薫・吉田珠己　1999「10．久宝寺遺跡第23次調査（ＫＨ97－23)」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・西村公助　2000「10．久宝寺遺跡第27次調査（ＫＨ99－27)」『平成11年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則・金親満夫　2004「Ⅲ久宝寺遺跡（第37次調査)」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会

図　　版

図版一

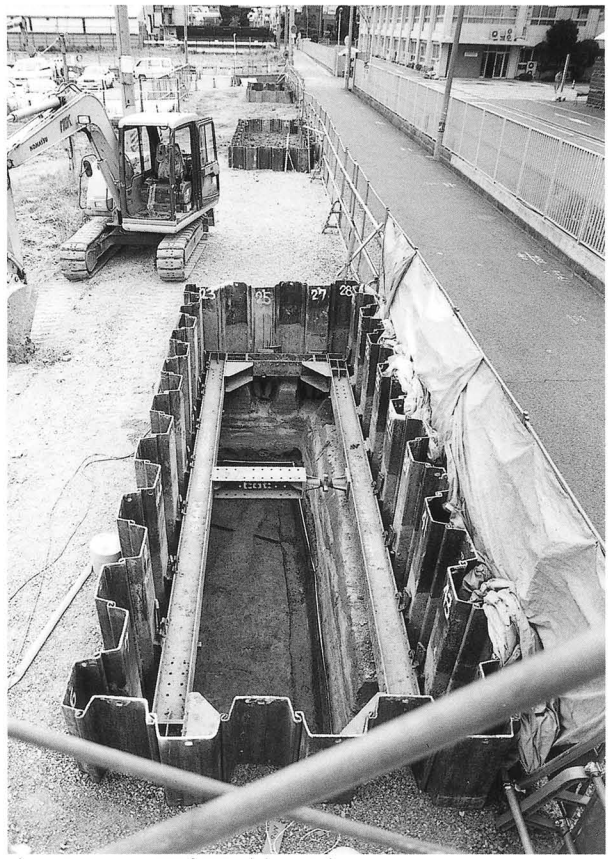
調査地より北東方向を望む

調査地より南西方向を望む

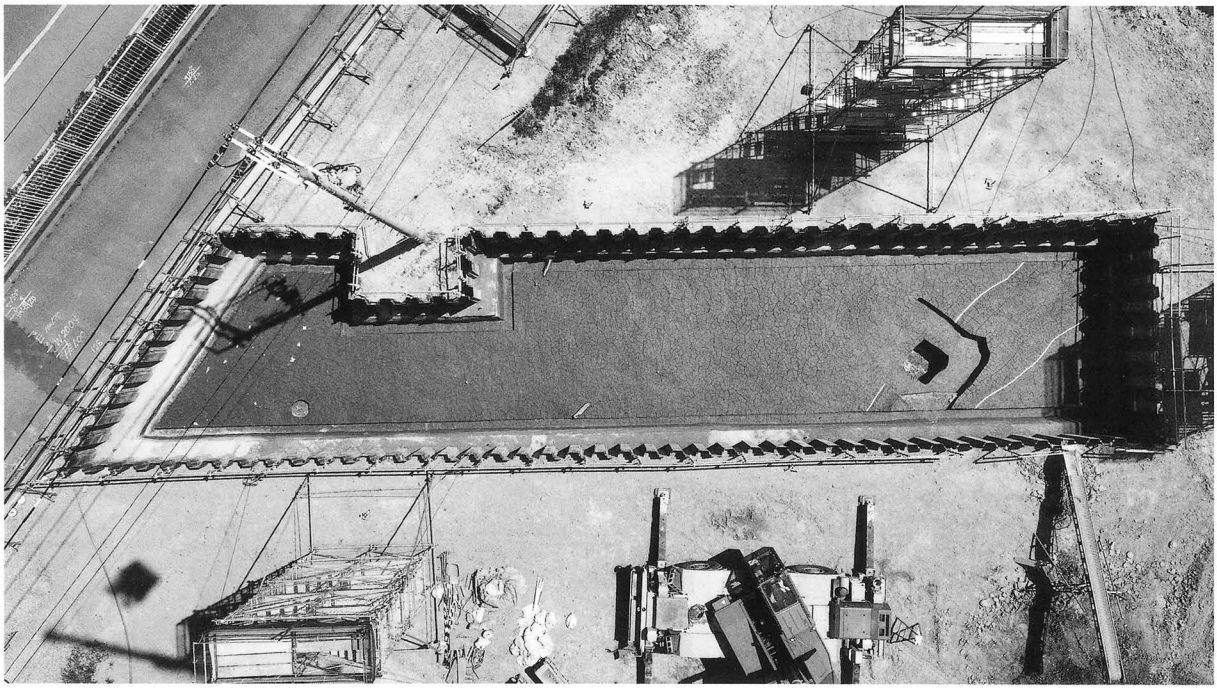
図版二

2・3調査区（北東から）

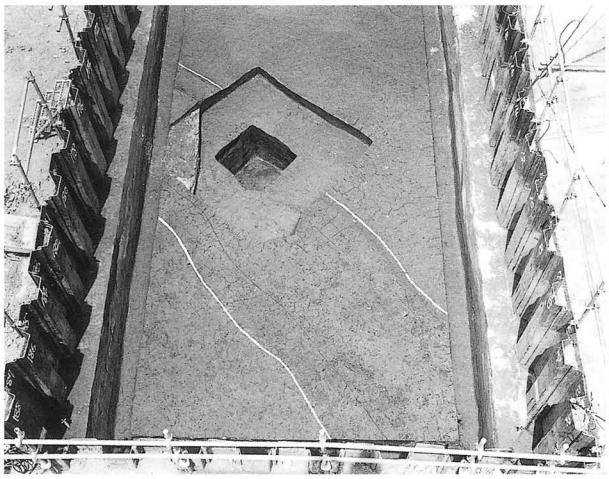
奥から4～6調査区（北から）



奥から7～9調査区（東から）

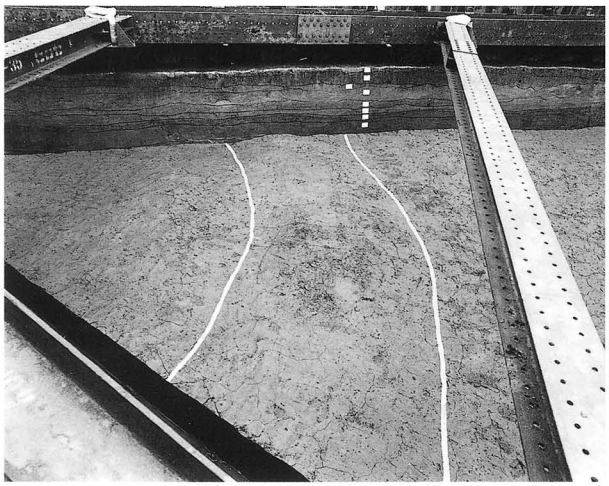


1 調査区第 1 面（上が北東）



1 調査区畦畔101（南東から）

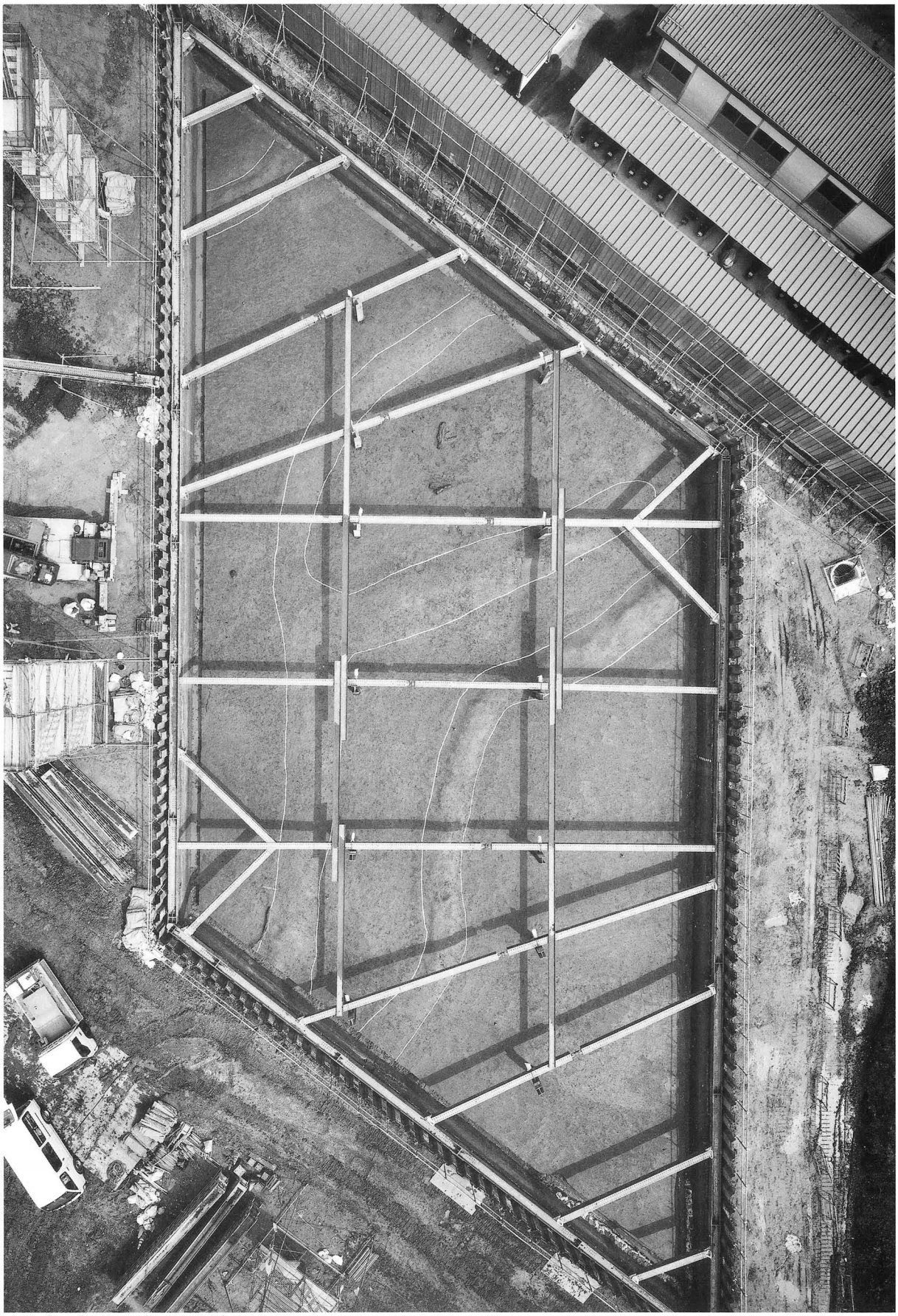
1 調査区畦畔101南西壁（北から）



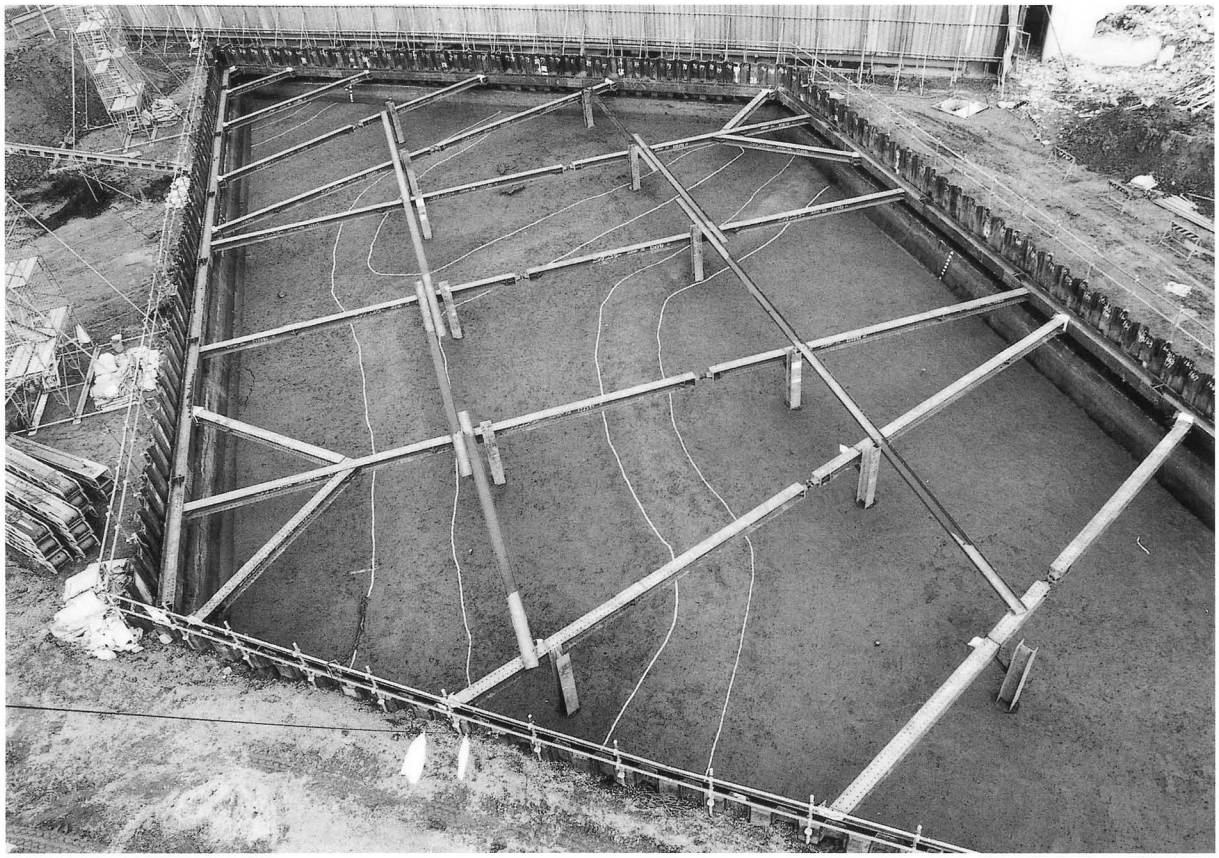
2 調査区畦畔101（北西から）

2 調査区畦畔104西壁（東から）

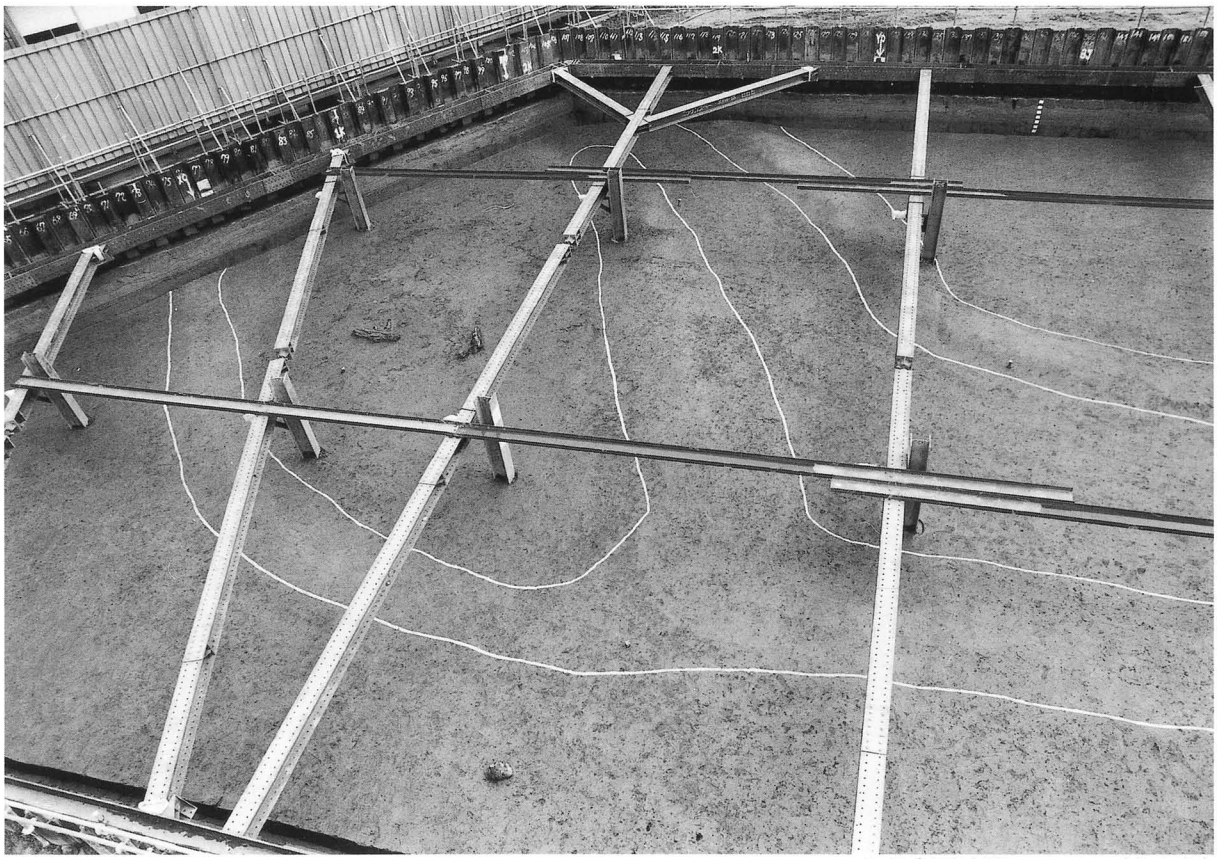
図版四



2 調査区第 1 面（上が北東）



2調査区第1面（南西から）

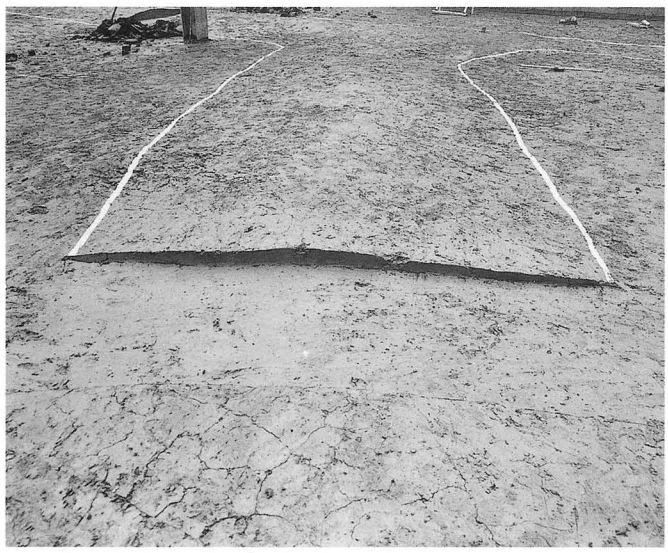


2調査区畦畔102～104（北から）

図版六

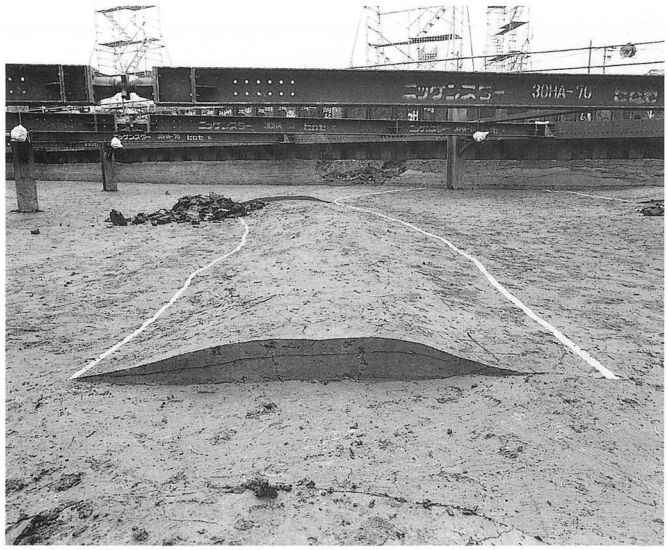
2調査区畦畔102断面②（東から）

2調査区畦畔102断面③（東から）



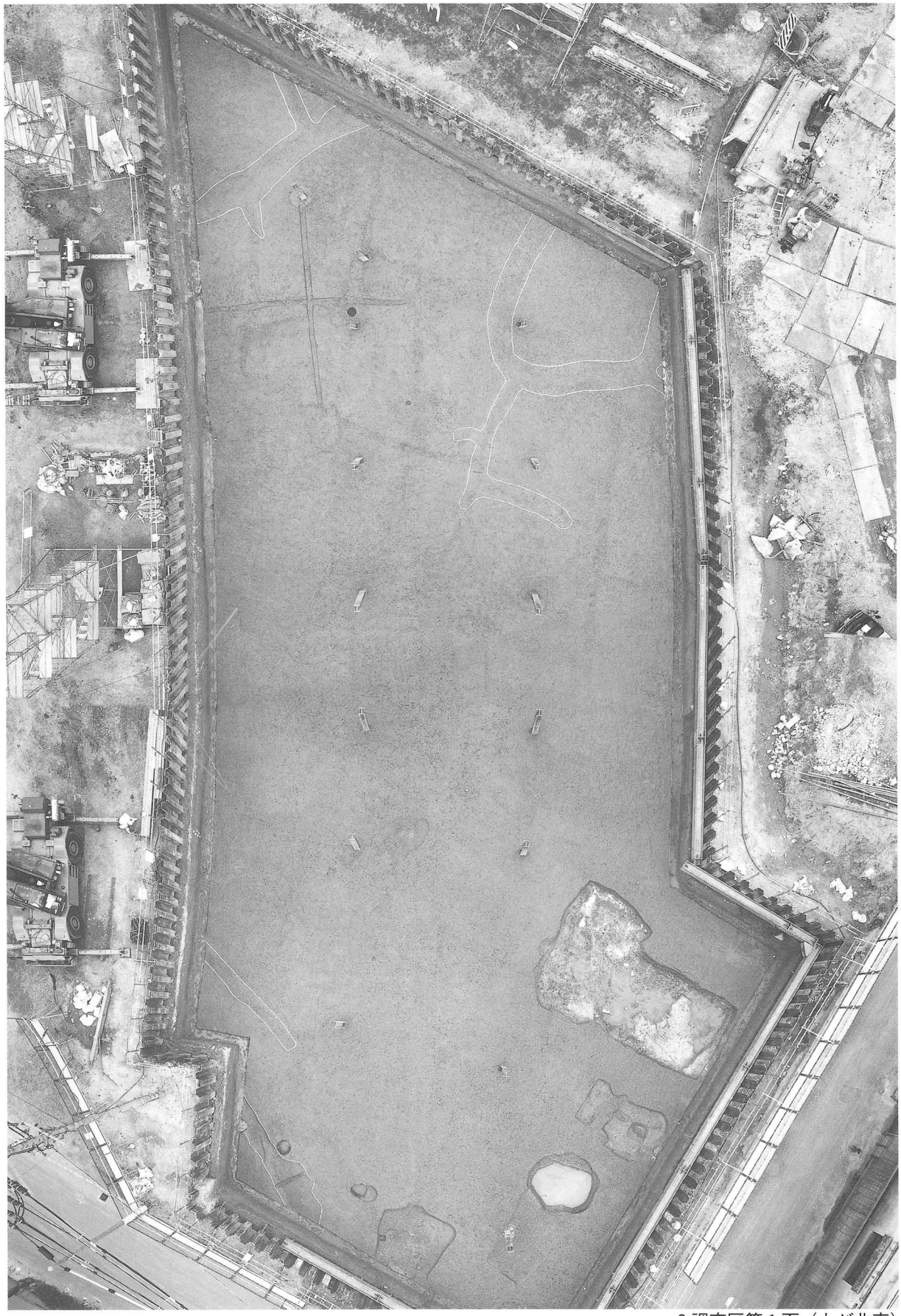
2調査区畦畔103断面④（南東から）

2調査区畦畔101断面①（東から）



2調査区畦畔104断面⑤（南東から）

2調査区水田105内足跡（北西から）



3 調査区第 1 面（上が北東）